四街道市郷遺跡・中久喜遺跡

一物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ —

平成20年9月

独立行政法人 都市再生機構 財団法人 千葉県教育振興財団

四街道市郷遺跡·中久喜遺跡

一物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 一



財団法人千葉県教育振興財団(文化財センター)は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第605集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市郷遺跡及び中久喜遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から中・近世まで、多くの遺構・遺物が出土しました。特に奈良・平安時代の集落の一部や、台地斜面部を利用した中・近世の墓所や水場遺構が発掘され、千葉県の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財保護に対する理解を深めるための資料として、広く活用されることを願っております。 終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をは じめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおか けした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成20年9月

財団法人 千葉県教育振興財団 理事長福島義弘

凡 例

- 1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2. 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井838-1ほかに所在する郷遺跡(遺跡コード228-021)及 び物井1240-1ほかに所在する中久喜遺跡(遺跡コード228-018)である。
- 3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県文 化財センター(平成17年9月1日以降は機構改革により財団法人千葉県教育振興財団)が実施した。
- 4. 発掘調査及び整理作業の期間、担当者等は、以下のとおりである。

郷遺跡(第1次)平成9年度

調査期間 平成10年1月7日~3月26日 調査担当者 小原 邦夫、井上 哲朗 対象面積 5.600㎡

(第2次) 平成10年度

調査期間 平成10年4月1日~5月12日

調査担当者 綿貫 貴

対象面積 1,700㎡

(第3次) 平成12年度

調査期間 平成13年2月1日~2月28日

調查担当者 立石 圭一

対象面積 1.050m

中久喜跡 調査期間 平成8年6月1日~8月9日

調査担当者 伊藤智樹

対象面積 3.100㎡

整理作業 (郷遺跡、中久喜遺跡とも)

整理期間 平成19年4月1日~平成20年3月31日

整理担当者 沼澤 豊

- 5. 本書の執筆、編集は上席研究員沼澤豊が行った。
- 6. 発掘調査から報告書の刊行に至る間において、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員 会、独立行政法人都市再生機構の指導、協力を得た。
- 7. 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(平成10年6月)

第3図 同上及び「千葉東部」(平成10年)を縮尺1/50,000に変更して使用

第2、5、6、57、58図 独立行政法人都市再生機構による物井地区現況図

- 8. 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
- 9. 本書で使用した図面の方位は、すべて調査時の旧公共座標(国家標準直角座標第IX系)である。

本文目次

第1	章	はじめに	1
第	1節	ⅰ 調査の概要	1
	1	調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	2	調査の方法	
第	2節	遺跡の位置と環境	7
		遺跡周辺の地形	
	2	周辺の遺跡	7
第2	章	郷遺跡 ····································	
第	1節		
		台地上平坦部(A 地点) ···································	
		台地北側斜面部 (B地点)	
	3	台地南東斜面部(C地点)	
第	2節		
		住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		土坑	
		溝······	
	4	その他の遺構	
第	3節		
第	4節		
	1	C地点の概況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
		上段区画内の遺構と遺物	
		1)地下式坑	
	(2	2)土坑	60
第	5節		
		竪穴住居跡	
		掘建柱建物跡	
		水場遺構	
		溝······.,	
		その他の土坑	
		C 地点表土中出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	7	その他の遺物	92
笛の音	容	中久 宣遣跡	OΕ
	-	TT (A IPS 1870)	

第1領	6 検出した遺構と遺物		95
1	検出した遺構の概要	•••••	95
2	竪穴住居跡	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	98
3	溝		107
4	土坑		107
5	グリッド採集の遺物	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	116
第4章	まとめ	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	121
第1頁	6 郷遺跡		
1	住居跡の時期その他	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
2	南東斜面部の遺構の性格		122
第2負	6 中久喜遺跡	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
1			
2	土坑群について	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
抄録		•••••	巻末
	挿 図	目 次	•
	*. —	. ,	
笙 1 図	遺跡の位置と国辺の地形 2	箆19図	ST-011住屋跡と出土遺物22
第1図	遺跡の位置と周辺の地形2 物井地区遺跡分布図3	第18図 第19図	SI-011住居跡と出土遺物 ······32 SI-012住居跡と出土遺物 ·····34
第2図	物井地区遺跡分布図3	第19図	SI-012住居跡と出土遺物 ······34
第2図 第3図	物井地区遺跡分布図・・・・・・3 周辺の遺跡分布図・・・・・・4	第19図 第20図	SI-012住居跡と出土遺物34 SI-013住居跡と出土遺物35
第2図 第3図 第4図	物井地区遺跡分布図3周辺の遺跡分布図4グリッドの設定法5	第19図 第20図 第21図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36
第2図 第3図 第4図 第5図	物井地区遺跡分布図 3 周辺の遺跡分布図 4 グリッドの設定法 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況 11	第19図 第20図 第21図 第22図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38
第2図 第3図 第4図 第5図 第6図	物井地区遺跡分布図 3 周辺の遺跡分布図 4 グリッドの設定法 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図 12	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40
第2図 第3図 第4図 第5図 第6図 第7図	物井地区遺跡分布図3周辺の遺跡分布図4グリッドの設定法5郷遺跡の地形と遺構検出状況11郷遺跡下層確認グリッド配置図12郷遺跡台地上(A地点)の遺構群13	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42
第 2 図 第 3 図 第 4 図 第 5 図 第 7 図 第 8 図	物井地区遺跡分布図・・・・ 3 周辺の遺跡分布図・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・ 12 郷遺跡台地上(A地点)の遺構群・・・ 13 郷遺跡南東斜面部(C地点)の遺構群・・・ 15	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44
第 3 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	物井地区遺跡分布図・・・・ 3 周辺の遺跡分布図・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・ 12 郷遺跡台地上(A地点)の遺構群・・・ 13 郷遺跡南東斜面部(C地点)の遺構群・・・ 15 SI-001住居跡と出土遺物・・・・ 17	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45
第 3 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	物井地区遺跡分布図・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・・ 12 郷遺跡台地上 (A地点)の遺構群・・・ 13 郷遺跡南東斜面部 (C地点)の遺構群・・・ 15 SI-001住居跡と出土遺物・・・ 17 SI-003住居跡・・・・ 19	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 11 図 図 図 図 図 図 図	物井地区遺跡分布図・・・・・ 3 周辺の遺跡分布図・・・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・・ 12 郷遺跡台地上(A地点)の遺構群・・・ 13 郷遺跡南東斜面部(C地点)の遺構群・・・ 15 SI-001住居跡と出土遺物・・・・ 17 SI-003住居跡 ・・・ 19 SI-004住居跡と出土遺物・・・・ 20	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図 第28図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図 (1) 47 A地点・土坑実測図 (2) 48
第 3 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	物井地区遺跡分布図・・・・ 3 周辺の遺跡分布図・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・ 12 郷遺跡台地上(A地点)の遺構群・・ 13 郷遺跡南東斜面部(C地点)の遺構群・・ 15 SI-001住居跡と出土遺物・・・ 17 SI-003住居跡・ 19 SI-004住居跡と出土遺物・・・ 20 SI-006住居跡と出土遺物・・・ 22	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 9 图 图 图 图 图	物井地区遺跡分布図・・・・・ 3 周辺の遺跡分布図・・・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・・ 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況・・・・ 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図・・・・ 12 郷遺跡台地上(A地点)の遺構群・・・ 13 郷遺跡南東斜面部(C地点)の遺構群・・・ 15 SI-001住居跡と出土遺物・・・・ 17 SI-003住居跡 ・・・ 19 SI-004住居跡と出土遺物・・・・ 20	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図 第28図 第29図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47 A地点・土坑実測図(2) 48 A地点・溝実測図 49
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 10 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図 図	物井地区遺跡分布図 3 周辺の遺跡分布図 4 グリッドの設定法 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図 12 郷遺跡南東斜面部 (C地点)の遺構群 13 郷遺跡南東斜面部 (C地点)の遺構群 15 SI-001住居跡と出土遺物 17 SI-003住居跡と出土遺物 20 SI-006住居跡と出土遺物 22 SI-007住居跡と出土遺物 23 SI-008住居跡と出土遺物 24	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図 第28図 第29図 第30図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47 A地点・土坑実測図(2) 48 A地点・溝実測図 49 A地点・住居跡以外からの出土遺物 51 B地点の出土遺物 54
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 112図図図図図図図図図図	物井地区遺跡分布図・・・・・ 4 グリッドの設定法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図 第28図 第29図 第30図 第31図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47 A地点・土坑実測図(2) 48 A地点・溝実測図 49 A地点・住居跡以外からの出土遺物 51
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 111 2 2 2 2	物井地区遺跡分布図 3 周辺の遺跡分布図 4 グリッドの設定法 5 郷遺跡の地形と遺構検出状況 11 郷遺跡下層確認グリッド配置図 12 郷遺跡南東斜面部 (C地点)の遺構群 13 郷遺跡南東斜面部 (C地点)の遺構群 15 SI-001住居跡と出土遺物 17 SI-003住居跡と出土遺物 20 SI-006住居跡と出土遺物 22 SI-007住居跡と出土遺物 23 SI-008住居跡と出土遺物 24	第19図 第20図 第21図 第22図 第23図 第24図 第25図 第26図 第27図 第28図 第30図 第31図 第32図	SI-012住居跡と出土遺物 34 SI-013住居跡と出土遺物 35 SI-014住居跡と出土遺物 36 SI-014の出土遺物 38 SI-015、016住居跡と出土遺物 40 SI-017、018、019住居跡と出土遺物 42 SI-017、018、019の出土遺物 44 SI-020住居跡と出土遺物 45 A地点・土坑実測図(1) 47 A地点・土坑実測図(2) 48 A地点・溝実測図 49 A地点・住居跡以外からの出土遺物 51 B地点の出土遺物 54 C地点斜面上部・土坑群全体図 57

箆 1 実	中久喜遺跡・土坑一覧表		115
	表] 次	•
第51図	C地点斜面下部・内耳鍋破片出土状況図	第74図	中久喜遺跡出土縄文土器(2) 119
	87	第73図	中久喜遺跡出土縄文土器(1) 118
第50図	C 地点斜面下部・表土中出土遺物(1)	第72図	遺構外の出土遺物 117
	84	第71図	土坑実測図(4)及び出土遺物 113
第49図	C地点斜面下部・主な土坑の個別実測図	第70図	土坑実測図(3) 112
第48図	C地点斜面下部・出土遺物(2)81	第69図	土坑実測図(2) 111
第47図	C地点斜面下部・出土遺物(1)80	第68図	土坑実測図(1)及び出土遺物 109
	及びSD-102出土木製品 ·····76	第67図	SD-001実測図 108
第46図	C 地点斜面下部・SK - 110出土木製品(2)	第66図	SI-005住居跡と出土遺物 107
	75	第65図	SI-004の出土遺物 106
第45図	C 地点斜面下部・SK - 110出土木製品(1)	第64図	SI-004住居跡と出土遺物 105
	出土状況図72	第63図	SI-003住居跡と出土遺物 103
第44図	C 地点斜面下部・SK - 110木製品	第62図	SI-002住居跡と出土遺物 102
第43図	C 地点斜面下部・SK - 110実測図71	第61図	SI-001住居跡と出土遺物 ·····99
第42図	掘立柱建物北西区画溝内出土遺物70	第60図	中久喜遺跡の遺構群97
第41図	C 地点斜面下部・掘建柱建物跡実測図…69	第59図	下層基準土層図と出土遺物96
	出土状況図67	第58図	中久喜遺跡下層確認グリッド配置図96
第40図	C地点斜面下部・椀形滓・スラグ・羽口	第57図	中久喜遺跡の地形と遺構検出状況95
第39図	C地点斜面下部・SI-101の出土遺物 …67	第56図	郷遺跡出土銭94
	遺物66		93
第38図	C地点斜面下部・SI-101住居跡と出土	第55図	郷遺跡出土縄文土器・弥生土器及び石器
	(東半部)64		92
第37図	C地点斜面下部・遺構分布状況図	第54図	C 地点斜面下部・表土中出土遺物 (4)
	(西半部)63		91
第36図	C地点斜面下部・遺構分布状況図	第53図	C地点斜面下部・表土中出土遺物 (3)
	状況図62		90
第35図	C地点斜面上部・東半部の土坑分布	第52図	C地点斜面下部・表土中出土遺物 (2)
	状況図61		88

図版目次

図版3	SI-001全景・カマド内遺物出土状況	図版25	B地点出土土器
	SI-004全景・カマド部分	図版26	B 地点出土遺物、SI - 101出土土器
図版 4	SI-006全景・貯蔵穴内遺物出土状況	図版27	SI-101出土遺物、C地点出土土器
	SI-008全景、SI-009全景・カマド部分	図版28	C地点出土土器、同表土中出土遺物
図版5	SI-010全景・遺物出土状況全景・同近景	図版29	鉄器
図版 6	SI-011全景、SI-012全景、SI-014全景	図版30	鉄滓・羽口・五輪塔・板碑
図版 7	SI-015全景・016カマド、SI-017・018と	図版31	石器(1)
	019全景、SI-020全景	図版32	石器 (2)・銅銭・SK-110出土横材及び杭
図版8	$SK - 001$, $SK - 002 \cdot 003$, $SK - 005 \cdot 007$,	図版33	SK-110出土木製品(1)
	SK-009·011、SK-006·017·018、SK-	図版34	SK-110出土木製品 (2)、SD-102出土木
	019、SK - 022、SK - 023		製品
図版9	SK-024、SK-025、SD-002、SD-005、	図版35	縄文土器・弥生土器及び石器
	B地点発掘状況、トレンチ近景	図版36	中久喜遺跡航空写真
図版10	C地点発掘前の全景、C地点上段遺構全景	図版37	中久喜遺跡航空写真·同竪穴住居跡航空写真
図版11	SK-037・覆土断面、SK-040	図版38	SI-001全景・遺物出土状況・同近景
図版12	C地点下段遺構全景、掘建柱建物西半部の	図版39	SI-002全景·炭化材出土状況、SI-003全景
	状況	図版40	SI-003遺物出土状況、SI-004全景
図版13	SI-101全景・遺物出土状況、SK-152・	図版41	SI-004遺物出土状況、SI-005全景・遺物
	136・110の配置		出土状況
図版14	SK-110杭と横材(上半部)・同(下半部)、	図版42	SK-006, SK-037, SK-038, SK-009,
	完掘状態		SK-027·覆土断面、SK-033、SK-010·
図版15	SD-101、SD-102(SK-110からの流入		011
	部)・同(溝脇の杭列)、掘建柱建物の西北	図版43	SK-003、SK-004、SK-008、SK-014、
	を限る溝と周囲の土坑		SK-015, SK-017, SK-020, SK-024
図版16	SK-105・106・107・109 (掘建柱の一部)、	図版44	SK - 025, SK - 026, SK - 030, SK - 036,
	SK - 102、SK - 103、SK - 104、SK - 114、		SK-040、SK-031、SK-042、SK-041
	SK-115、SK-128、SK-130	図版45	SK-012, SK-013, SK-034, SK-039,
図版17	SI-001·004出土土器		SK-007、SK-019、SK-001、SK-005
図版18	SI-004·005·007·009出土遺物	図版46	SK-016, SK-018, SK-023, SK-035.
図版19	SI-009·010出土遺物		036、P-001·002、SD-001、下層確認グ
図版20	SI-010出土遺物		リッドの配置・下層遺物出土状況
図版21	SI-010·011·012出土遺物	図版47	SI-001・002・003・004出土土器
図版22	SI-013·014出土遺物	図版48	SI-004・005ほか出土土器・土製品
	SI-014・015・016出土遺物	図版49	縄文土器(1)
図版24	SI-016·017·020·A地点出土遺物	図版50	縄文土器(2)・石器

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

四街道市は県都千葉市に隣接するとともに、東京都と新東京国際空港を結ぶJR総武本線や東関東自動車道などの交通網が整備されたことなど、その利便性から近年人口増加が著しく、宅地の安定的供給が期待されている地域である。

住宅・都市整備公団(現・独立行政法人都市再生機構、以下「公団」という)では、JR総武本線物井駅と既存の「千代田団地」の間に広がる約95.7ヘクタールの地域において物井地区土地区画整理事業を計画した。事業の施行に当たり、区域内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育庁文化課(現・文化財課)と公団とのあいだで協議が重ねられた結果、一部について緑地、公園として現状保存するほか、大半の区域についてはやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、発掘調査は財団法人千葉県文化財センター(現・財団法人千葉県教育振興財団)が受託して実施することとなった。

物井地区の台地上には、ほぼ全面にわたって遺跡が分布している(第2図)。記録保存の対象とされたのは、今回報告する郷遺跡、中久喜遺跡をはじめとして、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、御山遺跡、新久遺跡、清水遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、棒山・呼戸遺跡、高堀遺跡、館ノ山遺跡、北ノ作遺跡、嶋越遺跡であり、昭和59年5月に棒山遺跡の調査が着手され、以後断続的に発掘調査が実施されている。現状保存される遺跡は古屋城跡と出口遺跡内の古墳群の一部となる。

今回報告する郷遺跡と中久喜遺跡は、共に事業区域の境界部に位置し、調査範囲は遺跡の一部にとどまり、遺跡の主要部は区域外に広がっているものと思われる。

郷遺跡の調査は3次にわたって行われた(各調査次は3地点に対応している)。調査期間、担当者等は次のとおりである。

平成9年4月1日 住宅都市整備公団(当時)と業務委託契約

平成10年1月7日~1月28日 一次調査地点(A地点) 確認調査実施(上層 2,620㎡/5,600㎡)

(下層 116㎡ /5,600㎡)

確認調査の結果、2,180㎡が本調査範囲として決定される

~3月26日 A地点 本調査実施

担当者 小原邦夫 井上哲朗

平成10年4月1日~5月12日 二次調査地点(B地点) 確認調査(上層 510ml/1,700ml)

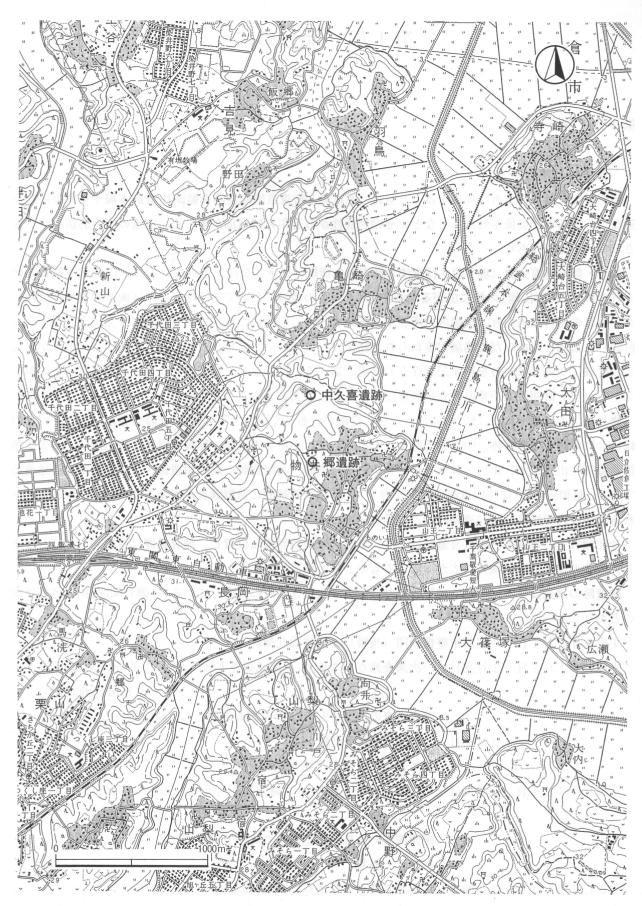
(下層 16㎡ /1.700㎡)

確認調査の結果、確認調査で終了と決定される

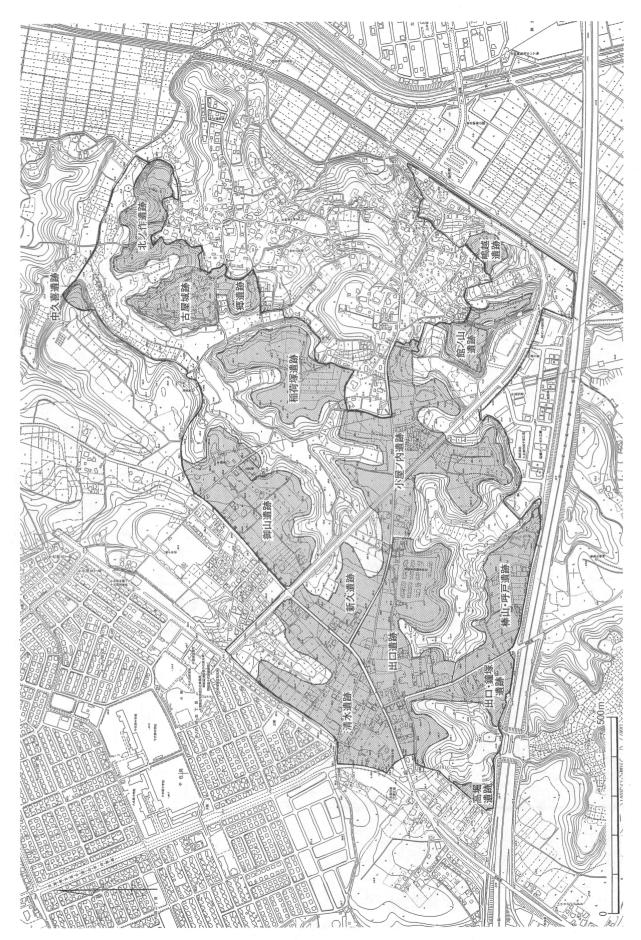
担当者 綿貫 貴

平成13年2月1日~2月28日 三次調査地点(C地点) 本調査実施(1,050㎡)

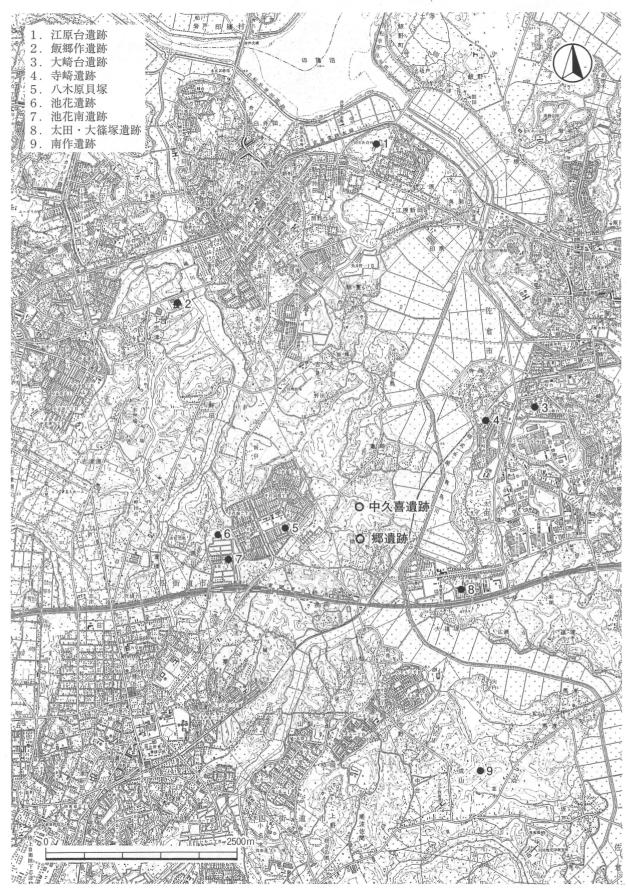
担当者 立石圭一



第1図 遺跡の位置と周辺の地形 (1/25,000)



第2図 物井地区遺跡分布図



第3図 周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

中久喜遺跡の調査期間、担当者等は次のとおりである。

調査期間 平成8年6月1日~8月9日 調査担当者 伊藤智樹 対象面積 3.100㎡

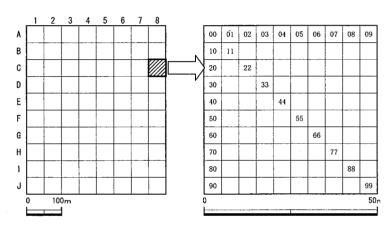
2 調査の方法

物井地区の調査においては、地区全体を公共座標に基づく方眼網で覆い、 $50m \times 50m$ の区画を大グリッドとしている。その呼称は、西から東に向かう行を1、2、3……、北から南に向かう列をA、B、C……とし、両者を組み合わせて大グリッド名としている。

郷遺跡の範囲は27、28、29、30の4列、G、H、Iの3行にかかる。台地上平坦部の遺構群(A地点)は主に28H、28I区に、台地南東部土坑群(C地点)は28I、29I区に、北側斜面部(B地点)は28H、29H区にかかっている(第5図)。

大グリッドは5m×5mの100個の小グリッドに分割され、西北端を起点に東へ00、01、02……09まで、1行南は10、11、12……19と進み、南東端の小グリッドが99となる。大グリッド名と小グリッド名を組み合わせて、28H-00のように呼称し、これによって5m四方の範囲が座標上で求められる(第4図)。

トレンチ調査や掘削機械による表土 除去の際に採集された遺物など、遺構



第4図 グリッドの設定法

に伴わない遺物は大グリッド又は小グリッドの名称で注記され、出土のポイントがおさえられるようになっている。ほかに、トレンチごとに取り上げられた遺物も若干ある。

遺構名については文化財センターの統一基準により、竪穴住居跡にSI、掘建柱建物にSB、土坑・炉穴に SK、溝にSD、古墳の周溝その他性格不明の落込みをSXとし、種別ごとに検出順でSI-001、SI-002…… のように連続番号を付けた。調査終了後の検討作業によって、遺構とは認められないもの(郷遺跡のSI-002、005など)が若干認められたが、番号の順送りはせず、欠番のままとした。

遺物の注記は、遺跡コード(228-021)が1行目に、グリッド又は遺構番号、及び取り上げ順で付された遺物番号が2行目に記入されている。

郷遺跡

1次調査(A地点)では対象5,600㎡に対し約10%の面積のトレンチを設定し、手掘り作業によって遺構の有無、遺構面までの深さ、表土中における遺物の存在状況と種別などについて情報を収集し、その結果に基づいて本調査の範囲と方法を決定した。トレンチは台地平坦部のほか、台地の北、西、南側三方の緩傾斜面にも設定した。

台地平坦部では奈良・平安時代の土器を伴う竪穴住居跡などが確認され、この時期の集落の存在が確実

となった。斜面部ではほとんど遺構は認められなかったが、南東斜面の一画から中近世の台地整形区画と 土坑群が確認された。この結果に基づき、台地平坦面から南東斜面部にかけて2,620㎡が本調査範囲と決定 され、その範囲の表土を掘削機械で除去したあと、手作業で遺構プランの確定作業と遺構内の発掘作業を 実施した。

以上の上層本調査が終了したあと、下層の確認調査に移行し、台地平坦部を中心に2m×2mのグリッドを設定し、ローム層中の遺物の有無を確認した(第6図)。その結果、旧石器や剥片は確認されず、下層本調査は不要と決定され、平成10年3月26日をもって1次調査を終了した。

2次調査は、郷遺跡の北に隣接する古屋城跡とA地点とのあいだにある浅い谷(B地点)1,700㎡を対象として実施された。谷の傾斜に沿って幅2mほどのトレンチ(1~11トレンチ、図版9-1・2)を東西方向に設定したが、焼土堆積1か所(確認調査中に遺構内の精査まで終了)のほか遺構は確認されず、主に遺物採集に努めた。また、調査区の北側、やや平坦な部分に下層確認グリッドを4個設定したが旧石器や剥片は検出されなかった。以上の確認調査結果から、上層、下層とも本調査は必要なしと判断され、5月12日をもって調査を終了した。

平成9年度の1次調査では、A地点の住居跡群からやや離れた南東斜面部で土坑群が検出された。遺構は斜面下部にさらに広がっている可能性が予測されたため、発掘の条件が整った平成12年度に3次調査として調査が実施された。既出の土坑群とは、後世の道路状堀割によって分断されており、堀割の一部は深く掘削されて小さな池になっていた。その下方で南北方向に7本のトレンチを入れたところ、ほぼ全域で多数の土坑が確認されたため、対象地1,050㎡全域が本調査範囲と決定された。遺構は宝永火山灰層の下から検出されており、1次調査の結果とあわせて中近世の台地整形区画の存在が確認された(第8図)。下層については、台地斜面の低い位置のため、確認調査不要と判断された。

なお本書では、1次と3次調査で検出された斜面上部と下部の2つの遺構群を併せてC地点として報告する。

中久喜遺跡

基準点測量を実施したのち、確認調査は平成8年6月3日から6月12日まで、対象面積3,100㎡に対して10%の面積を手掘りトレンチ発掘する予定で着手し、実際には264㎡を発掘した。トレンチは東西に伸びる舌状台地に直交するように設定された。その結果、発掘区西部(台地基部側)で古墳時代前期の竪穴住居跡が複数確認され、台地縁辺部では時期、性格不明の土坑や溝、縄文時代後期の土器片や石鏃などが確認された(第57図)。その結果、これらの遺構が分布する範囲1,000㎡が本調査範囲と決定され、本調査を実施した。

上層の本調査が終了したあと下層の確認調査に移り、8月1日から8月9日まで、対象面積に対して2.6%、80㎡を発掘した(第58図)。台地縁辺部は傾斜面となり、関東ローム層の堆積が確認されなかったため、台地西半部にグリッドを集中した。その結果、2か所で石屑が各1点確認されたので周囲を拡張したが、それ以上遺物は確認されなかった。したがって本調査は不要と判断され、下層については確認調査までで調査終了となった。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡周辺の地形

郷遺跡

水郷地帯といわれる現在の利根川下流域は、近世初頭まで香取海といわれる内海であった。内海の名残が現在もこの地域に点在する大小の湖沼であり、千葉県においては印旛沼がその最大のものとなる。

印旛沼は現在干拓がすすみ東西に分断されているが、かつてはW字形の姿をもっていた。四街道市は、W字の左辺中央部に流れこむ手繰川と鹿島川(の支流小名木川)の源流部に位置し、市域の北端部に当たる物井地区の遺跡は両川の上流部にはさまれた洪積台地上に所在する。台地上は、東西の両川へつづく小支谷によって浸食され、樹枝状の複雑な地形を示す。物井地区の遺跡はすべて東の鹿島川側から侵入する支谷に面している(第1~2図)。

物井地区に東側から侵入する谷は大きくは2本で、郷遺跡、中久喜遺跡ともその北側の支谷に面している。この谷は東から入りこむとすぐ三股に分かれ、3つのY字部に北ノ作遺跡、中久喜遺跡、古屋城跡の3遺跡が立地している。支谷は古屋城跡の西側でさらに分岐するが、郷遺跡は南東に向けて侵入する谷の東岸台地上にある。この谷はなおしばらく南進したのち二股に分かれて終わる。

郷遺跡は古屋城跡の真南に位置するが、その間は幅40m、長さ100mほどの谷で隔てられる。この谷は浅く、水田面まで達しない。遺跡の南側も、ほぼ同じ状態の谷によって仕切られている。したがって、郷遺跡のある台地は、南北の浅い谷にはさまれた東西100m、南北70mほどの西側に突出する舌状の地形となっている。

台地上の平坦部の面積はせまく、東西60m、南北40mほどの範囲で、その周囲に若干の緩傾斜面があって、急傾斜面に移行する。奈良・平安時代以後の遺構はこの緩傾斜部でも検出されており、また台地南東部では斜面をかなり大規模に整形した区画も確認されている。

舌状台地基部の東には、東西200m、南北300mほどのかなり広い台地が続くが、基部のすぐ東側に、最大3mの高さをもつ逆「コ」の字形にめぐる土塁状の地形が観察される。古屋城跡にも関係する居館跡などの存在が想定される(第5図)。

台地上平坦部の標高は海抜30m、台地西側の水田面は平均15mほどで、比高は15mとなる。

中久喜遺跡

中久喜遺跡は西北と南東を小支谷に区切られた、長軸を北東から南西に向ける100m×200mほどの長方形の平坦地であり、今回の調査地はその北東端部に当たる。調査地は標高30mから25mまでの緩傾斜部であるが、傾斜地にしてはかなりの密度で遺構が確認されており、台地の本体部にはかなり多量の遺構が存在しているものと推測される。

2 周辺の遺跡

印旛沼に四方から流入する諸河川の流域には、旧石器時代から近世まで、各時代の遺跡が多数存在して 枚挙にいとまがない。生命維持に不可欠な水に恵まれ、水産資源や河川交通の便などからみても、水稲耕 作が開始される以前から人が住む環境として好適だったことは十分理解される。鹿島川、手繰川流域も例 外ではなく、中久喜遺跡と同じ弥生時代末から古墳時代、郷遺跡の奈良・平安時代や中近世にかぎってみ ても、同時代の遺跡はあまりに多い。

弥生時代から古墳時代の遺跡としては、鹿島川下流部の江原台遺跡、大崎台遺跡、寺崎遺跡、手繰川下 流部の飯郷作遺跡など著名なものは多く(第3図)、奈良・平安時代の集落や中世の城砦跡なども数多い。 物井地区より北側の鹿島川と手繰川にはさまれた台地上にはほぼ全面に、いずれかの時代の遺跡が存在す るといってよい。

そこで、物井地区及びそのごく近辺にかぎって関連遺跡の所在状況を見ておきたい。

旧石器時代

郷遺跡、中久喜遺跡では下層確認調査を実施したものの、旧石器時代の明確な遺物は確認されなかった (若干の表採資料はある)が、物井地区内の遺跡ではこれは例外的で、ほぼすべての遺跡で確認されている。 特に、御山遺跡では9文化層、26ブロックから局部磨製石斧をはじめ多種・多量の旧石器、剥片が出土している。

縄文時代

物井地区の西に隣接する千代田団地内には八木原貝塚が保存されている。手繰川水系の一支流の最奥部に位置し、前期浮島式から晩期姥山式までの間の土器が確認されており、長期にわたる居住が確認される。 鹹水産、汽水産の貝によって貝塚が形成されており、香取海が現在の印旛沼よりもさらに奥深く浸入していたことが知られる。

地区内では縄文時代の遺構、遺物の分布は比較的希薄である。棒山・呼戸遺跡では早期の条痕文系土器を伴う炉穴群が検出された。御山遺跡では晩期の石器製作(工房)跡が確認され、大洞A式から弥生中期初頭に至る型式変遷をたどることのできる土器群が出土して注目された。地区西半部に縄文期の居住の痕跡がやや顕著ということができ、拠点集落としての八木原貝塚の存在があらためて注目される。

弥生時代

郷遺跡と稲荷塚遺跡のあいだに横たわる支谷は南進して二股に分岐するが、東西の小支谷に挟まれた北向きの台地上に馬場№1遺跡がある。この遺跡は物井地区の事業地外にあるが、別の開発事業に伴って調査され、弥生時代中期の方形周溝墓8基が検出されている¹¹。同時期の住居跡は出土していないので、鹿島川下流部の大崎台遺跡で確認されたように、埋葬地と居住地域を分離する土地利用区分があったものとみられる。物井地区では今のところ同期の集落は検出されておらず、馬場№1遺跡に近い遺跡はほぼ調査が終了しているので、同時代の居住地域が地区内に存在する可能性は低いと思われる。

弥生時代後期の住居跡は小屋ノ内遺跡で30軒あまり確認されているが、ほかの遺跡では検出されても1 ないし2軒という少なさである。

古墳時代

集落と古墳群が認められる。古墳は地区の南西部に集中する傾向にあるが、逆に集落は南西部には希薄である。小名木川、手繰川の源流部に近い地区南西部の地域は水田まで遠く、弥生時代以後の居住地としてあまり適していなかったためであろう。また、古墳が群として形成されて以後は、墳墓の地、不浄の地として敬遠されたとみられ、奈良・平安時代の集落は皆無となる。古墳のある御山遺跡、清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡に後代の集落は全く形成されず、奈良・平安時代の小規模方墳ないし方形周溝状遺構などが営まれ、墳墓地域としての利用が継続される。

古墳時代の住居跡は奈良・平安時代にくらべかなり少ない。鬼高期の竪穴住居跡は稲荷塚遺跡で10軒、

小屋ノ内遺跡で11軒と、それぞれ200軒をこえる奈良・平安時代にくらべれば寥々たるものといえる。鬼 高期住居跡が最も多く認められたのは、地区南東の端に位置する館ノ山遺跡である。5,000㎡とそれほど 広くない調査区、しかも南半部を中世の台地整形や空堀によって大きく損傷されながら、住居跡60軒あま りが検出された。奈良・平安時代の住居は6軒しかなく、理由はよくわからないが集落の移動があったこ とは疑いのない事実といえる。

古墳時代前・中期の住居跡も少なく、小屋ノ内遺跡で和泉期の住居が7軒出土したのが目立つ程度である。 奈良・平安時代

郷遺跡の対岸(西側)にある稲荷塚遺跡では、縄文時代から中世まで多種多様な遺構が認められるが、 主体は奈良・平安時代の集落で、竪穴住居跡232軒、掘建柱建物跡50棟の多きを数える。

稲荷塚遺跡の南、ひと続きの台地上にある小屋ノ内遺跡でも、この時期の竪穴住居跡273軒、掘立柱建物跡127棟が確認されている。途中に未調査地があるため確定できないが、2つの遺跡はひと続きになって、別個の集落として区別できないのかもしれない。

物井の地は、律令制下の下総国千葉郡物部郷に比定されている。物井地区では小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡において大集落の存在が明らかになったことから、物部郷の中心地区がここにあったことは確実といえよう。前代(古墳時代後期・鬼高式期)の集落が必ずしも大規模なものだったとはいい難いから、伴出する奈良・平安時代土器の時間幅の中で隆盛をみたことになるが、その画期がいつの時期のことか、突発的に興隆したのか、時間をかけて徐々に集落規模が拡大していったのかなど、様々な課題は整理作業の進展の中で次第に明らかになってくるものと思われる。

中・近世

土塁や腰曲輪の存在から城塞跡であることが明確なのは、地区内では古屋城跡と北ノ作遺跡の2遺跡である。このうち古屋城跡の方は、北向きの独立丘陵に近い舌状台地の縁をめぐる土塁が良好に遺存する。単郭式の小規模な城跡であるが、良好な遺存状況から地区内に現状保存されることが決定されている。曲輪内の中央やや東寄りに井戸が残り、その底から白磁碗や銅鏡が出土しており、居館的性格が強く感じられる。

北ノ作遺跡は斜面に多数の腰曲輪を配し、障子堀や大規模な井戸が検出されている。実戦的な、後北条 氏系の城とみられる。15世紀後半を中心とする大量の焼物が出土しており、在地産の内耳鍋や擂鉢が多い のにくらべ輸入陶磁器をはじめとする陶磁器が少ないことから、古屋城の出城で、農民の避難所的性格も もっていた可能性が指摘されている²⁾。

館ノ山遺跡では土塁と堀で区画された曲輪が検出され、中から掘建柱建物や井戸、地下式土坑なども確認され、中世末期の居館跡の存在が明らかになっている。古屋城より小規模であり、時期的な先後関係についても今後の検討を待たなければならないが、千葉氏と後北条氏のせめぎ合いの中を生きた物井の在地土豪の本拠地であったことはまちがいない。

- 注1 加藤有花「馬場No.1 遺跡 古代の集落の景観と生活 」『財団法人印旛郡市文化財センター第10回遺跡発表 会発表要旨』2006年、8~11頁
 - 2 井上哲朗「鹿島川流域における戦国期前期城館の一形態 四街道市北ノ作遺跡の調査から 」『研究連絡誌』 第53号、1998年23 ~ 34頁

第2章 郷遺跡

第1節 検出した遺構の概要

1 台地上平坦部(A地点)

検出した遺構の種別と数量は次のとおりである。遺構番号は検出順に付けられたもので、中に検討の結果当該遺構ではないことが明らかになったものがあるが、これについては番号を詰めることはせず欠番としてある。

住居跡 (SI) 18軒 (SI-001~020。うち002と005は欠番)

土 坑 (SK) 25基 (SK-001~025。 026と027は欠番で、台地南東部にあった028~051の24基 はC地点に含める)

溝 (SD) 6条 (SD-001~007。うち006は欠番)

柵 列 (SA) 1列 (SA-001)

住居跡はすべて竪穴式であるが、台地斜面部にあったものは土色の変化の確認が難しく、掘削機械による表土除去の際、住居覆土をかなり削りとってしまったものもあり、プランの把握の正確性に若干疑問のもたれるものがある。また、覆土中の遺物の取上げ方法が十分でなかったものなどもある。

後世の遺構の重複などもあり、住居の四壁が良好に遺存したものは少なく、カマドが失われたものもあるが、出土土器などからみて、本来はすべてカマドをもつ古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居だったものと思われる(第7図)。

台地南東斜面部は後世の台地整形が加えられ、さらにそれ以後の堀割(道路か?)も掘削されているため、その部分にあった遺構が失われている可能性は高い。

台地の奥部(付け根部)では住居跡だけでなく他の遺構も全く検出されていない。台地中央部に近い位置で検出された住居跡(SI-006、008)は壁上部を大きく削られ、SI-008などはほとんど痕跡的な立ち上がりしか確認されなかった。かつてこの部分にゲートボール場があり、その造成の際にかなり表土を除去して平らにしたと伝わる。掘削深度は表土内にとどまらず、その下のソフトローム面までかなり削り取られていることが分かる。

このように台地基部は後世に人為的な地形改変をかなりこうむっており、したがって住居跡もかなり失われていると推測される。本来は調査区域内にあと数軒ないし10数軒の住居跡があった可能性は高く、全体では25軒から30軒ほどの住居跡があったのではないかと推測される。

このような事情から、現状では住居跡は西向きの舌状台地の先端部に集中し、台地上平坦面から緩斜面部にかけて分布している。土坑群は住居跡と重複するものと、これとは占地を異にする南東斜面部のものとがあり、前者は平坦地に広く散在し、後者は密集して存在する。土坑の時期はほとんど不明だが、斜面部のものは中世末期を中心とする時期のものである可能性が高い。平坦部のものはすべて時期不明で、近世以降のものも多いとみられるが、住居跡群と同時期に営まれ、集落に関係する機能をもっていたものも当然含まれていると考えられる。



第5図 郷遺跡の地形と遺構検出状況



第6図 郷遺跡下層確認グリッド配置図



第7図 郷遺跡台地上 (A地点) の遺構群

住居跡は主軸(入口部とカマドを結ぶ線)を北から北西にとるものが大半で、ほかにほぼ東西方向のもの(SI-004、009)もある。カマドは住居壁の北辺中央に置くものがほとんどで、西辺に置くもの(SI-009、010)、西辺と東辺に 1 基ずつ置くもの(SI-004)、壁コーナーに置くもの(SI-020)もある。

全体の住居配置に計画性は認められない。

土坑、溝の配置状況については、後掲のそれぞれの項に記述する。

なお、下層については遺構、遺物とも検出されていない。

2 台地北側斜面部 (B地点)

A地点の調査で集落跡の存在が明らかとなり、緩斜面部にも遺構が分布すること、また北側すぐに位置する古屋城跡に関係する遺構の存在が予測されることなどから、A地点の調査終了後にその北側緩斜面の調査が実施された(第5図)。

斜面の傾斜に沿って、幅2m、長さ30m~35mの東西方向のトレンチを5本設定し、南北方向の短いトレンチも1本設定した。表土の堆積は厚く、1mから2mに及び、その下に地山である栗色の粘質土層が現れた。表土中で1か所焼土堆積が検出されたほかは表土中及び地山面に遺構は確認されず、今日にいたるまで生活の場として利用されることのなかったことが分かった。

焼土堆積は、径1mほどの不整な円形で、焼土の厚さは20cmほど、焼土上面に接して採集された遺物は20点ほどで、すべて奈良・平安時代の土師器と須恵器小破片であった。このことから縄文時代の炉穴とは考えられず、また歴史時代の製鉄関連遺構とみるには強度の焼成面は認められず、鉄滓や炉壁の痕跡も皆無であり、その可能性も低い。ただ、焼け跡の整理などで投棄されたような焼土ではなく、ある程度長期間この場で火が焚かれた結果であることは確実ではあるものの、その目的や時期は不明とするしかない。

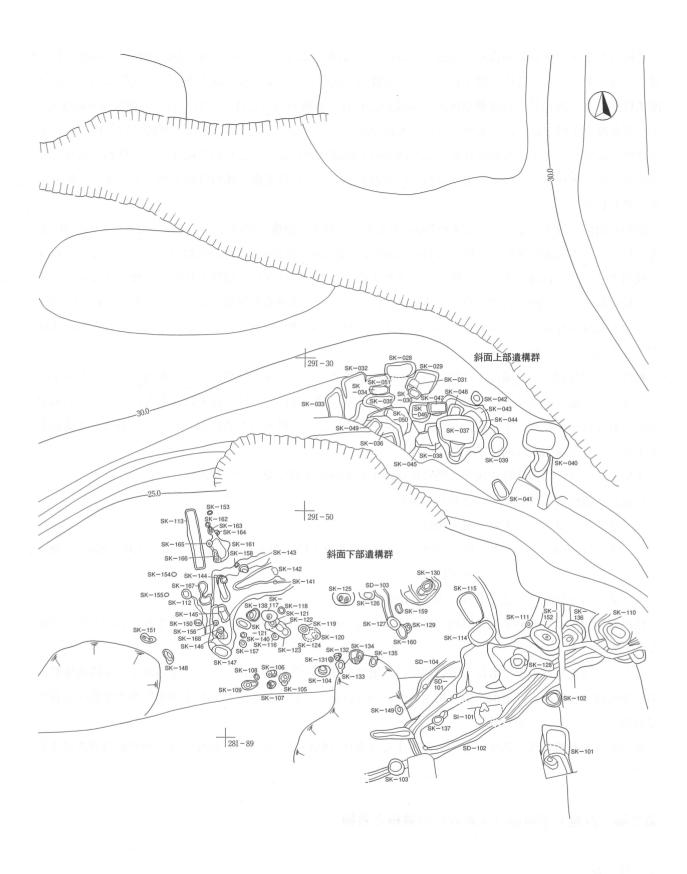
トレンチ内からはかなりの量(通常の遺物整理箱 - 内法寸法54×34×15cm - で10箱ほど)の遺物が採集されている。ほとんどは土器の破片で、細かく割れ、しかもかなり摩滅したものが多い。奈良・平安時代の土師器と須恵器が多く、古墳時代後期のものがこれに次ぐ。このことから、本来はA地点にあった土器が、耕作にともなって破砕され、投げ捨てられたり、自然に流れこんだものと思われる。中世の遺物は少なく、古屋城跡の方からの投棄は少ないといってよい。

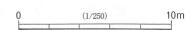
布目瓦(男瓦)の破片2点(互いに接合した)が採集されていることが特筆される(第31図)。 下層についても遺構は確認されず、遺物の出土もない。

3 台地南東斜面部(C地点)

A地点の南東斜面部、舌状台地の基部の地形に沿って道路状の堀割があり、一部はかなり深く掘削され水が常時たまっている状態であった(図版10)。地元では「龍神池」と呼び慣わされており、かなり古くからの池とも思えるが、掘削の時期や目的はよく分からない。

この堀割に分断された形で、2段の遺構群が検出されている(第8図)。堀割の北、斜面の上部には地下式坑と土坑からなる遺構群(SK-028~051)があった。土坑の分布範囲は東西約30m、南北約20mで、東側は調査区域外までもう少し分布が広がっていたはずである。この土坑群は、舌状台地基部の南斜面の傾斜がはじまりかかる部位にある。この傾斜変換線に沿うように台地の地山を弧状に削り出した整形区画が認められ、区画内から多数の土坑が検出された(第32図)。





第8図 郷遺跡南東斜面部 (C地点) の遺構群

遺構番号を付けられたのはSK-028から051までの24基である。このうちSK-037と040の2基は中世の地下式坑であり、地下式坑を取り巻くように多数の土坑が営まれている。地下式坑と土坑群には何らかの関連性があると思われ、台地整形区画の造成がこれらの遺構の設置に伴って行われた可能性を示唆する。土坑群を覆う土層中からは宝永テフラや北宋銭が出土しているので、この区画は全体的には近世初頭以前の遺構とみておいてよいと思われる。この部分の土坑群は密に分布し、互いに切り合って原形を損なうものもあるが、密接していながら切り合わないものも多く、これは遺構全体の性格を知る上で鍵になる事実かと思われる。

堀割の南側(斜面の下部)では東西70m、南北35mの範囲で遺構が検出されている(第8図)。発掘区北端(最上部)の遺構検出面での標高は24m、南端では22.4m~22.2mと比較的緩傾斜である。土坑の分布は比較的まばらで、斜面上半部の西側にやや密集する。この中には掘建柱建物の柱穴が1棟分含まれる。また、柱穴群のすぐ北西に鈎型に小さく落ち込む段差があり、建物敷地を限るコーナーと考えられる。下段の区画からは内耳鍋やすり鉢の破片などが出土しており、掘建柱建物といくつかの土坑からなる生活区域だったものと考えられる。

堀割の南側発掘区の東端部では斜面からの浸出水が著しく、土坑の下部からも水が涌いてくるものがあり、井戸の可能性のあるものが含まれる。東端の土坑(SK-110)では、覆土に水を含んでいたため木製品が良好な状態で遺存していた。これらの土坑を起点にして、排水のために掘られたと思われる 2 筋の溝が下流方向(西南西)に向けて走っている。

土坑、溝のほかに古墳時代後期の竪穴住居跡1軒が斜面下部で見いだされた。

C地点の遺構数と種別は次のとおりである。

住居跡 (SI) 1 軒 (SI-101)

土 坑 (SK) 91基 (SK-028~051まで24基が上段、地下式坑を含む。SK-101~168まで68基が下段)

溝 (SD) 3条 (SD-101~103)

伴出遺物が少ないため土坑の時期ははっきりしないが、大半は中世後期以降に営まれたものとみて問題ないと思われる。

なお、下段遺構群の中でも最も低い部位に古墳時代後期の住居跡があったことからみて、下段遺構群の ある平場は中世以降に人為的に削り出されたものではなく、自然に形成された平坦面を多少整地する程度 で利用していたものと思われる。

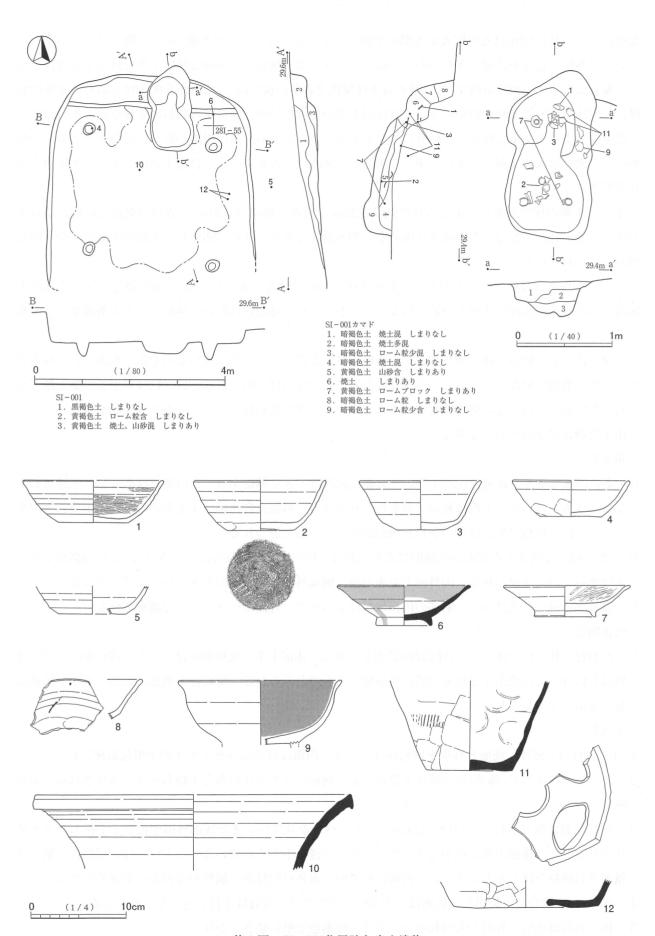
地形的に旧石器時代の遺構・遺物の存在する可能性は低いことから、C地点では下層の確認調査は実施 していない。

第2節 台地上平坦部 (A地点) の遺構と遺物

1 住居跡

SI-001 (第9回、図版3·17)

主軸をほぼ真北にとる。台地の南側緩斜面部に位置するため、南壁の立上がりが確認されていない。東西の壁間の距離が4.2mあり、東西両壁は現存長3.8mほどだが、本来は4m強はあったとみられ、東西、南



第9図 SI-001住居跡と出土遺物

北それぞれの軸長4.2mほどの隅丸正方形の平面プランをもっていたものと思われる(隅丸プランの竪穴については各壁の辺長が計測できないので、竪穴の大きさは主軸長と、主軸と住居中央で直交する軸長で示す。軸長は竪穴検出面で計測する)。壁の高さは現状で北壁が最も高く、床面から60cmほどある。北壁の北側に一段浅く掘りこまれた面があり、この住居本来の施設なのか、別遺構の偶然の重複なのか不明である。北壁中央よりやや東に片寄った位置にカマドがある。カマドの両袖は損傷が激しく原形をとどめていな

北壁中央よりやや東に片寄った位置にカマドがある。カマドの両袖は損傷が激しく原形をとどめていなかった。火床は大きく掘りこまれ、深さも床面から35cmほどもあり、中には焼土のほかかなり多量の土器片が残されていた。

床面に4個の柱穴があり、南北の柱間隔は各2.5m、東西の間隔は各2.6m、各辺の交点は直角にならず、 わずかに菱形状にゆがむ。穴の深さは床面から30cm前後である。柱穴に囲まれた床面中央部はかなり固く 踏みしめられていた。

なお、本住居の覆土上に焼土があり、別の住居の炉跡ではないかとしてSI-002の番号が与えられたが、 床面とみられる硬化面や遺物も認められないことから、その可能性は低いと判断し、この遺構番号は欠番 とした。

カマド内から土師器の杯($1\sim3$ 、7)や椀(9)が出土し、完形に近いものもあったが、いずれも煮炊きに使う器種ではないので、カマド内にもたらされた事情は不明である。11、12は須恵器の甕と甑だが、どちらも完形にはほど遠い破片であり、本来このカマド内で使われていたものかどうか分からない。

出土遺物は以下のとおりである。

須恵器

- 10 甕の口縁部細片。推定口径33cmという大甕、頸部は大きく外反する。口唇端部は肥厚し、上端はわずかにつまみ上げられ、下端は断面三角形状に垂下する。外面は自然釉によるものか黒色を帯び、光沢をもつ。内面は灰色で光沢はないが自然釉がかかっていると思われる。
- 11 甕。扁平な底部から胴部が直線的に立ち上がる。中位までは胴部のふくらみはなく、肩の部分で丸くすぼまっていたと思われる。内外面とも赤褐色、胴部外面は叩き成形のあとヘラケズリされる。
- 12 甑底部の細片。孔は5つ、胴部の内面は指によるナデ、外面はヘラケズリで調整される。 灰釉陶器
- 6 高台付の杯。1/4の破片。口径13.8cmに復元される。体部上半に灰釉がかけられる。高台を持って、4 回ほどに分けて体部上半を釉薬に漬けて施釉したものとみられる。焼成後の風化によるものか、施釉部分に光沢は全く見られない。

土師器

- 1 杯。約1/2の破片、底面と外周を回転ヘラケズリ、内面は丹念にヘラミガキの上黒色処理される。
- 2 杯。底部はすべて、体部は1/6周ほど遺存する。回転ヘラケズリのあと手持ちヘラケズリされる。橙褐 色。
- 3 杯。完形に復元された。口径(12.6cm)にくらべかなり深い。また底部外周が大きく手持ちヘラケズリされるため、体部下端に稜ができてすぼまり、底径を小さくしている。やや白っぽい橙褐色、胎土は精選され砂粒をほとんど含まない。内面にわずかに赤色料の付着(偶然のものか)が認められる。
- 4 杯。1/4の破片で、橙褐色、底面は一方向のヘラケズリ、外周は手持ちヘラケズリされる。
- 5 杯。底部は底面、外周とも回転ヘラケズリ、橙褐色で堅い焼き上がり。

- 7 ほぼ完形に復元された高台付皿で、口径13.2cm、褐色、胎土に黒い微細粒を多く含む。内面は丁寧に ヘラミガキされる。
- 8 杯。細片。体部外面に墨痕が残るが、意図的に書いた文字の一部とは思えない。
- 9 口径17cmの大ぶりの高台付の椀、全体の1/4ほどの破片で、高台は欠失する。内湾しつつ立ち上がる体部から外反する口縁部に続き、その境の稜は明瞭でない。口縁部はヨコナデされて平滑、体部内面は丁寧にヘラミガキされた上、炭素吸着により黒色処理されている。

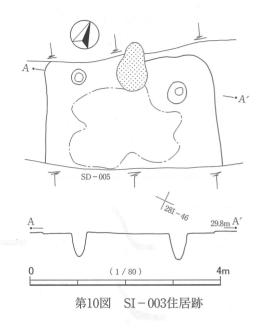
SI-002 欠番

SI-003 (第10図)

台地のほぼ平坦部にあり、竪穴の南半分を溝SD-005に よって切られ失っている。

主軸を北北西にとり、北壁ほぼ中央にカマドをそなえる。 東西壁間の距離は3.6m、東西壁は2.2mほど遺存する。本来 は各軸長3.6mの隅丸正方形のプランをもっていたと思わ れる。

北側の柱穴2個が残り、柱間距離は2.2mである。床面中央部はかなり堅い貼床状になっていた。各壁は最大で4~5cmの高さしかなく、浅い覆土中から採集された遺物はない。カマド内で土器の細片3点が出土しており、いずれも奈良・平安時代の土器とみられるので、住居の存続時期もそのころと判定して大過ないと思われるが、それ以上の限定は困難である。



遺物は土器片3点のみの出土で、細片のため実測不能だが、1点は常総型の土師器大型甕の口縁部破片である。細かい時期比定はできないが、奈良・平安期(8~9世紀)に属すことは間違いない。ほかの2片は甕の胴部破片で、細片ながら胎土の特徴からみて常総型甕の一部ではないかと思われる。

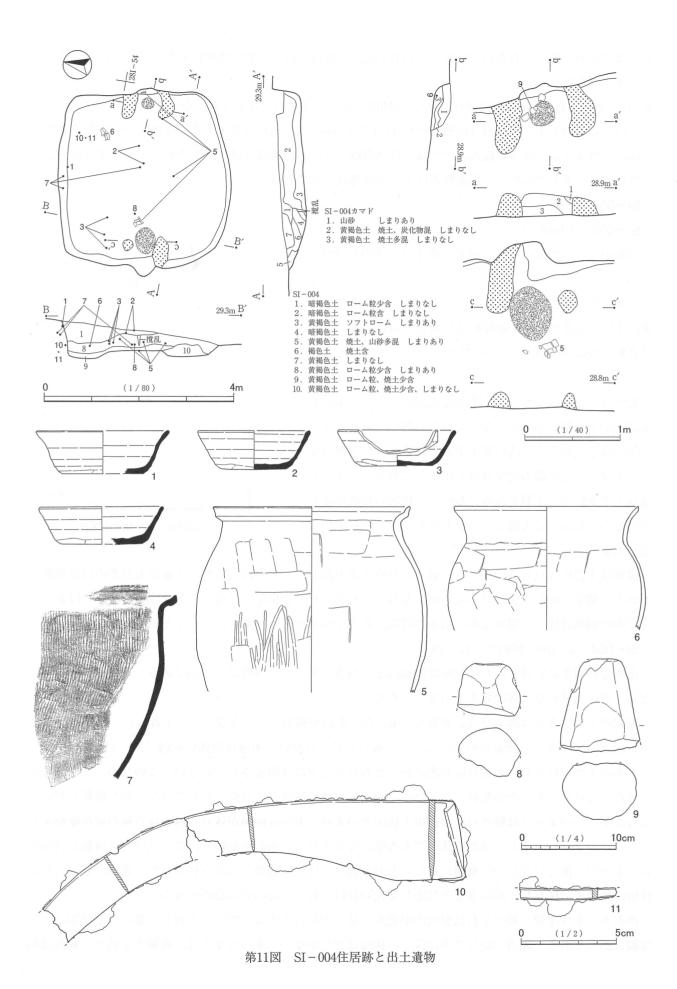
SI-004 (第11図、図版3・17・18)

南側緩斜面部に位置するため北壁は70cmほどの高さがあるが、南壁は30cm弱である。主軸をほぼ東西にとり、東西両壁の中央部に各1基のカマドをもつ。

竪穴の平面プランは隅丸ほぼ正方形で、東、西、南辺が胴張りし、南辺のそれが著しい。軸長は東西3.7 m、南北3.6mである。床面に柱穴はなく、貯蔵穴も見られない。床面は全体に軟弱であった。

2基のカマドはどちらも遺存度が悪いが、どちらも完全には撤去されていない。このため、普通に考えれば古くなったどちらかが駄目になったので撤去し、他の壁面に作り直したのではないかと解釈したいところだが、そのようには解せられない出土状況といえる。東側は両袖が残り、西側は右袖の遺存度がよくない。このようにみると、ほかの住居でも西壁にカマドをもつ例があるので、この住居でも西側が当初からのもので、傷んできたので東側に新しいものを設け、片方は補修しながら使われた可能性が考えられる。住居廃絶時まで併存し、風向きなどに応じて使い分けられていたのではなかろうか。

西のカマドは左袖(袖の左右は竪穴の中央から見ての左右とする)だけよく残り、袖の長さは50cm、下端幅は25cmである。煙道の掘りこみは浅く、10cmほどしかない。東のカマドは、両袖とも残り、袖長は50



— 20 —

cm、幅は25~30cm、両袖の外側下端間の距離(以下「総幅」という)は1mである。

なお、発掘当初、東側のカマドを別の住居に伴うものとみてSI-005の番号が与えられたが、その後上述のように同一住居に伴うことが分かったので、この番号は欠番となった。

出土遺物は以下のとおりである。いずれも床面より浮き上がった覆土中からの出土で、完形品がないこともあり、鉄製品を含めすべて住居埋没過程での混入品と思われる。

須恵器

- 1 1/5周ほどの杯の破片、須恵器らしい灰色で、堅く焼き上がる。口縁部がかなり強く外反するのが特徴的である。底部は手持ちヘラケズリ。
- 2 復元口径11.6cmと小さめの杯で、その割には高さがある。1/2周ほどの破片。赤みを帯びた灰色で、堅く焼き上がる。底部は手持ちヘラケズリ。
- 3 完形に近い杯で、1か所意図的に打ち欠かれている。灰褐色で焼成は堅緻、底部は手持ちヘラケズリ。
- 4 杯、1/4周ほどの破片。堅く焼き上がり、焼色は全体に赤黒い。底部は手持ちヘラケズリ。
- 7 甕又は甑の破片である。甑の可能性もあるが、頸部内面の最も突出した部分がすり減っており、これはこの部分で繰り返し甑を受け止めたために生じた摩耗ではないかと思われ、甑ではなく甕だった証拠になるものと考える。口縁部は肥厚し、端部がやや内側へつまみ上げられる。胴部上部の外面には縦方向の叩き目が残り、中位ではナデによって叩き目は消される。内面はナデにより平滑に仕上げられる。焼色は黒褐色で焼成は堅緻である。

土師器

- 5 常総型の甕で、胴上部1/4周ほどの破片。口縁部は短く強く外反したあと、短く上方へつまみ上げられる。橙褐色、胎土には雲母や長石の微細な粒を多く含む。胴部外面はナデとヘラミガキ、内面はナデ、口縁部はヨコナデされる。
- 6 武蔵型甕の破片で、口縁部から胴部中位にかけて1/2周ほど残る。口径19.2cmとそれほど大型ではない。胴部は比較的丸みが強く、長胴にはならない。口縁部はヨコナデ、肩部外面は横方向に、胴部にかけては斜めにヘラケズリされ、砂粒の移動による擦痕が目立つ。内面は丁寧なナデで平滑に仕上げられる。焼色は褐色で焼成は堅緻である。

土製支脚

- 8 支脚の上端部の破片。現存長5.6cm、現存最大径6.4cm。よく焼けており、表面は堅緻である。
- 9 支脚の上部破片で、現存長9.8cm、現存最大径7.7cm、上端の径は4cmで、下部に向かって径を増していく度合いがかなり急激である。横断面は長円形である。

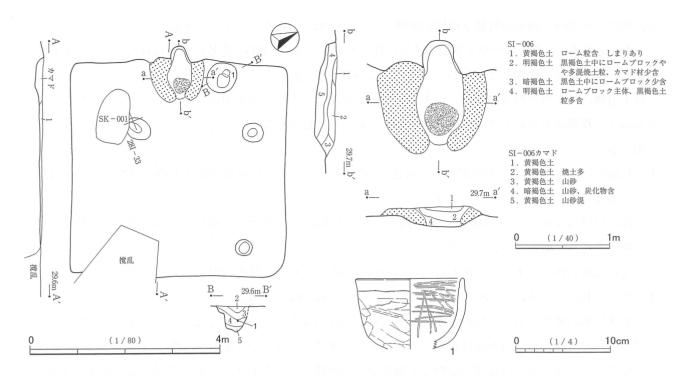
鉄製品

- 10 基部折り返しの曲刃鎌で、先端を欠く。現存長22cm、基部の幅4cm、棟の厚さは基部で3mm、先端部で2mmである。
- 11 刀子 刀子の茎部分の破片とみられる。現存長5cm、幅6~5mm、棟部の厚さ2.5mmである。

SI-005 欠番

SI-006 (第12図、図版4・18)

今回検出され住居群のほぼ中央に位置する。台地中央のこの部分にはかつてゲートボール場があったため、造成の際に削られ、壁は高さ10cmほどしか遺存していない。主軸を西北西にとり、西辺中央にカマド



第12図 SI-006住居跡と出土遺物

を置く。竪穴の平面プランは胴張りのない正方形で、隅丸の程度も弱い。軸長は主軸が4.6m、直交方向が4.5mである。本来は床面に柱穴4個があったはずだが、1個は攪乱のため失われている。柱間距離は2.5mである。

カマドは袖の長さ70~80cm、高さ20cmほど、総幅は1.1mで比較的よく残っていた。壁面への煙道の掘りこみは30cmほどと浅い。カマドの右脇に径30cm、深さ50cmほどの貯蔵穴があり、中からほぼ完形の小型椀が1点出土した。薄い覆土中からは40点ほどの土器片が出土しているが、実測可能なものはない。

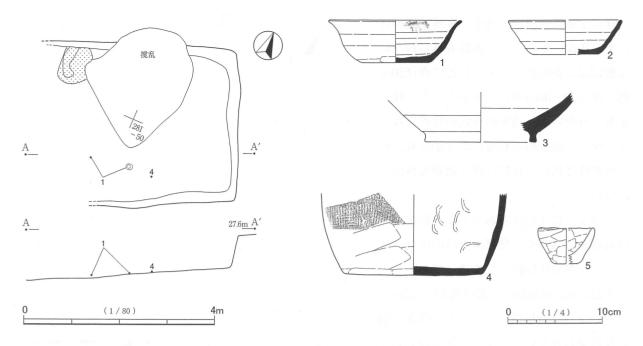
土師器

1 小型の椀のほぼ完形品で、底部のみ加熱(おそらく長期にわたる)によって脆くなり、欠け落ちている。口径11cm、高さは、欠けた底部を補っても8cmにわずかに足りなかったと思われる。胴部下端は丸みを帯び、中位から上部にかけては多少内湾しながら直線的に立ち上がる。胴部は分厚く、口縁部はヨコナデによって多少薄く仕上げられる。 胴部外面はヘラケズリとナデ、内面はヘラミガキされ光沢をもつ。全体に明るい褐色、底部のみ内外面とも加熱により黒ずむ。

SI-007 (第13図、図版18)

台地西端の緩斜面部に位置するため西壁を完全に失い、床面の西端部も一部失われている。また、北壁中央から床面中央にかけて大きな攪乱穴が入っている。この穴の西側にカマドの袖の一部かとみられる砂質土や焼土が残っていたが、竪穴の北壁中央よりかなり西に片寄った位置になるのが不審である。カマド内にたまった灰や焼土が捨てられたものかもしれないが、もともと西に片寄った位置にあったのかもしれない。あるいは当初のカマドの老朽化に伴い、となりに新しいものが造りなおされたのかもしれない。いずれにしろ、竪穴の北壁にカマドがあったことは間違いない。

竪穴の主軸は北北西を向く。南北軸長は3.5m、西壁が失われているため正確な東西軸長は不明だが4.1m



第13図 SI-007住居跡と出土遺物

ほどと推定される。東西にやや長い長方形プランで、コーナーの隅丸は弱く、胴張りもほとんど認められない。東壁は床面から70cmほどの高さをもつが、西に向かうにつれて徐々に高さを失っている。床面には 柱穴も貯蔵穴も掘りこまれていない。

床面の中央よりやや南側で出土したほぼ完形の須恵器杯のほかは、すべて完形にはほど遠い破片である。 須恵器

- 1 ほぼ完形の杯で、胎土に雲母や長石粒を含むことから新治産と認められる。やや黄味を帯びた灰色。体部の下半と上半で立ち上がりの角度が変わり、さらに口縁部は大きく外反する。底面の外周線に沿って粘土が2か所剥落している。ヘラ切りの際、最初の一回転で予定より高い位置で切り始めたため、より下位で切り直し、切りすぎた周縁部に粘土を盛り足したものと思われる。口縁部内面に1か所油煙がこびりついている。短期間、灯明皿として用いられたことが分かる。
- 2 杯、1/6ほどの破片。底部手持ちヘラケズリ。黒っぽい灰褐色で、千葉産とみられる。
- 3 高台付の壺の底部付近のみの細片で、胎土、色調から新治産とみられる。
- 4 甕の底部付近の破片で、底部は1/2が残る。底径は14.6cmと大きく、かなり大きな甕だったと思われる。 胴部外面は下から5cmまでヘラケズリ、それより上は縦方向の叩き目が見られる。内面には指による整 形痕が残る。黄味を帯びた灰色だが、胎土に雲母などを含まない。

土師器

5 ミニチュアの土器、1/5周ほどの破片、全体では猪口に似た形をもつ。手づくねというには内外面とも かなり丁寧にナデ調整されている。焼成も堅緻である。

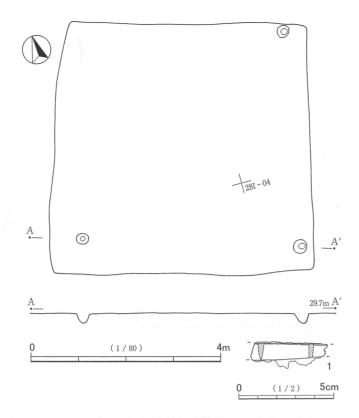
SI-008(第14図、図版 4)

ゲートボール場の跡地にあったため四壁をほとんど失っており、遺存のよいところでも壁の立ち上がりは数cmしかなく、床面とみられる硬化面の範囲から竪穴の全体プランが推定された。北壁や西壁部にカマド

の存在を示す砂質土や焼土の痕跡は認められず、床面に炉のあった兆候も見られない。 床面には3か所のコーナー付近に直径30cm 弱、深さ20~30cmのピットがあった。柱穴 かもしれないが、通常の柱穴の位置になく、 3か所にしか認められないことからも、そ の可能性は低い。住居に伴う遺物も検出されていない。

このように住居跡であるとする確証に欠ける遺構であるが、発掘調査時の所見にしたがい、竪穴住居跡として扱っておく。

北辺5m、南辺5.6m、東西辺5.1~5.2mのややいびつな台形プランをもち、隅丸、胴張りは見られない。カマドも炉もないので、竪穴の主軸方向は不明である。出土遺物はほとんどなく、土器細片8点(土師器7、須恵器1)と鉄製品1点が採集されたにすぎない。実測可能な土器片はないが、すべて



第14図 SI-008住居跡と出土遺物

奈良・平安時代の土器の特徴をもち、遺構の時期を判断する参考にはなろう。

鉄製品は刀子の刃部破片で、現存長4cm、身幅9mm、身から茎へ段差をもたずに移行し、はっきりした 関は見られない。

SI-009 (第15図、図版 4 · 18 · 19)

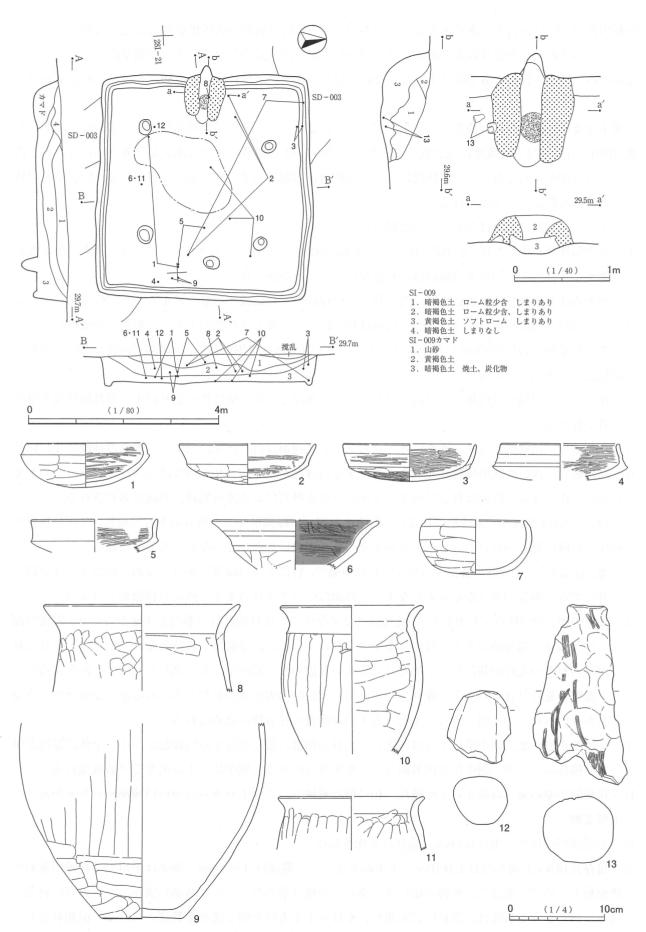
この遺跡の住居跡の中では最も遺存度のよいものである。四壁はよく残り、壁の高さは60~80cmある。カマドを西壁中央に置く。主軸はほぼ西向きとなる。各辺はほとんど胴張りせず、コーナーもほぼ直角で丸みを帯びない。古墳時代後期の住居跡に通有の精美なプランをもっている。東西軸長4.7mに対し南北は4.5mで、主軸方向にわずかに長い長方形といえる。

床面に4個の柱穴がある。竪穴の向かい合う四隅を結ぶ対角線上には位置していない。北側の2個は直径も小さく、深さも45cm前後と浅い。これに対し南側の2個は直径も大きく、深さも70~80cmと深い。長さの異なる柱材が用いられ、これを切りそろえるのではなく、柱穴の深さで調節したことを物語るのであろうか。

床面の東壁に近い中央部にあるピットは直径30cmほど、深さは40cm、入口の階段を支えた柱穴であろう。 壁際には幅15cmほど、深さ $5\sim10$ cmの壁溝が一周しており、これも古墳時代後期に通有の丁寧な施工といえる。

カマドは両袖がよく残り、袖の長さは壁から80cmあり、総幅も約80cmである。煙道の切りこみは浅く、 西壁上部を幅、奥行とも25cmほど掘りこむだけのものであった。火床には焼土が厚く堆積していた。左袖 の外側で土製支脚が出土している。

なお、貼床を除去したところ、いくつか不整形な土坑が確認された。最大のものは長径1.8m、短径1 m



第15図 SI-009住居跡と出土遺物

の長円形で、深さ1mほどもある大きなものであった。古墳時代後期の住居構築時には完全に埋まっていることから、それよりかなり以前の遺構にはちがいないが、出土遺物もなく、整った類型的なプランも示さないため、時期、性格とも不明とするしかない。ほかの大小の土坑についても同様の扱いとせざるを得ない。

覆土中及び床面から比較的多く土器片が出土している。どれも破片で完形品はない。床面近くにあった 甕 (010) も破片は広い範囲に飛び散っていたので、竪穴の埋没過程における流入品と考えられる。各土器 は単一の様相を示しており、近隣住民によって比較的短期間に廃棄されたものと思われる。住居廃絶の時 期も土器の時期に近いと思われる。

出土した土器は土師器ばかりで、須恵器はない。

- 1 須恵器杯身を模した杯、2/3周が残る。口縁部は内湾しつつ短く立ち上がり、ヨコナデ調整、体部外面は細かくヘラケズリのあと内面同様の丹念なヘラミガキが施される。
- 2 須恵器杯蓋を模した土師器杯、1/2周が残る。口縁部の下に比較的明瞭な稜をもつ。口縁部は外反しヨコナデ調整、体部外面はヘラケズリ、内面は丹念にヘラミガキされ光沢をもつ。褐色、焼成堅緻。
- 3 2に似るが、口縁部が内湾しながら立ち上がる点が異なる。2/3周ほど。口縁部下の稜も弱い。橙褐色、調整法は1と同じである。
- 4 杯の破片。口縁部は内傾しつつ高く立ち上がる。体部との境の稜は鋭く張り出す。器外面は火を受けて肌が荒れる。
- 5 杯の破片。口縁部が高く、垂直に近く立ち上がる。内面は磨かれ光沢をもつ。器肌の特徴は4に同じ。
- 6 高坏破片。浅い皿状の体部から大きく外反する口縁部が立ち上がり、境に段差(稜というほどのもではない)ができる。内面は丹念にヘラミガキの上炭素吸着による黒色処理、外面は赤彩される。
- 7 椀、1/2周ほど残る。偏球形の体部に、内湾する短い口縁部がつく。内外面とも黒褐色、二次的加熱や 風化で器肌の荒れが目立つ。もともとあまり丹念な調整は行われていなかったとみられる。
- 8 甕、肩部より上1/4周。胴張りの少ない長胴の甕で、肩部から口縁部にかけてなめらかなカーブを描いて外反する。胴部内面はかなり入念なナデ、外面はヘラケズリのままで砂粒の移動痕が目立つ。
- 9 大型の甕、胴中位以下1/2周ほど、底部付近は完存する。比較的長目の胴部と平底からなり、胴部外面はヘラケズリと部分的なナデ。外面は多少火を受けているが、器肌はそれほど荒れていない。それに対し内面の器壁の荒れが甚だしい。加熱によるものと思われ、器の中で火を燃した結果としか考えられない。器壁の荒れ具合からすると繰り返し、あるいは長時間火が焚かれたとみられるが、なぜそのようなことが行われたのか不明である。また、若干の有機質の付着物が認められる。
- 10 比較的小型の甕、胴中位以上をほぼ完存。長目の胴部に緩く外反する口縁部がつく。全体に器肉が厚い。口縁部ヨコナデ、胴中位は内外面ともヘラケズリのまま、胴中位以下は火を受け器肌荒れる。
- 11 比較的小型の甕、肩部から上の破片。10に似た形態で、これよりさらに短い口縁部が立ち上がる。 土製支脚
- 12 上端部の破片で、現存長7.6cm、端部は丸味を帯びる。
- 13 現存長18.9cm、現存部最大径10cm、下半部を欠く。上端部径4~4.5cm、端部は平坦で、截頭円錐形の側面形をしめす。表面に、植物の細い茎(藁か)が焼け落ちたとみられる細い溝が、上下方向に何条か 残る。同じような痕跡は、割れ口にも現れ、やはり上下方向を向く溝が多数認められる。混和材として

粘土に意識的に混ぜこまれたものとみられるが、繊維がすべて上下方向に向いていることから、粘土は 一方向にしかこねられていないことが分かる。

SI-010 (第16·17図、図版5·19·20)

主軸を西南西に向け、カマドを西壁に置く。台地西側の緩斜面部にあるため西側にいくほど壁の高さを失い、カマドの袖は高さ15cmほどが残るにすぎない。これに対し東壁はよく残り、高さ1.1mあった。

また、後世の攪乱も甚だしく、南壁中央から北西方向へも攪乱溝が走り、床面中央から南側にかけても 2.5m×1.8mの大きな四角い攪乱穴が入る。北壁もすべてトレンチの掘りすぎによって失われている。この ような攪乱のため竪穴の規模は正確におさえられないが、東西の軸長4.1m、南北3.8mほどの、東西に若干長い長方形プランだったものと思われる。床面の遺存部に柱穴、貯蔵穴などは全く認められない。

カマドは袖長70cm、総幅1.1mと通有の大きさだが、高さは15cmほどしかない。カマドの火床に土製支脚が残されていた。

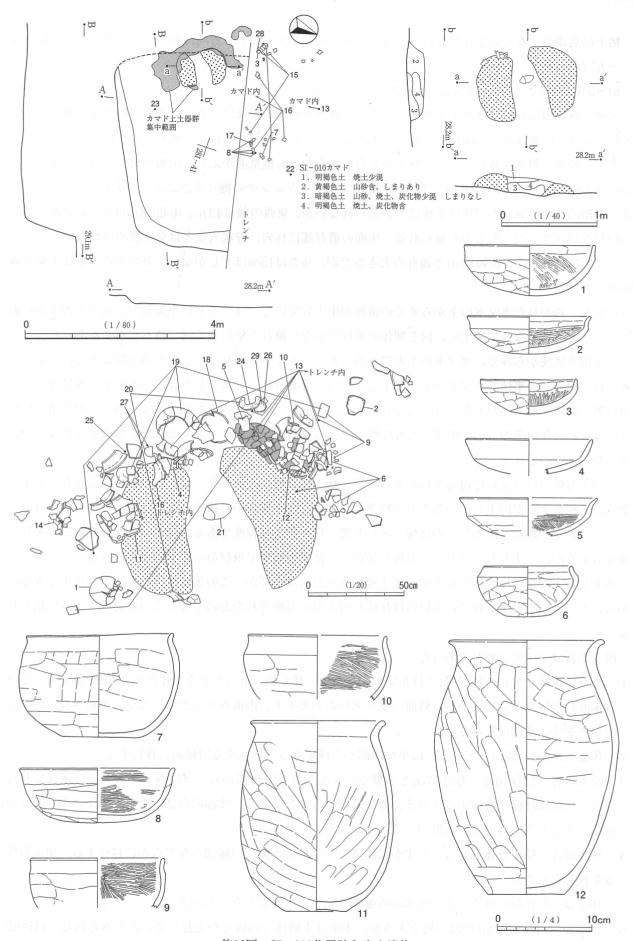
攪乱をまぬがれたカマドの上から多くの遺物が出土している。ほとんどが土師器で、カマドの上から両脇にかけて一列になって出土し、同じ個体の破片でかなり離れた位置まで飛び散ったものもあった。このような出土状況からみて、カマドの上方に土器を置いておく棚があって、これらの土器はそこに一括して置かれ、何らかの事情でカマドの上に落下したものと推測される。落下したときの衝撃で土器は破損し、飛び散った破片もあったのだろう。この住居が火災にあった形跡は見られないので、何らかの事情(自然災害など)で住居そのものが倒壊した可能性も考えられるが、少なくとも土器が棚ごと落下したことは間違いないと推測される。

この土器群でほぼ完形に復元されたものに甕、甑、杯、椀などがあり、ほかに土製模造品 6 点(U字形 鋤先 2、鏡形 4)が出土していることは特筆される。この土器群から出土したのは図示した土器のほぼすべてで、かなり離れて出土したのは椀(8)と甕(17)各 1 点程度である。ほかにかなり離れて出土した破片もあるが、いずれもカマド上土器群と接合し、落下の衝撃で飛び散ったものと思われる。

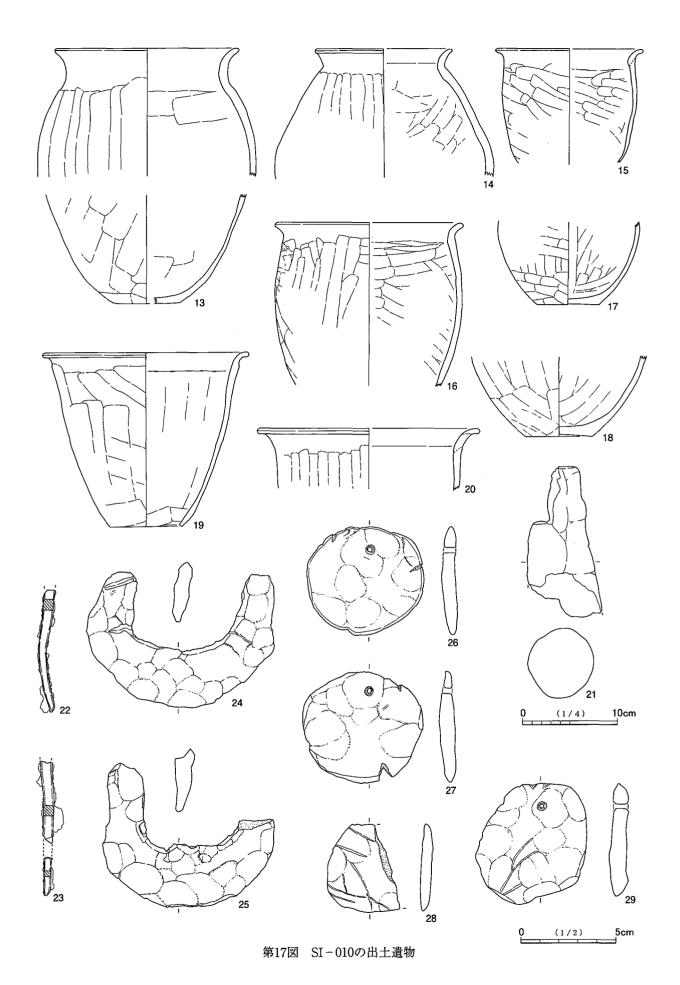
落下した土器群が片づけられずそのまま放置されたのはなぜか。このままでは、カマドは使用できないから、カマド上が整理されていないのは住居そのものが廃棄されたためと考えるのが妥当なように思われる。

出土土器はすべて土師器であった。

- 1 杯。口縁端部を1/2周ほど欠くほか完形。球体の一部を切り取ったような体部から、弱い稜をもってほぼ垂直に口縁部が立ち上がる。外面ヘラケズリのあとナデ、内面ヘラミガキ、入念に調整されるが二次的加熱を受け器肌は荒れる。
- 2 体部上部が2/3周ほど欠ける。扁平な体部から稜をもって外反する口縁部に移行する。
- 3 完形の杯。口径10cm、器高3.7cmと小型で、丸みを帯びた体部から、ほぼ直立する短い口縁部に移行する。口縁部は軽く内傾する部分と、逆に外傾する部分がある。体部内面は丁寧にヘラミガキされるが、加熱によるものか内外面とも器面の荒れが甚だしい。
- 4 杯の破片。扁平な体部から、わずかに内湾しつつ外方へ開く口縁部へなだらかに移行する。須恵器杯 蓋を模したものか。
- 5 杯又は高坏杯部の破片。浅い体部から強く外反する口縁部が立ち上がる。
- 6 体部から口縁部にかけて1/5周を失うが、本来は1個体分の破片が完存していたとみられる。口径9.2



第16図 SI-010住居跡と出土遺物



-- 29 ---

- cm、器高5.4cmの小型の椀。平底気味の底部から球形の体部が立ち上がり、口縁部は反りをもって内径する。長期の使用によるものか、内外面とも器面の荒れが著しく、口唇は全体に摩滅している。
- 7 椀。体部1/3周ほどを欠くが、本来は1個体分の破片が完存していたとみられ、表土除去の際に失われたものと思われる。大きめの平底から、内湾するカーブをもつ体部が立ち上がる。口縁部は短い。最大径は胴部にあり17cm、器高は11cmと、甕にしては浅い。加熱を受け煮炊きにも使われたようだが、当初は椀として作られたものと思われる。内外面ともヘラケズリのあと部分的にナデを加えるが、調整は粗雑といえる。
- 8 椀、1/2周残る。底部のない偏球形の体部に、軽く外反する口縁部がつく。体部外面へラケズリ、内面 ヘラミガキ。褐色、部分的に黒ずむ。
- 9 深目の椀、体部中位以上1/2周ほど残る。体部上部は内湾しつつ垂直に近く立ち上がる。口縁部もあまり外反しない。全体に黒ずみ、内面は黒色処理されたものかもしれない。
- 10 椀の破片。深めの体部をもち、口縁部との境の稜は目立たない。
- 11 甕。口縁部1/3周のほか胴部の破片を部分的に欠くが、本来は完形に復元できるだけの破片がそろっていたものと思われる。高さ20cmとやや小型の長胴の甕で、下ぶくれの独特の立面観をもつ。最大径は胴部下位にあり16cm、口径は13.5cmである。口縁部は短く外反する。内外面ともナデ調整され比較的平滑である。
- 12 長胴の甕。胴部1/4周ほどを欠くが、これも本来は1個体分の破片が完存していたとみられる。かなり 長目の胴部をもち、最大径は胴中位から上部にある。頸部はやや直線的に立ち上がり、スムーズなカー ブを描いて外反する口縁部に移行する。口縁端部はほぼ水平に短く張り出す。胴部の器肉は比較的薄く、 頸部が最も厚くなる。胴部外面ヘラケズリ、部分的にナデられ光沢をもつ。内面も横方向にヘラケズリ され、砂粒の擦痕が目立つ。全体的に加熱を受けている。
- 13 甕。胴中位以上をほぼ完存する個体と、胴下位1/3周ほど遺存する個体が復元され、胴中位の破片を欠くため接合できないが、胎土や色調から同一個体の可能性が高いと思われる。復元高は29~30cmと長目の胴部をもつ。最大径は胴中位から肩部にかけての部位にあり径は23cm、口径は19.4cmである。口縁部ははじめ垂直に近く立ち上がり、端部が強く外反する。胴部上半部は縦方向のヘラミガキ、砂粒の移動による擦痕が著しい。下半部外面は斜め方向のヘラケズリ、内面は全体に丁寧に調整され平滑である。
- 14 甕。胴中位以上1/2周。下ぶくれの胴部は、中位から肩部にかけて急激に径を縮め、頸部の径は胴部最大径(23cm)の半分ほどとなる。口縁部は短く外反する。器壁は全体にぶ厚い。外面はヘラケズリのまま、内面の調整も粗雑である。
- 15 小型の甕。胴中位以上1/4周の破片。最大径は口縁部にある。外面はヘラケズリのまま、内面は丹念なナデ。
- 16 甕。口頸部1/2周、胴中位は破片1点のみ接合。長目で張りのない胴部から短い口縁部が外反する。内外面ともヘラケズリされたままの部分と、ナデ調整されて平滑な部分が混在する。
- 17 小型の甕。胴下半部1/3周。胴部外面は細かいヘラケズリ、内面ナデ。
- 18 甕、底部から胴部下位まで完存。底径 7 cm、現存高8.5 cm。外面はかなり丹念にナデ調整され平滑である。内面は二次的加熱による剥落が著しい。
- 19 砲弾形の無底の甑である。胴下部と口縁部を1/3周欠くが、本来は完形に復元できるだけの破片が遺存

していたものと推測される。最大径は口縁端部にあって21.2cm、器高は18.3cm、底径7.6cm、器壁は薄い。内外面ともナデ調整され器面は平滑である。口縁部の下 $2\sim6$ cmほどの範囲が摩滅しているのは、甕の頸部内面と繰り返し接触したことによるものと思われる。

20 甑の口縁部破片。最大径は口縁部にあり、頸部以下徐々に径を縮め、無底の底部に続く形態で、胴部 にわずかなふくらみをもっていたと思われる。調整は入念で、全体に丁寧なつくりである。

土製支脚

21 支脚の上部破片で、現存長15.8cm、現存最大径7.4cm、上端の径は4cmほど(推定)と小さい。上端の径は小さいが、下部に向かってかなり急激に径を増していくので、基部の径はかなり大きいものだったと思われる。側面の線は直線的である。

鉄製品

22、23はともに断面が正方形に近い四角形で、やや蛇行しているが本来は真っ直ぐな鉄棒だったと思われる。最大で6mm四方の断面をもち、先端に向かって細まる。用途は不明である。

土製模造品

6点出土しており、うち2点はU字形鋤先の模造品である。24は完形で、最大幅9.9cm、長さ7.2cm、ややいびつなU字形で、刃部は刃先に向かって薄く仕上げられる。比較的写実的に作られているが、木部を挿入する刳りは表現されていない。両端部に向かって厚みを増し、端部が最も厚い。手捏ねで仕上げられ、全体に凹凸が目立つ。部分的に指紋が残る。

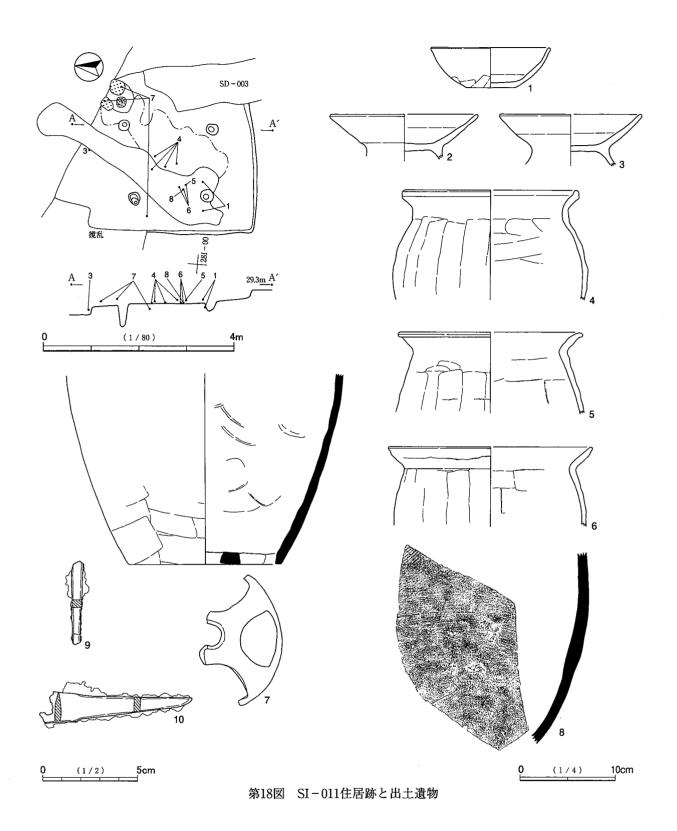
25は、本来は完形で遺存していたはずだが、発掘調査の過程で片方の端部を失っている。24とほぼ同じ大きさで、作り方も同じだが、表面はやや平滑に仕上げられる(指紋は残る)。形態もより写実的で、U字形のゆがみも少なく、木部を受ける刳りも表現されている。

有孔円盤形土製品は4点あり、3点(26、27、29)はほぼ完形、やや小型の1点(28)は1/2の破片である。いずれも手捏ねで仕上げられ凹凸が目立つ。表面に指紋が残る。焼き色は暗い赤褐色で、胎土、焼き色とも鋤先形土製品に共通する。26、27はいびつな円形、28、29も円形を意図したとみられるが、全体に角張って円形からはほど遠い。最大径は29を除いて6 cm強、28は4.6cmほどとやや小さい。厚さは最大8~9 mmと比較的薄い。焼成前に空けられた径1 mm前後の孔を一つもつ。孔は円盤の中央にはなく、縁に片寄って空けられている。吊り下げるには適した位置といえよう。ただし、孔縁に磨り減った様子は見られない。28の遺存部には孔が認められない。

これらは薄い円盤状で、穿孔されていることから、石製模造品の有孔円盤と共通する性格をもっていた可能性が高く、鏡を模したものと考えてよいと思われる。館山市東田遺跡¹⁾では、同じような円盤状の土製品で、紐を写実的に表現したものから、単に円孔一つで表現したものまで出土している。石製模造品のように双孔ではなく単孔であっても、鏡を模したものとみて間違いないことが分かる。ただし、東田遺跡の単孔の例も穿孔の位置は円盤中央である。本例は縁近くに片寄って空けられており、このようなものについても鏡の模造品と言いきれるかどうか何ともいえないが、可能性はかなり高いと思われる。

注1 城田義友・吉野健一「安房の古墳時代祭祀―館山市東田遺跡の事例―」『研究連絡誌』第53号、1998年 SI-011 (第18図、図版 6・21)

台地西北端の緩斜面部に位置する。後世の攪乱が甚だしく、溝SD-003によって東壁を、溝SD-004ほかの攪乱により北壁のすべての立ち上がりを失っている。現存する壁も高さは10~15cmしかない。



西壁の現存長2.2m、南壁は2.7mであるが、床面に4個の柱穴が残されているので、柱穴と現存壁との距離から推して南北軸長3.7m、東西軸長3mほどと復元される。南北に長い長方形が当初プランだったことになる。

カマドはほとんど原形をとどめないが、東北のコーナー部に山砂と焼土が認められ、袖の基底部と火床がかろうじて遺存していることが確認された。当遺跡ではSI-020も同様の位置にカマドを置くことが確認

されている。

柱穴のうち北東の1個だけが本来あるべき場所より40cmほど北にずれているため、柱穴を結んだ線は正しい矩形をなさない。ほかの3個の柱間隔は1.5m前後である。貯蔵穴、壁溝はない。

覆土中から土師器破片を中心とする土器片が採集されているが、攪乱土内のものが若干紛れこんでいるかもしれない。

土師器、須恵器の破片のほか鉄製品2点が出土している。

須恵器

- 7 五孔の甑。胴中位以下1/4周の破片。底径16cmという大型品で、胴部は内湾しつつ立ち上がる。胴中位 内面に、円弧を描く明瞭な当具痕が残る。同じ部分の外面は丹念にナデられ、叩き目は全く見られない。 胴下位の内面は横方向の粗雑なナデ、外面は横方向のヘラケズリ。底部の孔は外面から切りこまれてい る。
- 8 大型甕の胴部破片。器壁は10mmから最大14mmの厚さがある。胎土は緊密で、須恵器らしい焼色をもつ。 遺存部の上端外面に叩き目が残る。それ以外は内外面とも横方向に丹念にナデられ平滑に仕上がる。 土師器
- 1 杯、1/2周。体部は内湾しつつ立ち上がり、椀に近い形態をもつ。口縁部ヨコナデが内面では底部まで 及ぶ。外面は回転糸切りのあと手持ちヘラケズリ。
- 2 1/2周が残る。直線的に立ち上がる浅い体部に、外方へ大きく開く高めの高台が付く。高台は貼り付けられたものではなさそうである。
- 3 高台付き杯、2/3周。2とほぼ同形、同大の高台付きの杯で、同一人によって製作されたものと思われる。
- 4 甕、肩部以上一周。口径17.8cm、最大径は胴上位にあり、ほぼ垂直に立つ頸部から外反する口縁部にいたる。口唇はつまみ上げられ、端部はにぶい丸味をもつ。胴部の器壁は薄い。橙褐色。
- 5 甕の破片。6に似るが、口縁端部はぶ厚く、軽く外方に張り出す。4~6は胎土、焼色、調整法など 共通点が多い。
- 6 甕、肩部から上の破片。胴部から「く」の字状に口縁部が外反する。口縁端部は薄く仕上げられる。 器壁は薄い。橙褐色。

鉄製品

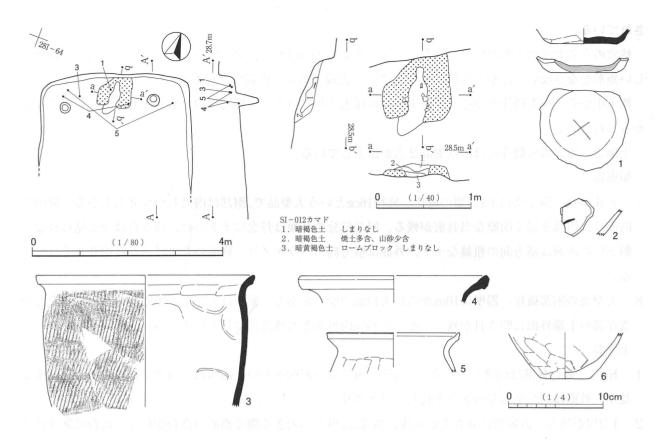
- 9 現存長3.7cm、幅、厚さが最大で4mmほどの棒状品で用途不明である。
- 10 刀子破片。現存長8cm、茎部は完存し長さは6cm、関部の幅は1.5である。

SI-012 (第19図、図版6・21)

台地南西部の緩斜面に位置するため竪穴の南半分を失う。床面自体も若干南に向かって傾斜している。主軸は北北西を向き、北壁中央にカマドを置く。

北壁の一辺は3.1mで、 $20\sim30$ cmの高さを保つ。東壁は2.3m、西壁は1.5mしか残らないが、ほかの住居の例から推して、東西軸長3.1mに対し、主軸長はこれより多少長かったものと思われる。カマドの両脇に直径 $20\sim25$ cm、深さ40cmの柱穴があり、柱間距離は心心で1.9mである。床面南半部にあるべき柱穴は2個とも検出されていない。

カマドは両袖の長さ50~60cmで総幅70cmと比較的小型で、煙道の壁面への掘りこみは認められない。



第19図 SI-012住居跡と出土遺物

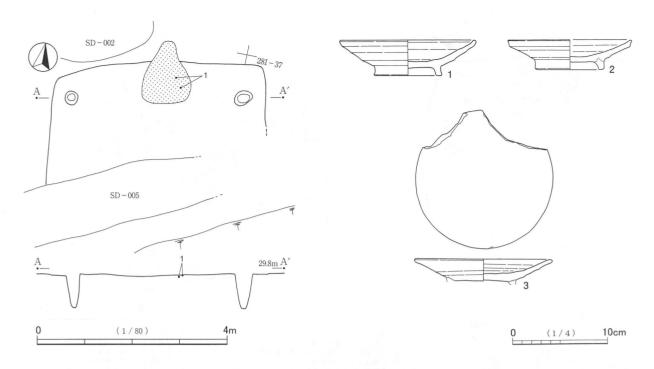
遺物は土器の小破片ばかりで、すべて奈良・平安期のものとみられ、それ以外の時代の土器片は含まれない。実測図を掲示した土器のほか、武蔵型甕の同一個体とみられる薄手の破片がかなりまとまって出土しているが、実測できるまでには復元できなかった。

須恵器

- 1 杯底部の破片。回転へラ切りのあと一方向へのヘラケズリ、体部外面は手持ちヘラケズリ。底面に浅い線刻の×印が焼成後につけられている。割れ口の1か所が磨られ、直線的に加工されている。目的は分からない。黒みの強い赤褐色、焼成は堅緻である。
- 3 甕又は甑、胴上部以上1/5周。口縁部は肥厚し、端部は尖る。胴外面に縦方向の平行叩き目、内面は丁 寧にナデられる。灰黒褐色、焼成は堅緻。
- 4 甕の口縁部破片。口唇は複合口縁状を呈する。灰黄褐色。 土師器
- 2 杯の体部細片、墨書の一部が残るが、何という文字の一部か分からない。
- 5 甕の口頸部破片。口唇はつまみ上げられる。器壁は薄い。赤褐色。
- 6 小型甕の底部付近の破片。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。

SI-013 (第20図、図版22)

台地中央部にあり、そのためゲートボール場造成の影響を受けたものか、壁上部を大きく削られ、壁は 床面から数cmまでの高さしか残っていなかった。後世の溝にも切られ床面の南半分を失う。主軸をほぼ北 向きにとる。北壁長は4.3m、西壁は現存長2.5mである。後世の削平と攪乱のため出土遺物は皆無に近い。



第20図 SI-013住居跡と出土遺物

北壁中央にカマドの基底部が残されており、そこから土器片数点が採集され、高台付皿 1 個体(1/2周ほどの破片)が復元された。

北東と北西コーナー近くに口径30cm前後、深さ70cmほどの柱穴があった。通常の位置よりかなりコーナーに近い位置にあるのが特色である。

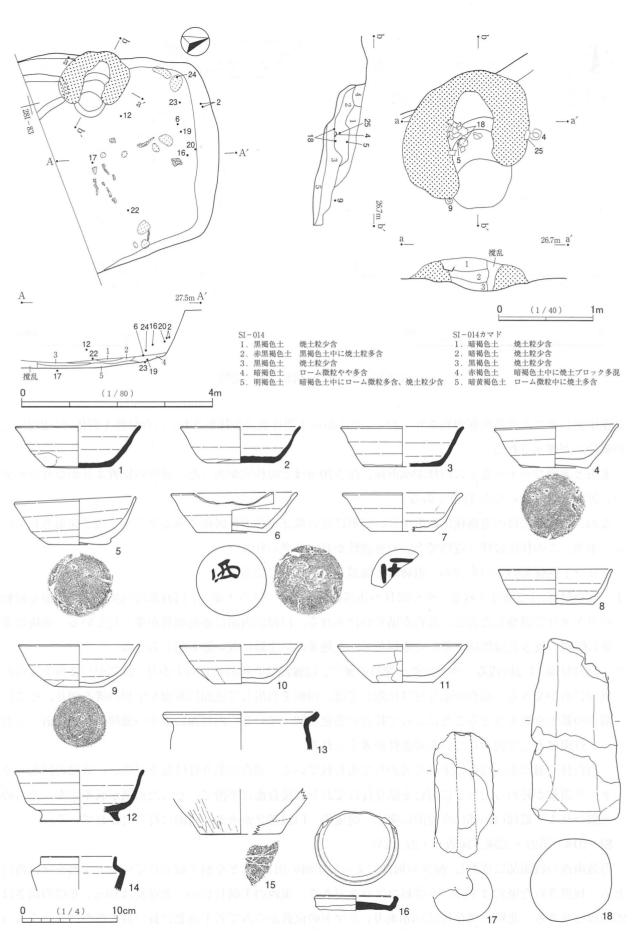
なお、表土除去後の遺構検出作業中に、完形に近い皿2点が本住居跡のあるグリッド内で採集されている。本来、この住居に伴う遺物であった可能性が高いと思われる。

グリッド内採集のものを含め、遺物は土師器3点がすべてである。

- 1 高台付皿、1/2周ほど残る。やや深目の体部は内湾しつつ立ち上がり、口唇部は内傾する。底面を回転 ヘラケズリで調整したあと、高台が貼りつけられる。口縁部内面に赤色顔料が塗られている。焼成は非 常に堅緻、焼き色は黒味を帯びた赤褐色で、在地産の須恵器に近い趣も感じられる。
- 2 高台付皿、1/2周残る。小型でやや深目の皿で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部がつまみ上げられ 外面に面ができる。高台の貼り付けに際しては、回転を利用して底面に断面 V 字形の溝を切り、そこに 高台の粘土を嵌入させることによって接合の強化を図っている。内外面に細かい油煙の粒が付着してお り、灯明皿として使われていた可能性が考えられる。
- 3 高台付の皿だが、高台はすべて剥がれて失われている。高台の貼り付け痕を見ると、底部の回転ヘラケズリ調整が終わったあとに高台を貼り付けており、接合面は平滑で、そのため剥がれやすかったものと思われる。皿部口縁部は直線的に開く。焼成後、口縁部2か所が意図的に打ち欠かれている。

SI-014 (第21·22図、図版6·22·23)

台地南西の斜面部に位置し、後世の堀割によって床面の南1/3ほどを削り取られている。主軸をほぼ西に とる。検出された竪穴は全体に不整形なプランである。東西の主軸長4.5m、北壁長は3.5m、北壁の高さは 90cmほどである。北壁の残存長は3.6mあり、カマドの位置からみて若干南北に長い長方形のプランをもっ



第21図 SI-014住居跡と出土遺物

ていたものと思われる。

床面上にはかなり多量の炭化材と焼土の堆積があった。本住居は鍛冶工房の可能性が高いので、鍛冶に伴って排出されたものかもしれないが、火災によって上屋が焼け落ちたものと普通に考えておいた方がよいと思われる。床面に柱穴は確認されていないが、焼け落ちた屋根材の存在から、当然のことながら何らかの方法で上屋が掛けられていたことが知られる。

カマドは壁面に直交せず、やや南向きに斜めに設置されていた。両袖は長さ80~90cm、総幅は1.4m、火床は10cmほど掘りくぼめられている。火床から土製支脚と、その上に置かれていたとみられる土器が出土している。また、かまどの手前、竪穴のほぼ中央部の床面直上で鞴羽口1点が出土している。

本住居ではほかに鉄製品残欠6点、鉄滓2点、軽石1点が出土しており、鍛冶工房の可能性が高い。ただし、鍛冶炉とみられる遺構は検出されていない。住居の破損部分に設けられていたのか、あるいはカマドの火床を利用していたのであろうか。

須恵器

- 1 杯。1/3周。土師器か須恵器か判断に迷う焼き上がりを示す。底部手持ちヘラケズリ。
- 2 杯。底部2/3周、体部は一部の破片。体部の開きが比較的少ない形態をもつ。底部は一定方向のヘラケ ズリで調整される。黒褐色、焼成はきわめて堅緻である。
- 3 杯。底部1/3、体部は一部の破片。体部の開きの少ない側面観をもち、底部は一方向の手持ちヘラケズ リ、器壁は薄い。橙褐色で、口縁部のみ須恵器らしい灰色を呈す。
- 12 高台付き杯。1/4周。深めの体部をもち、高台は貼り付けられたもの。器壁は薄く、外面は灰色、内面は橙褐色。
- 13 小型甕の破片。器壁は薄く、口縁部は複合口縁状に肥厚する。赤褐色。
- 14 小型の短頸壺。薬壺に似た形態だが、肩と頸部内面の稜は鋭角的である。胎土には部分的に大粒の長石が混じる。焼成は堅緻で、焼き色は灰色である。

十師器

- 4 杯。口縁部を部分的に欠くほか完形。底部はぶ厚く、底面は回転糸切りのあと無調整。
- 5 杯。口縁部の一部を欠くがほぼ完形。底部がぶ厚く、回転糸切り無調整であることや、胎土、焼き色なども4との共通性が高い。
- 6 杯。ほぼ完形、口縁部の一部のみ意図的に打ち欠かれている。底面は回転糸切り、無調整で、「西」の 文字が墨書される。胎土に長石、雲母粒などを含み、焼成は堅緻で焼き色は赤褐色である。
- 7 杯。1/5周ほどの破片。底面回転ヘラケズリの後に「西」の文字が墨書されている。橙褐色。
- 8 杯。底部1/2周、体部1/8周ほどの破片。口径にくらべ底径が大きい箱形の側面観をもつ。底面から体部下部にかけて丁寧に回転ヘラケズリされる。上部はヨコナデ、底部内面も回転を利用したナデで平滑に仕上げられる。
- 9 杯。底部完存、体部はごく一部の破片。底部は回転糸切りのあと回転ヘラケズリ、胎土、焼き色とも7によく似る。
- 10 杯。1/2周。底径にくらべ口径がかなり大きい。底部は回転ヘラケズリで調整。橙褐色、焼成は堅緻である。
- 11 杯。1/5周ほどの破片。内面は全面的に丹念にナデられ平滑である。橙褐色。

- 15 **甕**の底部破片。底面に木葉痕が残る。胎土には多量の長石、雲母粒を含む。 転用硯
- 16 高台付き杯の、底部と高台部分の破片で、高台に囲まれた杯底面を硯に転用し、朱墨を摺るのに使われている。体部は高台の付け根で打ち欠かれ、破砕面は磨って調整している。高台の一部が欠けるが、その破砕面も磨られ、そのあとに朱墨が付着しているので、その状態で使われていたのは確実である。裏面(底部内面)も滑らかに磨られ、朱墨も薄く付着しているで、両面とも使用されていたことが分かる。もとの須恵器の胎土は緻密で、焼き色は橙灰色を示す。

羽口

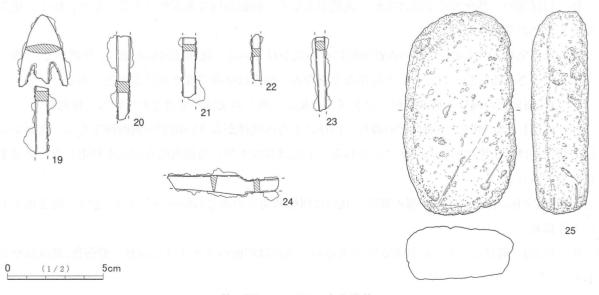
17 長さ13cm、外径は最大で6cm、先端でやや細まる。孔径は1.7~1.8cmとほぼ一定している。土製支脚に共通する胎土をもち、焼き色も赤褐色で支脚に似る。先端は加熱を受け、部分的に灰色に変色するが、ガラス質の膜にまでは変質していない。

土製支脚

18 底部から上19.1cmまで残る。最大径9.5cm。上部の割れ口に、大豆の粒が抜け落ちたような形状、大きさの穴が2個認められる。実際に豆粒の脱落痕なのか、何らか別の方法で付けられたものなのかも分からない。目的についても不明とせざるを得ない。

鉄製品

- 19 鉄鏃の身と箆被の破片で、接合はしないが、箆被断面の形と大きさからみて同一個体だったものと思われる。身は平根の長三角形鏃で、腸刳の深い逆刺を両側にもつ。身の先端から逆刺端まで3.7cm、身幅は最大2.7cm、厚さは5mmでる。箆被は現存長3.5cm、断面は6×5mmの長方形である。
- 20 現存長4.3cm、断面正方形(最大で一辺 7 mm)の棒状品で、釘の断片の可能性が高い。
- 21 現存長3.2cm、平べったい長方形の断面形をもつので、鉄鏃の箆被部の破片とみられる。
- 22 現存長2.5cm、鉄鏃の箆被部破片かと思われる。
- 23 断面形状からみて鉄鏃の茎の破片と考えられる。現存長3.8cm、現存部の最大径は5mmである。



第22図 SI-014の出土遺物

24 刀子の破片。現存長5.8cmで刃部と茎のそれぞれ端部を欠く。刃と棟の両側に明瞭な関がある。身幅は 関の部分が最大で1cmの幅がある。

石器

25 軽石。長さ10.5cm、幅5.5cm、厚さ2.5cmの比較的整った長円形で、現在よく見かける軽石に形が似ている。表面に数か所、鋭い刃で引かれたような直線状の傷が残り、砥石としても使われることのあったことが分かる。

SI-015 (第23図、図版7·23)

台地西南端の斜面部にあり、南西壁の立ち上がりを失っている。SI-016と重複し、両址ともカマドが良好な状態で遺存していたことから、本址の方が後から造られていることが確実である。

主軸を西北方向にとり、西北壁にカマドを置く。東北壁の長さ3.0m、カマドの位置から推して西北壁もほぼ同じ長さだったとみられ、正方形プランをもつ竪穴だったことが分かる。東北壁の高さは40cmほどあり、西北と東南の壁は斜面の傾斜に合わせて次第に高さを失っていく。

床面に柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。カマドの両袖長は60cmほど、総幅は75cm、煙道の壁面への掘りこみは20cmほどと浅い。火床内に、若干の土器片と鞴羽口を転用した支脚が残されていた。羽口は先端を上にして、直立した状態で出土している。

また、扁平で不整形な絹雲母片岩の破片 3 点(一辺10~18cmの不整方形や三角形)が出土している。当地域でよく見られる古墳の主体部(箱式石棺)の材質と同じものであり、近くの古墳から転用したものと思われるが、何のために用いたのか不明である(実測図省略)。

須恵器

2 高台付き杯の破片。かなり大きめの体部に低い高台が付く。高台は貼り付けられたものである。扁平 な底部から、垂直に近い体部が立ち上がる。口縁部の外反も弱く、全体に箱形の側面観をもつ。内外面 とも黒ずんだ灰褐色の焼き色を示すが、胎土は橙褐色である。

土師器

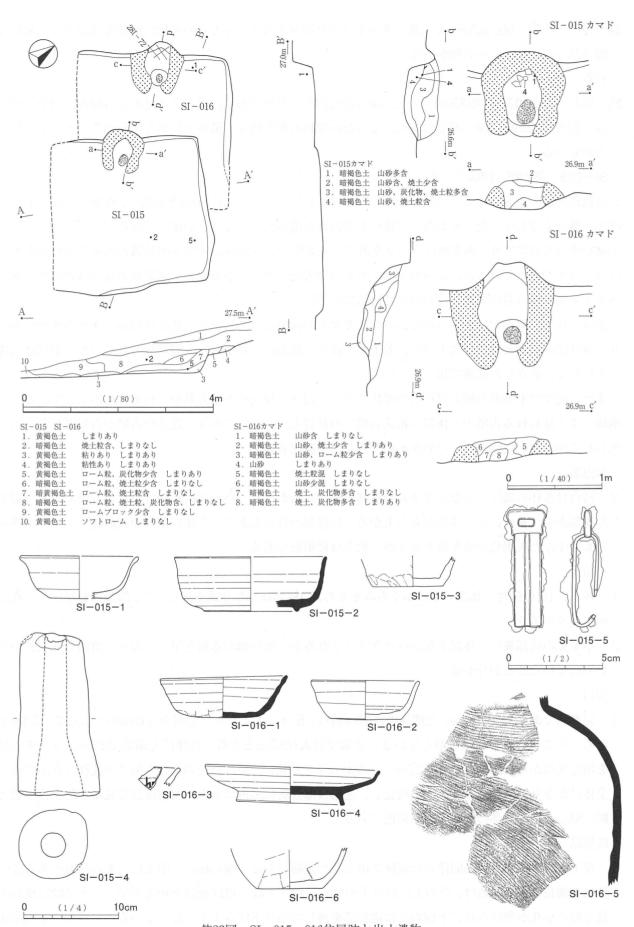
- 1 杯。1/4周の破片。体部下半はふくらみをもち、口縁部はかなり強く外反して、端部は肥厚する。底部 回転ヘラケズリ。
- 3 小型甕の底部破片。体部下端がヘラケズリされるが、削り面が匙面を呈しており、湾曲した工具が用いられていたことが分かる。

羽口

4 完形品である。長さ17cm、先端部の径6.5cm前後、徐々に太くなって先端から11cmのところで径7.3cmとなる。そこからさらに径を増していき、末端で最大径8.7cmとなる。孔径は先端部で2.2cm、少しずつ径を増し先端から11cmのところで2.7cm、そこからラッパ状に一気に径を増し、末端での孔径は5cmである。全体にかなり加熱を受け、表面が硬化し、先端は部分的に黒色になる。剥落部分で見ると胎土は土製支脚に似ており、内部の焼き色も赤褐色である。

鉄製品

5 覆土中の床面から10cm弱浮いた部位で出土した遺物である。幅14mmの、中央に一条の凹線のある薄い 鉄板を細長い環状に曲げ、その上に釣り手が付く。釣り手は一辺1.7mmほどの方形で、上下2段に横長の 長方形の小孔が空けられ、下側の孔に環状部を通して吊り下げるようになっている。ただし、その環状



第23図 SI-015、016住居跡と出土遺物

部の下(小孔の下の辺)の鉄棒部分は欠け落ちている。その形態は刀の足金物に似るが、環状部の幅が 狭く、鞘を嵌め込むだけの幅と丸味がない。

SI-016 (第23図、図版7・23・24)

SI-015と重複する。本址の方が先にあり、その廃絶後、おそらく竪穴が完全に埋没したのちにSI-015が営まれたものと思われる。SI-015と同じく主軸を西北に向け、西北壁にカマドを置く。西北壁と東北壁が残り、残りのよいところで40cmほどの高さを保っていたが、それぞれ西南と東南のコーナー付近で高さを失っている。このため正確な壁長は分からないが、推定で各辺3m程度、最大にみても3.2mをこえることはなかったと思われる。

床面には柱穴も貯蔵穴も認められず、壁溝もめぐらされていなかった。カマドの両袖長は70cm、総幅は1m、煙道の掘りこみは奥行き30cmほどである。

ほぼ完形に復元された須恵器杯が1点出土している。ほかに、表土除去後の遺構検出作業中に採集された完形に近い土器2点(須恵器高台付盤と土師器杯)が、本住居のあるグリッド(I29-62)内での出土と記録されており、覆土中の遺物であった可能性が高いと思われるので、この項で扱っておく。

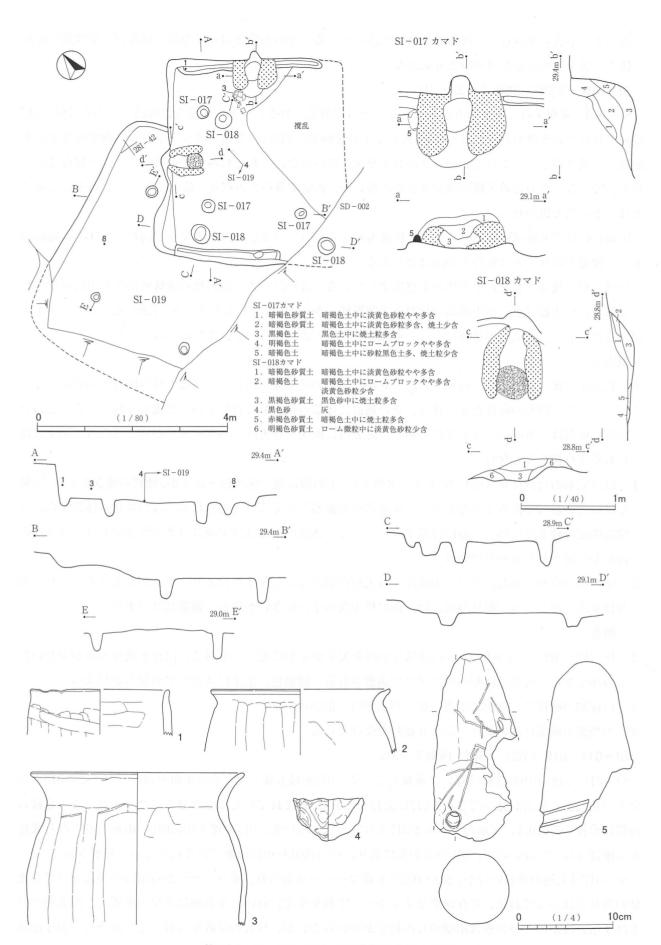
須恵器

- 1 新治産の杯、ほぼ完形に復元された。底部と体部の境界部で割れ、底部は1枚の円盤状の破片になっていたので、円形の底部を先に作り、その側面に体部の粘土を接合していって成形されていることが分かる。底部は一方向のヘラケズリのあと、部分的に直交する方向のヘラケズリが加えられる。胎土には長石や雲母粒を多く含む。
- 4 ほぼ完形の高台付盤(I29-62グリッド出土)。土師器に近い焼き色を示すが、硬質の焼き上がり、土師器にはない器形であることなどから、在地産の須恵器とみてよいと思われる。浅い皿状の体部から、比較的明瞭な稜を境に外反する口縁部が立ち上がる。体部内面はほぼ全面ヨコナデされており、ロクロの回転が利用されたものと思われる。
- 5 甕の胴中位から頸部にかけての破片。最大径が肩部ないし胴上位にあり、そこから大きくくびれ、頸部は垂直に近く立つ。胴部外面には一面に横方向の平行叩き目が残る。頸部はヨコナデ。 土師器
- 2 杯 (I29-62グリッド出土)。口縁部 2 か所を欠くが完形に近い。小型で、口径と底径の差が少ない箱 形の杯である。底部は回転ヘラケズリで調整される。橙褐色、胎土にスコリアの混入が目立つ。
- 3 口縁部の細片で、外面に墨書「加」の文字の一部が残る。
- 6 小型甕の底部付近の破片。かなり加熱を受けている。

SI-017、018 (第24·25図、図版7·24)

SI-017、018、01903 軒は互いに重複している。017が最も新しく、その床面を剥がしたところ0180カマドの基底部と柱穴が見いだされ、017に先行して018が営まれていたことが分かった。また、この2 軒の西側に重複する019は、床面のレベルが017より20cmほど高いが、017の覆土中に019の床面とみられる硬化面は確認されていないので、019の方が先にあり、その後 $018 \rightarrow 017$ の順で営まれたものと理解される。

SI-017は上述の重複のほか、SD-002にも南コーナーを切られ、東コーナーから床面中央にかけても後世の攪乱がはいっており、遺存状態はよくない。主軸を東北に向け、東北壁にカマドを置く。西北壁の長さは4m、ほかの3つの壁は損壊のため長さが分からないが、柱穴の位置から推してそれぞれ一辺4mほ



第24図 SI-017、018、019住居跡と出土遺物

どの長さだったとみられる。東北壁は70cmほどの高さをもつ。東北壁と西南壁には、壁下に壁溝が見られる。

床面に6個の柱穴があり、その配置状況から口径の小さい方の3個が017に、大きい方が018に伴うことは確実である。残りの各1個(東コーナー寄りのもの)は後世の攪乱により失われている。017の柱穴は口径25cm前後、深さは $35\sim50$ cm、柱間間隔は2mである。

カマドは袖長50cm、総幅90cm、壁面に幅25cm、奥行き20cmの煙道の掘りこみが見られる。左袖の外側に接して土製支脚が出土している。

SI-018は017によって切られ、カマドと西北壁の一部(カマドの左側)及び柱穴3個が残るだけである。 竪穴壁は017とほぼ共有するようで、018に伴うべき独自の壁面はカマドの左から西側コーナーにかけてだ けのようである。この部分は、017のカマドのある壁面とは若干方向が異なり、口径の大きい柱穴とも平行 しているので、018の壁面とみてよいと思われる。柱穴は口径30~40cm、深さ30cm前後である。

それにしては壁と柱穴の間隔が近すぎ、東北の注穴は逆に壁から相当離れている。カマドの位置から推して018の東北壁は017の壁とほぼ同じ位置かやや内側にあったとみられるので、018の柱穴は向かい合う壁コーナーを結ぶ対角線上に正しく配置されてはいなかったことが分かる。柱穴間隔は主軸方向の一対が2.7m、これに直交する一対は2.5mで、主軸方向に若干長い長方形プランをもっていたことが分かる。

上述の状況から、018の竪穴プランは017とほぼ同大で、ただ東北壁は現状の017の壁より内側にあったのではないかと推察される。また主軸方位も018の方がごくわずか東に振れていたものと思われる。このように見ると、017と018の重複は偶然のものではなく、018の老朽化に伴い、同じ住人によって竪穴の若干の拡張と、カマドの造り替えが行われた結果ではないかと思われる。床面のレベルもわずかに017の方が高く、古い床面に土を入れて床を貼ったものとみられる。

カマドは基底部だけかろうじて残る。袖長60cm、総幅65cm、煙道の掘りこみは幅15cm、奥行き25cmほどである。018に確実に伴う遺物はないが、上に見たような建て替えの事情が的を射たものとすれば、018の廃絶時期は017への建て替え時に同じとなり、営造の時期はこれをさかのぼること20年±10年ほどのことと見積もることができよう。

出土土器は土師器の破片だけであった。

- 1 小型甕。口頸部の破片で、頸部がほとんどくびれない、椀ないし鉢に類する形態をもつ。外面は横方 向のヘラケズリ、内面はナデ。
- 2 口頸部1/3周の破片。比較的小型の甕で、最大径が肩部にあり、以下底部に向かってそれほどすぼまらない側面観をもっていたと思われる。口縁部は短く外反する。
- 3 甕。口頸部はほぼ一周、胴中位は部分的に遺存する。かなり長胴で高さは30cm以上あったと思われる。 胴部の張りは弱く、頸部のくびれも弱い。全体に寸胴な側面観といえる。外面は縦方向のヘラケズリ、内 面は横方向のナデ、頸部内面に煮こぼれが付着している。
- 4 手捏ね土器。2つの破片から全体の2/3周ほどが復元された。破片は大きい方の1片がSI-017から、小さい方がSI-019から出土している。半球形の椀形に仕上げられるが、器肉はぶ厚く、器面の凹凸が甚だしい。所々に縄文のような圧痕が見えるが、はっきりしたものではなく、どのようにして付けられたのか分からない。焼成は堅緻である。

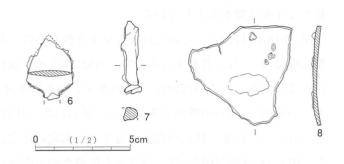
十製支脚

5 SI-017のカマド左袖の外側に接して、上端を住居中央に向け横たわった状態で出土した。現存長19.6 cm、現存部最大径は推定で10~11cm、上端の径は3cmほど、先端は丸味をもつ。下半部に横方向に貫通する孔がある。孔径は15~16mmで、焼成前に空けられている。片寄った位置にあるので、もう一方の側にも平行する孔があったかもしれないが、破損しているため確認できない。何のために空けられたものかも分からない。外面に直線状の沈線が見ら

れる。これは、混和材として混ぜこまれた藁のような植物の茎が、焼成によって燃え落ちたことで残されたものである。

鉄製品

6 鉄鏃。五角形の身の部分だけ残り、茎を失っている。身の長さ3cm、最大幅は2.3cmである。7 現存長3.7cm、径5~6mmの細い鉄棒状の断片で、一端が叩かれ、短く折れ曲がる。用途不明である。



第25図 SI-017、018、019の出土遺物

SI-019(第24·25図、図版7)

先述のとおりSI-017、018に切られており、これらより古く営まれた住居の跡であることは確実である。カマドが認められなかったので、カマドが導入される鬼高期以前、和泉期より古い住居跡の可能性も考えられないことではない。胴張りしない隅丸方形という竪穴プラン上からは、五領期の可能性が最も高そうである。ただ、床面中央部に炉は認められず、竪穴内からその時期の遺物は見いだされず、遺跡全体をみても古式土師器の出土は皆無に近いのでその可能性は低い。

竪穴の西壁と南壁を後世の攪乱溝によって切られているため、本来は西壁にカマドが置かれていた可能性が高いと思われる。西壁にカマドを置く例としてSI-009、010、014などがあり、中でも010は本址と同じく主軸を西南西にとっている。このような類例の存在からみて、本址も主軸を西南西にとり、西壁中央にカマドがあったものと考えておきたい。

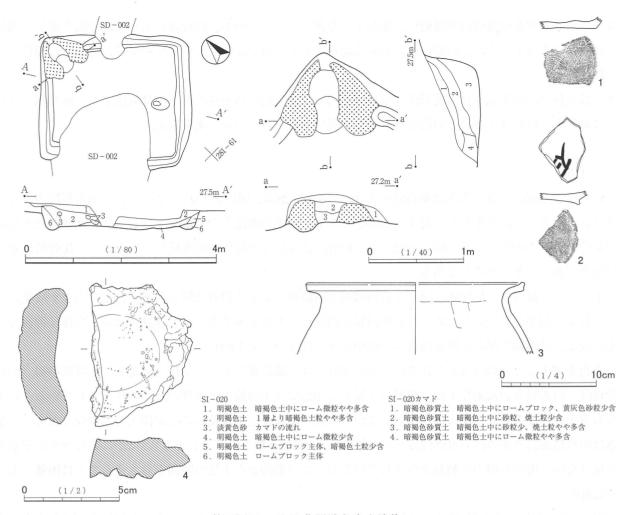
柱穴の位置から推定して、主軸長は5.3mほど、直交する軸長は4.3mほどとなり、主軸方向に長い長方形プランをもっていたことが分かる。床面に柱穴3個が残る。いずれも口径25cmほど、深さは $40\sim50$ cmで、床面東南部の1個はSI-017、018に切られ検出されていない。019と017の床面のレベル差と、柱穴の深さからみて、017床面に柱穴の底部が残っていてもよさそうだが、確認されていない。

覆土中から土師器破片が少量と、鉄製品が1点出土した。鉄製品(8)は厚さ1.5mmの軽く湾曲した鉄板で、側縁はすべて破砕面である。用途不明である。

SI-020 (第26図、図版7·24)

台地西端の緩斜面部に位置するため、壁は西に行くほど高さを失うが、かろうじて西南壁の立ち上がりも確認できた。また、後世の溝SD-002が住居中央を西南から北東方向に走り、壁と床面の一部を損壊している。

四壁は真北に対しほぼ45度振れている。カマドは壁中央部ではなく、竪穴の北コーナーに設けられていた。床面の南側、南東壁際には柱穴が1個あった。長径40cm、短径25cm、深さ40cmの長円形で、入口の階



第26図 SI-020住居跡と出土遺物

段を支えた柱穴とみて間違いないと思われる。したがって、カマドの位置にかかわらず、竪穴の主軸は西 北方向ととらえられる。

主軸長は3.2m、西北壁の長さ2.5mに対し東北壁は3mで、主軸方向に若干長い長方形プランである。あまり胴張りせず、隅の丸みも少ない。カマド付近の最も残りのよいところで壁の高さは70cm残っていた。壁際には壁溝がめぐり、当初は完全に一周していたと思われる。

カマドの設置位置はやや異例だが、構造は両袖をもつ通有のもので、ただ壁面への煙道の掘りこみがない点が注意される。平面図を一見して分かるように、両袖は竪穴コーナーの脇に設置され、袖にはさまれた火床の奥に、おのずから奥行きが生じており、コーナーがそのまま煙道の役割を果たすことになる。ある意味、合理的な設置場所の選定が行われているといえるだろう。

遺物量は少なく、土師器破片と鉄滓が出土している。

- 1 杯の底部破片。底面に、回転糸切り後の回転ヘラケズリ調整痕と、焼成前に描かれた×印が残る。
- 2 杯の底部破片。底面に回転糸切り痕が残る。切り離し後、中央部を下から軽く押し上げ、体部下部外面をヘラケズリすることによって、低い台を作り出している。内面には墨書の文字が見られる。あまり鮮明でなく、字の右と下半を欠くため判読が難しい。「在」「右」「石」「原」などが候補となるが、どれとも決しかねる。

- 3 いわゆる常総型甕の口頸部破片。頸部がやや強くくびれたのち、口縁部が水平に近く張り出し、端部 は上につまみ上げられ、外面に窪みのある面ができる。胎土には長石の小粒を多量に含む。橙褐色。 鉄滓
- 4 最大径7cmの半裁された椀形滓。厚さは最大で2cm、割れ口を見ると下半は気泡が多く海綿状、これに対し上半は厚さ1cmほどの均質な金属質の凝固体になっている。重量116g。

2 土坑

いわゆる土坑状の落ちこみは多数検出された(第27・28図、図版8・9)。このうち、ある程度の整ったプランと大きさ、深さをもち、覆土の状態からみても近年の攪乱穴や木根痕ではないと判断された土坑は25基である。このうち1基(SK-022)は、底面にびっしりと炭化物が堆積していたので、比較的近年の炭焼窯であることが明らかである。

土坑の分布範囲は、住居跡と同じく台地縁辺の緩斜面にかかる辺りに限られる。台地の中央から奥にかけて近年に削平されているため、住居跡同様に消滅したものが多くあったと推測される。全体に散漫な分布状況で、計画的な配置や特定箇所への集中はみられない(第7回)。

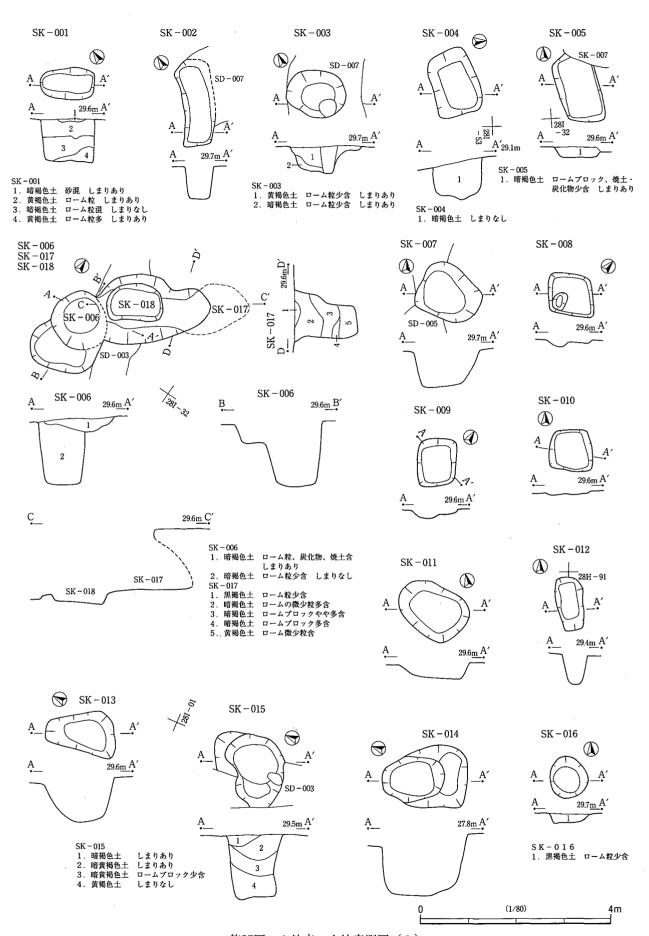
遺物を出土したものは3基しかない。SK-004では土師器細片4点(奈良・平安期)と時期不明(中近世以降)の素焼きの微細片1点(盤形の土器か)、025では土師器1と近世の瓦が数片出土している。いずれも覆土の埋没過程での混入品とみられるが、埋没の終期が近世に及ぶことが確実で、少なくともこの2基は中世以前にさかのぼる可能性はきわめて低い。025は不整形のプランをもち、ほかに似たプランを示す土坑はない。用途不明の鉄製品が出土しているが、この遺物から土坑の時期をおさえることは困難である(第28図)。

004は平面が隅丸長方形、壁も垂直に近く掘りこまれ箱形の断面形をもつ。これと類似のプランをもつ土坑がいくつかあり、005、009が最も近いが、ほかにも正方形状の008、010、022、胴張りの度が強く不整な長円形の001、011、012、より不整形になった013、020などがある。形態の類似から、時期や性格の共通性も考えられないことではないが、もともと単純な構造のため似ているといっても何ほどの共通性を反映したものか分からない。長さ $2\,\mathrm{m}$ 未満、幅 $60\sim70\,\mathrm{cm}$ という長方形土坑は、そのプランと大きさから墓坑とみることは可能だが、そのことを裏書きする出土遺物などは皆無であり、土層図からは人為的に埋め戻された状況を示すと認められるものはない。

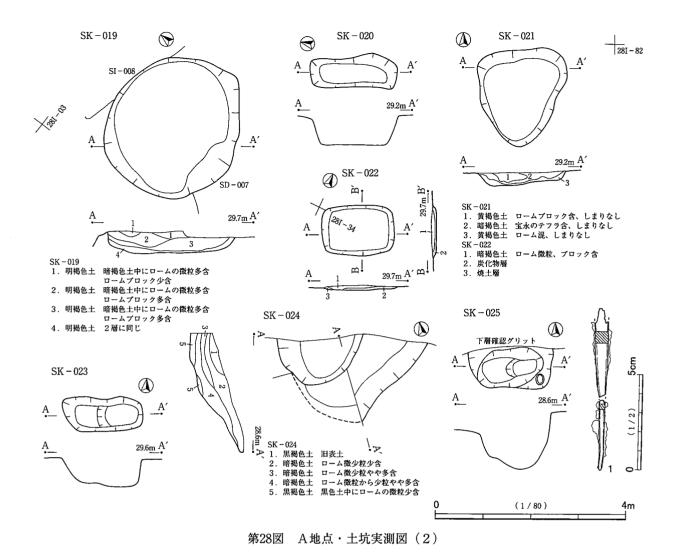
円形プランのものにSK-003、006、016があり、また円形で直径が3mに近い大型の019もある。006と重複する017、018のうち、017は横穴状に掘りこまれており、全体の構造は不明ながら地下式坑ととらえるべきかもしれない。横穴状に掘りこまれた部分は奥行き1.6m、最大幅1m、高さは最大で1.1mほどである。以上のとおり、構築の時期、その性格の分かる土坑はない。ほとんどが近世以降のもので、雑多な目的のために無計画に掘りこまれたものと思われる。017のみ地下式坑の可能性があり、そうであれば近世初頭以前にさかのぼる遺構ということになる。

3 溝

溝は長短、広狭様々なものが確認された(第29図)。そのうち覆土の状態などから、農作業などに伴って 明らかに近年掘られたと認められるものを除外し、覆土のしまりがよく、ある程度古い年代に埋没したと



第27図 A地点・土坑実測図(1)



みられるものを近世以前の遺構とみなし、SD-001~007(うち006は欠番)の遺構番号を付した。

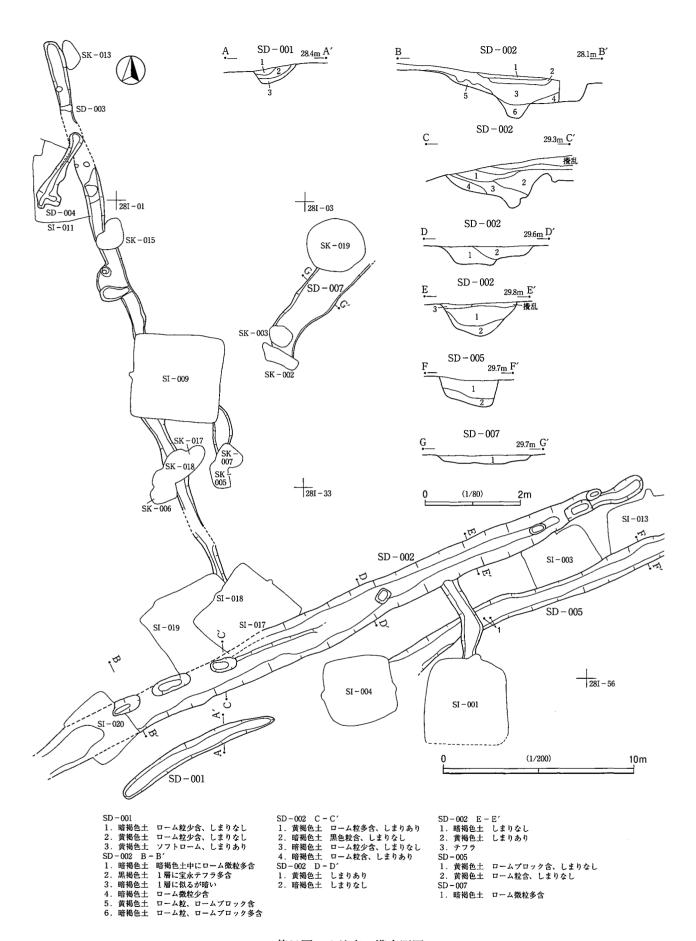
住居跡と重複したものは、すべて住居の覆土を切りこんでおり、古墳時代後期ないし奈良・平安時代以降に掘りこまれたものと分かる。

台地の南側、平坦部から緩斜面に移行するあたりに、長く直線的なSD-002が東西方向(実際は西南西から東北東の向き)に伸びている。その南に平行してSD-001と005があり、この2条は本来一続きの溝だったと考えられる。

台地の西側、緩斜面に移る手前あたりに南北方向に直線的に伸びるSD-003がある。この溝は東西方向の溝SD-002にほぼ直交するが、002は両者の交点を通りこして西方に伸びており、方形区画を構成することはない(交点に当たる部分に住居跡SI-017があるため交点の状況は不明)。

このSD-003に、その北端近くで斜めに重複する短い溝がSD-004、その東南15mにあってこれと平行する短い溝がSD-007である。

どの溝も底面に硬化面の見られるものはなく、道路として利用されたものでないことは明らかである。溝に伴う特別な遺物は認められず、付属施設もない。どれも設置目的を明らかにするのが困難な遺構といえるが、細長い溝という形態をとることからみて、何らかの遮断、分離、防備などを意図した区画溝であったことは間違いない。



第29図 A地点・溝実測図

何を、何から、何のために区画しようとしたものか。遺構の重複状況から奈良・平安期以前の集落を囲うためのものでなかったことは間違いない。中世以降の建物跡も台地上では検出されていないので、その時期の居館を囲うためのものでもない。どの溝も、堀というほどには幅も深さもそれほどなく、また、あまり厳密に掘りこまれておらず、計画性はあまり感じられない。

これらの点から、農作業に伴う根切り溝、あるいは利用目的を異にする土地の境界を明示するため、家 畜などを囲いこむため、などの溝の可能性も考えられるが、目的を特定することはできず、すべて性格不 明の溝としておくしかない。

以下、それぞれの長さ、幅、深さ、全体の形状などについて略記しておく。

SD-001 (第29図)

西南西から東北東の向きをとる。中央部がわずかに北側に張り出す緩い弧状を呈する。現存長9m、幅は最も広い中央部で90cmほど、深さは30~40cmで、東端部は10cmほどとなる。

掘りこみの傾斜は緩く、壁と底面の境ははっきりしない。横断面形は不整形の中華鍋底形とでもいえようか。

覆土は住居跡のそれと同じようにしまりがよく、上半部は黒褐色土が主体で、下層にいくほどローム粒 主体の黄褐色土となり、長時間をかけて自然埋没したことが分かる。覆土中からは土師器や須恵器の破片 が少量出土したが、実測可能なものはない。ほとんど奈良・平安時代の土器で、埋没過程で自然に流入し たものとみられ、いずれも溝の時期をおさえる資料にはならない。

SD-005 (第29図、図版9)

遺構番号が前後するが、001の延長上にある005について先に記す。001の東に住居跡SI -004があって、005はその東壁からはじまる。001の東端から7 mほど途切れているが、これはその間にSI -004のほか土坑 SK -004などがあるためで、本来は001と005は一続きの溝だったと思われる。現存長は17m、幅は1 m前後、深さは $60\sim70$ cmと深い。掘りこみの傾斜は垂直に近く、平らな底面との境が明瞭な、箱形の横断面形をもつ。覆土の状態、遺物の出土状況は001に共通する。SD001、005を一連のものとみた場合、総延長は33mほどとなる。

SD-005からは200点ほどの土器片(ほとんど奈良・平安期の土師器破片)が出土し、中に「加」の文字の墨書がある土師器破片、口縁部に打ち欠きのある杯などがあった。中近世の遺物は採集されていない。 土師器(第30図、図版24)

- 1 杯。体部1/2周、底部完存。体部は2か所を意図的に打ち欠かれたような感じもあるが、確実とはいえない。体部外面の割れ口部分に墨書文字のごく一部が残る。底部は回転糸切り無調整。
- 2 杯の破片で、体部外面に「加」の文字の墨書が残る。

SD-002 (第29回、図版9)

SD-001~005の北側2m(上端線間の距離)を隔てて、これと平行して走る溝である。延長34mが遺存する。幅は中央部で2mと最も広くなり、東に向かうにつれて幅を減じ1mほどとなって終わる。深さは東端近くで70cmほどと最も深く、西半の方が浅いがそれでも50cmほどはある。掘りこみの傾斜は総じて緩いが場所によって急なところもあり、断面形状も中華鍋底形が基調だが箱形に近いところもある。

溝の中央よりやや西寄りのところでは、この溝が埋没したあとに覆土を切って掘りこまれた溝があった。 南側壁を共有し、幅は半分ほどだが深さは20cmほど深い。延長5mほど確認されているが、西側は土坑や 住居跡が重複しているため、どこまで続いたものか判然としない。

溝の底に小土坑が7個あった。覆土の状況から、溝の覆土を切りこんだものは確認されず、溝と一緒に自然埋没しているようなので、溝が埋まる前に掘りこまれたことは確実で、溝の掘削と同時に設置された可能性も十分考えられる。溝の東端部と西端部に各3個、中央部に1個あり、両端の各3個は溝の方向に長い長円形のプランをもつという共通性があり、相互の関連性を物語る。これに対し、中央の1個は溝の方向に対し斜めになり、ほかとはちがう正方形に近い隅丸方形のプランをもつ。中央のものだけ性格が異なっていたことがうかがわれるが、それぞれの具体的な設置目的はよく分からない。

東端部の3個は長円形といってもやや角張ったプランをもつ。最大のもので長径1.4m、短径70cm、最小のものは70cm×50cmほど、深さは3個とも溝底から25~35cmほどである。西端部の3個は長円形というにふさわしいプランで、総じて東端部のものより大きい。最大のもので2.2m×0.7m、最小のもので長径80cmある。深さは20~30cmとそれほど深くはない。

下総台地の遺跡ではよく、底面に等間隔で一定の大きさのピットが並ぶ溝が見いだされることがあるが、 それにくらべれば並び方はまばらで、穴の形も不ぞろいである。溝自体の設置目的とともに、溝底に見い だされた小土坑の性格も不明といわざるを得ない。

覆土中から中国銭1点(太平通寶:初鋳976年)が出土している(第56図1)。ほかには少量の土器片があっただけで、中国銭によって溝の上限がおさえられるにすぎないが、仮に溝の埋没時期が中国銭の流入期に近いとすれば、中世の溝の可能性も出てくることになり、古屋城跡などとの関連が注目される。

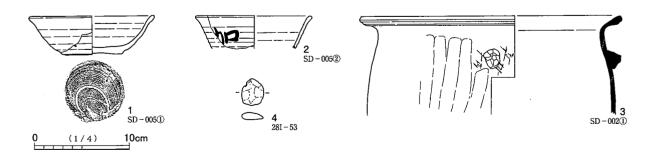
奈良·平安期の土師器片100点ほど、須恵器破片若干が出土しているが、ほとんどは摩滅の激しい細片であった。近世の瓦片も採集されている。ほかに、旧石器時代の頁岩製のナイフ形石器 1 点(第55図12)が出土している。

須恵器 (第30図3)

1 飯、胴上部以上の破片。SD-002に伴う遺物ではないが、本遺跡では甑の出土が比較的少ないので図示しておく。胴部の器壁は薄く、胎土も精良、器面の調整も入念で平滑である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚する。頸部の少し下の部位に把手の形骸化した突起が付く。この突起の周囲には格子の叩き目が残る。

SD-003 (第29図)

南北方向に直線的に伸びる溝で、台地の西側、緩斜面に移る手前あたりにあって、SD-002等と直交する方向(北北西から南南東方向)をとる。延長30mまで残るが南端部はSD-017、108と重複していて、ロ



第30図 A地点・住居跡以外からの出土遺物

ーム面で溝をたどることができず、どのように終わるのか把握できていない。SD-002と交差していたかどうかも住居跡との重複のため確認されていない。溝の中間あたりでSD-004と重複するが、その北と南で多少方向を変える。ほかに溝SD-005、土坑SK-015、018、006や複数の後世の攪乱穴に切られ、保存状態はよくない。

溝の幅は60~80cm、最大1mほどと一定せず、総じてあまり厳密な施工とはいえない。深さも一定せず、20cmから50cmのあいだでばらつきがある。掘りこみは比較的急で、箱形に近い断面形を示す。北側の端に向かって徐々に浅くなっていき、最後は壁の立ち上がりを失って終わる。

覆土中からの出土遺物は皆無に近く、溝の時期も性格もよく分からない。一直線にならずかなり蛇行しており、幅も一定しない。一時に掘られたものかも疑問で、何回かに分けて掘られた可能性も高い。台地の緩斜面部にかかる位置にあったことからみて、台地平坦部の畑と斜面林とを区切る根切りの溝で、何度か繰り返し掘り直された結果、幅が広く、また屈曲の甚だしい姿になった可能性が考えられる。同じことは台地南端のSD-001、005にもいえ、両者と003が直交する向きをとることも故なしとしない。ただ、SD-002については全体に整った姿と、溝底にある程度規則的に小土坑をもつことなどから、前3者とは多少性格が変わるものではないかと考えられる。

出土遺物はなかった。

SD-004 (第29図)

SD-003の北端近くで斜めに重複する溝である。北北東から南南西の方向をとる。長さ4.5m、幅は一定しない。北端が袋状にふくれたあと一旦くびれて40cmの幅、南にいくにつれて幅広くなり最大70cmほどとなる。南端には別の土坑が重複している。深さは60~70cmで、北端の袋状部は1mの深さがある。壁の掘りこみは急で垂直に近い。出土遺物はない。

別の遺構との重複で全体に不整形だが、全体の形状や幅の狭いわりに深いこと、覆土中に土器片などが 全く含まれていなかったことなどから、縄文時代の落とし穴の可能性も考えられる。

出土遺物はなかった。

SD-007 (第29図)

台地平坦部、SI-009の北東至近の位置にある。北東から南西方向をとり、現存長約6 m、幅1.5~2 m、深さ10~20cmの不整形の溝で、出土遺物はなく、性格不明である。両端に土坑SK-002、003、019が重複している。出土遺物はなかった。

4 その他の遺構

台地の平坦部、住居跡SI-008床面の南東コーナーのあたりからほぼ南の方向に、柱穴状の小土坑が22個並んで検出された(第7図)。北半部ではジグザグに、南半部ではほぼ直線上に並び、列をはずれた東西に各2個同じような小土坑も見られる。どれも口径30cm前後の小さな穴だが、深さは総じて40~50cmほどもある。近年のゲートボール場造成のための削平などによって、この近辺にあった住居跡は壁上部をかなり失っていた。このように失われた部分があったとすると、小土坑の本来の深さは1m前後もあったとみなければならない。口径も上部ではもっと大きかったのだろう。

このように大がかりなピット群であるが、それにしては一直線上に並んでいない。施工に杜撰な面は認められるものの、何らかの目的で柵が設けられていた名残であることは間違いなさそうである。小土坑内

からの出土遺物はなく営造の時期も不明である。台地縁辺部の溝とは平行あるいは直交の関係にはならず、 一体的に営まれたものではなさそうである。

同じような大きさ、形状をもつ小土坑は、この柵列と溝SD-003とに挟まれた範囲で多数見つかっている。規則的な配列を示すものは認められず、掘建柱建物や柵列が復元できるような配列は確認されない。覆土のしまりや土色からみてもそれほど古いものはなさそうで、長年にわたる農作業に伴って繰り返し設置された、様々な仮設の建物や支柱を支えた柱穴の累積とみておけばよいと思われる。

第3節 台地北側斜面部 (B地点) の遺構と遺物

先述のとおり、B地点では時期不明の焼土堆積が1か所見いだされたが、これを含め遺構というべきものは確認されなかった。部分的なトレンチ発掘にもかかわらずかなり多量の遺物が採集されたが、ほとんどはかなり摩滅した土器細片だった。本来A地点の遺構の内外にあったものが、後世の耕作その他の掘削行為によって偶然に掘り出され、破砕を繰り返された末、未開墾のB地点に投棄されたか、自然に流れこんだものと思われる。

出土遺物量を見ると、奈良・平安時代の土師器片が最も多く、古墳時代後期がこれに次ぐ。A地点の住居跡のあり方に比例した存在状況に近いといってよく、本来の土器の存在場所に関するさきの推定が妥当なことを物語る。

実測可能なものについて以下に記述する。ほかには、鞴羽口の小破片 1 点(実測図なし)の出土が目につく程度であった。

須恵器 (第31図、図版25・26)

- 1 杯。人為的打ち欠きを除き完形。底面は同一方向のヘラケズリ。内外面ともほぼ黒色で焼成は堅緻である。口縁部から体部2/3周ほどを欠く。人為的打ち欠きと思われる。
- 2 完形の杯。1にくらべ浅いが、底面を同一方向にヘラケズリする点、内外面とも黒色の焼き色を示す 点等、1との共通性が強く感じられ、同一の生産地からもたらされた可能性が高い。色調は2の方の黒 味が強い。
- 3 杯。口径9.7cmという小型の杯。径6cmの平底の底部から、ヘラケズリによって3面に分かれる体部が立ち上がる。受け部は明瞭で、内傾する短い口縁部がつく。外面は須恵器らしい灰色、内面は紫味を帯びた灰褐色で、焼成はきわめて堅緻である。底面にはほぼ平行する4本の直線と、そのうちの1本と直交する直線が焼成前に引かれている。工具は先端の鋭いものではなく、線は浅く明瞭ではない。
- 4 杯蓋の細片で、補修孔のような径2~3㎜の孔が残る。
- 8 高台付の杯破片。口径(10.4cm)のわりに深めの体部をもち、高台も高い。高台の内側と底部が白色になっており、漆喰でも塗ったものか、あるいはこのように発色する粘土が貼られたものか。これ以外の部分は灰黒色である。
- 9 千葉産の高坏、脚柱状部の破片。筒状の柱状部の外面に、2条で1対の縦方向の沈線が3対描かれる。 透かし孔を空けるためのアタリの段階で作業が止められたような状態であり、透かし孔を実際に空ける のを省略した退化形態と思われる。



第31図 B地点の出土遺物

土師器(第31図、図版25·26)

- 5 鉢形土器の破片。体部中位がややふくれ、それより上は直線的に外方へ立ち上がる。体部下半から底部がどうなっていたか不明。平底だったとみられるが、高台が付いていた可能性も考えられないことではない。器壁は厚い。
- 6 杯、1/2周強残る。丸底の扁平な体部から、やや直線的に垂直に立ち上がる口縁部に至る。内面は体部 中位までヨコナデが及ぶ。
- 7 杯の底部付近の破片。体部外面に墨書が残る。何という文字の一部か分からない。底面に回転糸切り 痕が残る。
- 10 高坏破片。かなり大型の高坏だったと思われる。赤彩は認められない。
- 11 高坏脚部の破片。八の字状の柱状部から、水平に短く開く裾部に至る。脚部外面に赤彩。
- 12 高坏脚部破片。八の字状の脚部で、裾はあまり広がらない。柱状部内面はヘラで粘土を削り取っており、その際のヘラ先の刺突痕が柱状部内面の天井部にいくつも残る。
- 13 甕破片。球形の胴部から短い頸部が立ち上がり、途中から大きく外反する口縁部に移行する。器壁は厚い。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。橙褐色。
- 14 広口の甕、胴上半部以上の破片。最大径が肩部にあり、その部分の器肉がもっとも厚い。内面のナデは比較的丹念、外面は加熱によるのか全面黒ずむ。
- 15 甕。肩部以上1/2周。球形の胴部から強く反り返る口縁部が立ち上がり、口唇端部は上方へつまみ上げられる。口縁部下に小さく段ができる。器壁は分厚い。胎土中にスコリア粒と、それよりかなり多く白色の粒(径 $1\sim6\,\mathrm{mm}$)を含む。この粒は艶がなく、かなり柔らかい。何らかの岩石を砕いて混和材として混ぜこんだものとみられるが、石材種は不明である。
- 16 甕、胴上位以上1/2周。張りの弱い胴部から外反する口縁部が立ち、端部は薄くつまみ上げられる。器壁は全体にきわめて薄い。
- 17 甕。肩部以上ほぼ一周。比較的張りの強い胴部からなめらかなカーブを描いて口縁部となる。端部は上につまみ上げられ、外側に凹面ができる。胎土に雲母と特に長石を多量に含む。
- 19 手づくね土器、完形。扁平でぶ厚い底部から短い体部が立ち上がる。粘土の接ぎ目や指頭によるつまみ上げ痕などが未調整で残る荒々しい作りである。
- 20 口径3.6cm、高さ2.9cmというミニチュア土器、完形。平底で、ずんぐりした体部に短い口縁部がつく。 内外面ともかなり丹念に調整され、堅く焼き上がる。

瓦(第31図、図版26)

21 第6と第10トレンチから1点ずつ出土した破片が接合した。男瓦の胴部破片で、広端側の幅15cm、狭端側の幅は12~13cm、厚さは1.5cmほどで一定している。断面は正しい半円形を描く。凸面は縦方向にヘラケズリされ、叩き目の痕跡をとどめない。側縁の面取は、左側(図の)は3mmとせまく、右では4~7mmと比較的広い。凹面には全面に布目が残る。綴じ合わせ目やほつれは見られない。側縁の面取は左右とも5mm前後である。やや橙褐色味を帯びた灰色で、焼成は堅緻、胎土に砂粒の混入は少ない。

鉄製品(第31図、図版29)

- 22 曲刃鎌の破片。基部の身幅4.5cm、現存長20cmである。
- 23 刀子の身部破片。現存長 7 cm、身幅は最大で1.1 cmである。

24 平根式の五角形の鉄鏃で若干左右非対称である。身の長さ3.7cm、最大幅2.4cm、逆刺は見られない。茎の幅は8mmと比較的幅広い。

第4節 台地南東斜面部 (C地点)上段の遺構と遺物

1 C地点の概況

地下式坑や土坑が営まれたC地点上段の区画は、自然地形の段差ではなく、近年調査例が増えつつある中近世の台地整形区画であり、人為的な地形改変の結果とみるべきと思われる。上段の区画は台地斜面肩部に掘りこまれ、それより4mほど下の下段区画は自然の平場を多少整形したものとみられる。

上段区画内には地下式坑があったが、その上部が区画形成の際に削り取られているとみられるので、区 画の造成時期は、地下式坑より新しい時期、中世末期から近世初頭以降と推測できる。

掘削が開始されている面は、表土を剥ぎソフトローム層上面を露呈した段階で確認されているが、その 面の標高は29mであった。台地平坦部の最高所は調査開始時点での標高31.2mほどであったから、南側斜 面へ移行する緩傾斜がかなり下ったあたりから掘りこまれていることが分かる。

掘りこみは台地縁辺の地形に合わせたカーブをもち、全体に緩い弧状をなす。東西幅47mほどの掘りこみ斜面が検出されたが、東側は発掘区の外にもう少し続いていたと思われる(第32図)。

掘りこみの深さや傾斜は場所によって異なり、あまり厳密な施工ではない。中央部ではノリ幅1mに対し70~80cmほど下っており、比較的急傾斜である。中央から西に向かうにつれて緩傾斜となりノリ幅2mに対し60cm程度下る傾斜となる。斜面の裾のラインもややいびつな弧状となる。

裾のレベルで一旦平坦面が形成されたとみられるが、平坦といっても谷側へかなり傾斜していたようである。多数の土坑が掘りこまれているため、平坦部の面影をとどめない。この平坦面の南側は、後世の道路状堀割で削り取られているため、どのくらいの幅があったのか分からない。調査時点での最大幅は $5\,\mathrm{m}$ ほどだったが、地形からみてそれほどの幅はとれなかったと思われる。土坑の存在状況(切られ方)などからみて、せいぜいあと $1\sim2\,\mathrm{m}$ 続いたあと、ふたたび自然地形の急斜面を経て、その下の下段平坦面に続いたものと考えられる。

上段の区画の南端部では表土除去後のレベルは27.7m前後、その南に後世の堀割があり、堀割のさらに南の下段区画では、発掘区の最も北側で表土除去後のレベルが24m前後であった。上段との間に4mのレベル差があり、平面距離 $6\sim7m$ の間に4mも下っているので、上段と下段の間はかなりの急斜面だったことが分かる。この斜面部にはもともと遺構はなかったと思われる。

下段の区画の中央よりやや西に、現状では深さ20cmほどのカギの手状の溝が見られる(第36図)。本来は下段区画の北西コーナーを限る段差と、その裾にめぐらされた排水溝の名残とみられる。その南にある掘建柱建物と方向が一致しており、互いの位置関係からも、建物を営むために整形が行われたことを推測させる。カギの手状溝より西では土坑その他の遺構は少なく、逆に東では多いことも、この段差が区画の北西を限るものであることを示唆している。この段差から発掘区東端までは約27mで、発掘区外までもう少し整形が及んでいたものと思われる。途中に南北方向の溝が1条(SD-103)あり、排水などを考慮して区画内を仕切る溝が幾筋か掘られていた可能性が考えられる。

2 上段区画内の遺構と遺物

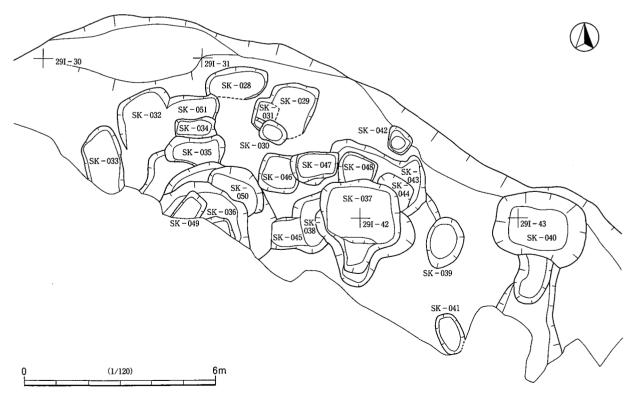
斜面部を上下に二分する道路状堀割の上部(北側)の、上段の区画内で検出された土坑について見ておきたい。この部分の土坑は台地平坦部(A地点)の調査時に検出され、遺構番号は平坦部の土坑と一連の番号(SK-028~051)が付けられている(第32~35図、図版10)。

なお、斜面下部の土坑群は別の年度に調査されており、遺構番号は混乱を避けるためSK-101から168まで100番台の番号が付けられている。

斜面上部には2基の地下式坑(SK-037、040)があった。地下式坑が営まれたあとに台地整形が行われたわけだが、ここに地下式坑が営まれたことがあるという記憶が消えないうちに、つまりここが埋葬の地だという意識下に行われたものとすれば、同じく墓を営む目的をもって整形が行われた可能性は十分考えられる。地下式坑の造営を契機に、同族墓を営むために台地整形が行われたのではなかったか。

この想定を裏付けるためには、土坑内から人骨や副葬品など、埋葬の証拠となる資料の出土が確認されなければならないが、残念ながらそのような証拠は全く得られていない。人骨の欠如は酸性土壌のために腐朽しきってしまったためであろう。地下式坑にも副葬品はなく、もともと厚葬の風がなかったのかもしれない。この地点の土坑で遺物を出土したのは2基だけで、SK-036で土師器20点余と須恵器片1のほかに磁器片が1点、046では土師器微細片4点のみである。いずれも台地平坦部の集落に起源する土器細片の覆土への流入によるもので、副葬品はもとより、土坑の時期を確定するに足る遺物も見いだされていない。

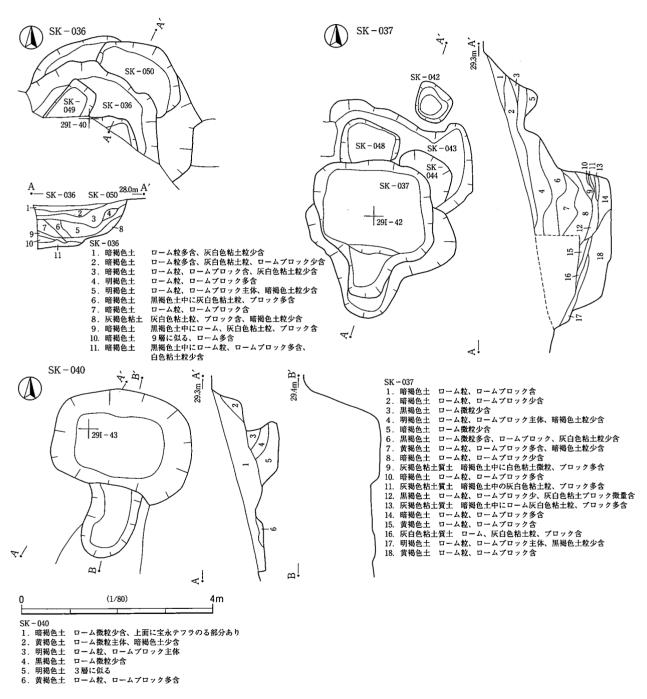
残る手がかりは土坑自体の形態、構造しかなく、そこに墓と断定できるだけの特徴が見いだせるかということになるが、底面を粘土貼りしたものや、木棺の痕跡が残るなど、墓であることを示す兆候をとどめるものはない。ただ、隅丸方形の一群と、これより長目の長円形の一群に二大別でき、それぞれ比較的規



第32図 C地点斜面上部·土坑群全体図

則的に配置されていることからみて、全く目的のちがう土坑がアトランダムに掘りこまれた結果だとは到底思われない。隅丸方形のSK-046、047、048、044の4基は同形同大で長軸をいずれも東西方向にとり、相接して東西に並び、きわどく切り合わない。046の南にある045も形、方向が共通するものである。

長円形のSK-033、032、028は南西から北東へ向かって何かを囲むように弧状に配置される。土坑群の 西北を限り、また台地整形の西北のカット面に平行している。この3基は一部遺存度の悪い部分もあるが、 形態、大きさともほぼ共通していたとみてよいと思われる。その内側(南側)には、長軸を東西方向にと



第33図 C地点斜面上部·地下式坑実測図

るSK-051、034、035の3基が、長辺を接するようにして南北に並んでいる。

このような土坑の配置状況から、ある種の計画性を見てとることは十分可能である。また、同形の土坑が相接して掘りこまれているが、土坑が埋まらずに掘られたままの状態にあったなら、このように相接して掘りこむことは不可能である。また、土坑に上屋などがあっても、密集して営むことは困難であろう。このように見てくると、土坑は掘られたあと比較的早い段階で埋め戻されたが、そこに掘りこみがあることが分かるような土饅頭が形成されていたか、何らかの簡単な目印が立てられていた可能性が高いのではないかと考えられる。土坑の密集状況は、これらの土坑の多くが墓坑であることを物語る証拠と考える。

なお、人為的に埋め戻されているかどうかは土層断面を観察すれば容易に判定できるが、調査時点での 記録を欠き、一部作成された土層断面図も上記の土坑を通るものがなく、残念ながら埋没の経緯は確認で きない。

(1) 地下式坑

地表から垂直に竪坑を掘り、そこから横に穴を掘って部屋を造りだした遺構を地下式坑と呼び、一般には中世の墓の一種と考えられている。竪穴の部分を出入口部、横穴状に掘りこまれた天井をもつ広い坑を主室と呼び、全体で一つの遺構(地下式坑)となる。出入口部と主室の各中心を通る想定線を主軸として記述する。明確な地下式坑はSK-037と040の2基しかないが、037の西のSK-036も地下式坑の可能性がある。

SK-037 (第33図、図版11)

南側を出入口部とし、北に横長の主室を置く。主軸はほぼ真北を向く。主室は床面での幅2m、奥行き 1.6m、ほぼ垂直に立ち上がる奥壁は1mの高さまで遺存する。天井部は全く残っていない。

出入口部は検出面で幅80cm、奥行1m、床面では50cmと60cmの規模になる。床面は主室に向かって緩やかに傾斜し、連接部では主室とほぼ同じレベルとなり、主室とのあいだに明確な段差はない。主室、出入口部ともローム層を掘り抜き、床面は灰白色粘土層に達している。

ほぼ主軸に沿って作成された土層断面図によれば、床面近くにはハードロームのブロックを主体とする 土層が堆積していることから、主室、出入口部とも流入土によって埋まる前に、主室の天井が落下したも のと推測される。

土層図には、その後、主室部分で天井崩落土を切りこんで何らかの土坑が営まれていた状況が現れている。平面的には土坑の存在は確認されていないが、奥壁を損傷していないので、天井部崩落によって生じた主室部の落ちこみを利用したものとみられ、奥壁はほぼそのまま活かし、床面ももとの面が活かされている。平面プランも目的も不明ながら、天井崩落後の主室部が埋まりきらないうちに掘りこまれていることから、その時期はある程度おさえることができる。おそらく周囲に密集する土坑と同じ目的で掘りこまれたのであろう。この土坑内の覆土はローム土混じりの黒褐色土が主体で、自然に堆積した状況がうかがわれる。

覆土中からフラスコ形長頸瓶の胴部破片のほか土師器と須恵器の細片各3点ほど(いずれも奈良・平安期)が出土しているが、いずれも埋没過程の混入品とみられる。副葬品などこの遺構に直接関わる遺物は 検出されなかった。

SK-040 (第33図、図版11)

SK-037の東約3m(壁間の距離)という至近の位置にあり、主軸方位を同じくする。配置に計画性が

あることは間違いなく、同族墓の可能性が高い。主軸はほぼ真北を向くが、出入口部の向きは真北より若 干東に振れる。

主室はSK-037と同じく幅広で、床面で幅1.85m、奥行1.3m、検出面ではこれより大きく(幅3m、奥行2.35m)なるが、天井の崩壊に伴って壁が崩れ落ちた結果とみられ、主室の上部が当初これだけの大きさをもっていたのではなかろう。壁の高さは北壁中央で2m、東西壁は南にいくにつれ低くなり、南壁は60cmほどの高さしかない。これは、その後の台地整形時の削平によるものであろう。床面は灰白色粘土層に掘りこまれている。床面近くの覆土はローム微細粒を含む褐色土が主体で、壁や天井から剥がれ落ちたローム土と出入口部からの流入土が混じり合ったものとみられ、ある程度の期間天井が崩れ落ちないでいたことをうかがわせる。その後、天井から壁上部が落ちこんだ可能性が考えられるが、その痕跡は土層図には残されていない。

出入口部は床面での長さ1.3m、幅は50cm前後である。主室と出入口部のあいだは段差となり、その高さは20cmほどである。出入口部を出発点とするように、その手前に浅い溝が続く。東壁の高さは20~30cm、西壁は数cmの高さしかないが、出入口部の南半分と重なり、幅を広げながらさらに南に続く。あたかも出入口部に至る墓道のように見えるが、道と認定できるほどの硬化面は残っていない。

覆土中からの遺物は皆無に近く、土師器の微細破片3点がすべてであった。

SK-036(第33図)

主室部(?)の一部しか残っていなかったため明確ではないが、かなり平面規模が大きく、深さも1m近くあり、灰白色粘土層まで切りこんでいることなどから、地下式坑の可能性が考えられている。覆土はロームブロックを多く含み、天井の落下に起因する土層が主体をなしていることが分かる。

(2) 土坑 (第34・35図)

無秩序に密集しているように見える土坑であるが、上述のように一定の計画的配置がうかがわれる。

隅丸方形のSK-046、047、048、044の4基(第35図)は同形同大で、046の南にある045も形、方向が共通するので同じ一群とみてよいかもしれない。いずれも長軸を東西方向にとり、隣接して東西に並んでおり、相接していながら、お互いに切り合わない。また、これらはその主軸を、地下式坑SK-037の主室の東西軸と同じ方向に向けている。これらの共通項は偶然の結果とは考えにくい。

SK-046は、長軸(東西)長が上端で1.2m、下端で1m、短軸長が1.15mと0.95mと隅丸正方形に近い。深さは現状で35cmほどである。SK-047は上端で1.3m×0.8mと細長く、隅も角張っている。深さは60cmである。SK-048は1.2m×1.1mで、046に近い平面形をもつ。深さは約30cmで、底面のレベルは046に等しい。SK-045は、ほかの土坑と重複し平面規模がはっきりしないが、長軸1m強、短軸は1m、深さは30cmほどである。047以外の3基は平面の規模、プラン、深さとも共通性が高い。深さは調査時点で30cmほどしかなかったが、本来はもっと深かったと思われる。これらの土坑からの出土遺物は、SK-046から出土した奈良・平安時代の土師器の微細片6点がすべてであった。偶然の混入品とみられ、土坑の時期や性格をさぐる手がかりにはならない。

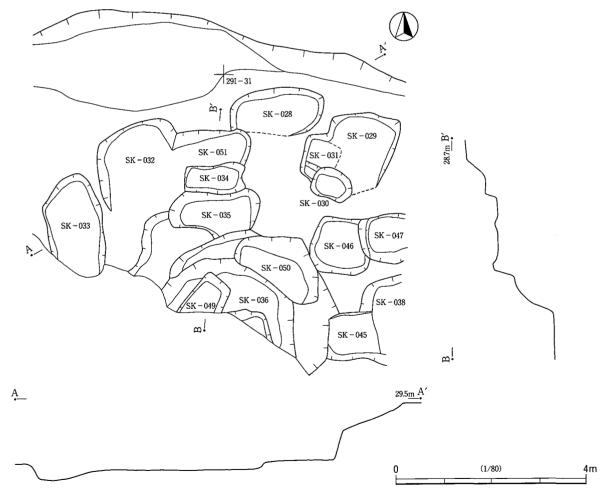
地下式坑SK-036の北側には長円形の土坑SK-033、032、028の3基が、南西から北東へ弧状に配置される。SK-033は長軸を南北にとり、南端が欠けるがそれでも長軸の長さが2.1mあり、最大幅は1.2m、深さは20cmほどである。032は東北-南西方向をとり、南辺の高さを失い、原形が損なわれているが、長軸長は2m前後あったと思われる。北壁の高さは60cmある。028は長軸を東西にとり、長さ2m、最大幅は1m、

深さは北壁で50cmある。SK-028のみ土層断面図がとられているが、人為的に埋め戻されたものか確証は得られない。これらの土坑からも出土遺物はなかった。

長円形のグループの南に、長軸を東西方向にとるSK-051、034、035の3基が、長辺を接するようにして南北に並ぶ。SK-051は遺存度が悪いが、長円形土坑のグループに入れてよいかもしれない。東壁と北壁最下部しか残らないが、長軸を東西にとり長軸長は1.6m以上、最大幅は1m内外と思われる。壁の高さを失っているが、床面のレベルは長円形の032や028とほぼ同じで、本来はこれらと同じ深さをもつ土坑だったと思われる。035は長軸1.8mほど、短軸1m未満、深さは20~30cmである。051と035にはさまれて034がある。長軸1.2m、短軸0.6mと小型で、深さは40cm前後である。以上3基は長軸を東西にとり、長辺を相接して切り合わない点が注意される。出土遺物はなかった。

ほかには、形も大きさも定まらない土坑がいくつか散在するものの、出土遺物もなく、特筆すべきものはない。

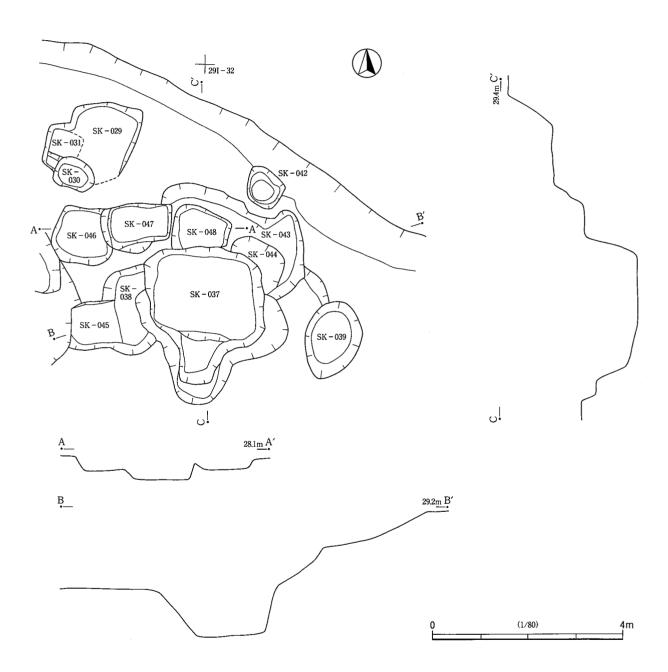
以上の土坑からの出土遺物はSK-046の土師器細片のみで、遺物の面から土坑の時期や性格をさぐることはできない。地下式坑を取り巻くように配置されていること、お互いに切り合わないこと、平面のプランや規模に共通性をもつものがあることなどは注意すべき事項といえる。長円形のグループは長さ2m前後、幅1m前後と、人ひとりを伸展葬するのに適した大きさをもっている。地下式坑が通説のとおり中世



第34図 С地点斜面上部・西半部の土坑分布状況図

の墓であるなら、これを取り囲む、墓坑にふさわしいプランと規模をもつ土坑は、地下式坑の設置を契機 として営まれた近親者の墓である可能性は十分考えられるところといえよう。

上に記述した3つのグループの土坑については、確証はないものの、墓坑の可能性が高いものと考えておきたい。その配置などから、地下式坑に近い時期に営まれたとみられるので、中世末期ころの遺構とみておくのが無難かと思われる。



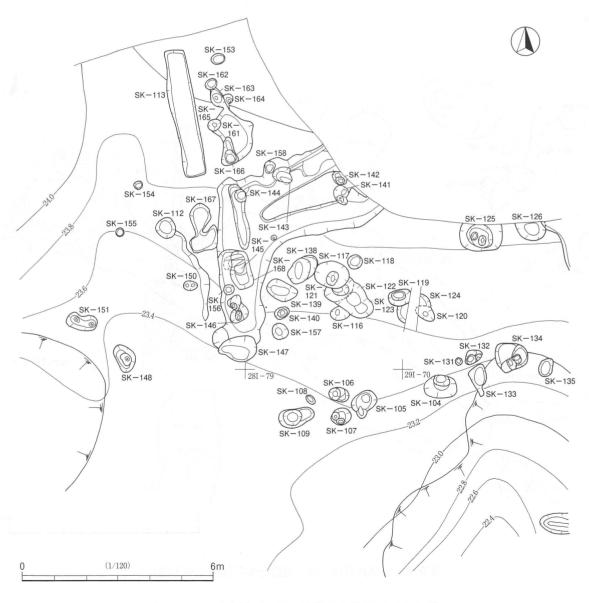
第35図 С地点斜面上部・東半部の土坑分布状況図

第5節 С地点下段区画内の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

SI-101 (第37図、図版13)

発掘区の南西端、斜面のかなり低い部位で検出された。標高24mほどのレベルなので、台地上の平坦面より8m低く、台地の西に広がる水田面との比高は約7mである。台地斜面下部に特有の栗色土層中に掘りこまれ、覆土と地山との区別が難しく、また溝(SD-102)や攪乱穴も重複していたため、土器がまとまって出土してはじめてその存在に気がついた状況であり、竪穴の正確なプランはつかめていない。カマドをもち、その位置から北壁中央部はおさえられるが、北東コーナーから東壁、南東コーナーにかけてはSD-102によって削り取られていた。南壁、西壁も失われていた。床面では柱穴も貯蔵穴も見いだされなかった。



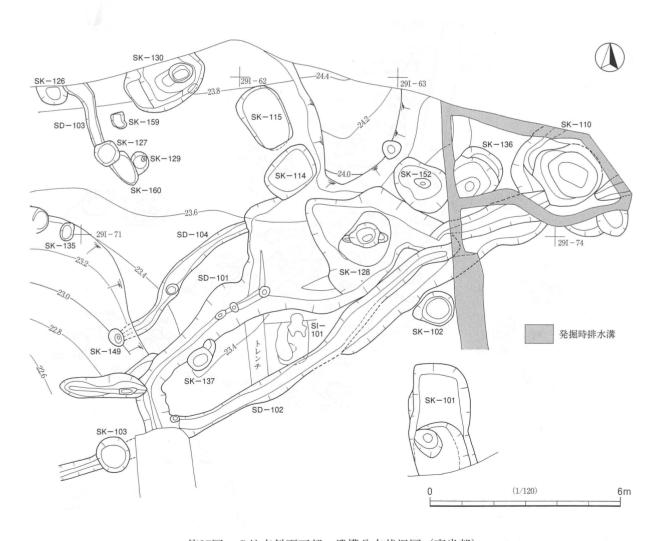
第36図 C地点斜面下部·遺構分布状況図(西半部)

カマドは、両袖がほとんど原形をとどめていなかった。山砂は南北1.4m、東西1.1mの範囲に広がり、左袖部分がわずかに高まっていた。壁に近い部位に焼土が多く見られ、中から土製支脚が出土した。壁面には幅40cm、奥行20cmの、不整な三角形状の煙道が掘りこまれていた。

北壁部分にのみローム質土が見られ、この部分だけローム土を盛って壁面を補強していた様子がうかがわれる。この部分の壁の立ち上がりは20cmほど遺存していた。

なお、下段区画内では鉄滓や羽口破片がかなり多く出土しているが、その分布状況を図化すると第40図のようになる。一見して明らかなように本住居跡周辺に濃密な分布を示し、ここが発生源である可能性の高いことを示している。他遺構との重複などのため、残念ながら住居内で鍛冶炉や関連遺物は確認されていないが、ここが鍛冶工房であったこと、それ故に台地上の集落とは異なる立地を選んだことが理解される。

完形に近い遺存度の土師器が数点出土しており、本住居の時期を示している。須恵器はいずれも小破片で、後世の混入品である。土師器の年代観からみて住居の時期は古墳時代後期末から終末期ころと推測される。



第37図 C地点斜面下部·遺構分布状況図(東半部)

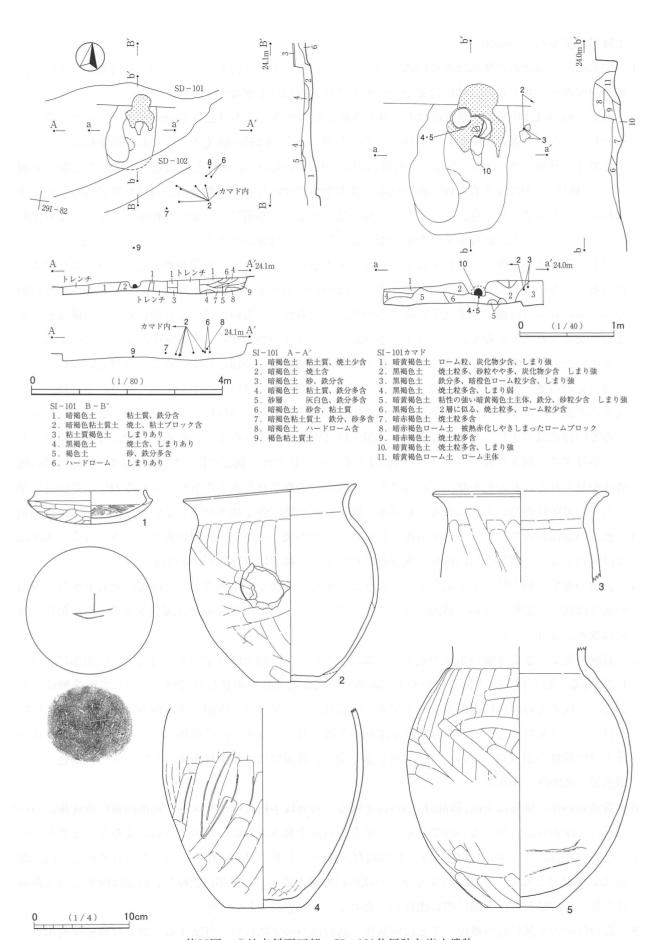
土師器 (第38図、図版26)

1 完形の杯。扁球形の体部は緩く内湾しつつ立ち上がり、先端は稜をなし、そのやや内側から内傾する 短い口縁部が立ち上がる。外面は細かいヘラケズリ、内面は丁寧なナデ。

底部外面のほぼ中央に、焼成前に引かれた線描が見られる。1本は長さ4.3cmの直線で、その一端からやや短い弓なりの弧線が引かれ、全体では刀の刃先、あるいは船の舳先のような形が描かれる(この2本を以下「横線」という)。さらに、直線状の線のほぼ中央から、弧線とは反対の方向に少し細い直線(以下「縦線」)がほぼ垂直方向に描かれる。3本全体では帆柱の立つ船を横から見た姿に似る。逆転すれば開いた傘のようにも見える。果たして何を描いたものか不明で、具象的な線描ではなく単なる記号かもしれない。ただ、帆柱を立てた船の姿に最も近いことは確かである。

なお、縦線は若干細く、平行する短い直線も何本か見られるので、底部調整の際のヘラケズリによる 擦過痕ではないかとの疑いももたれる。ただ、ほかの擦過痕が、ヘラケズリによって生じたことを物語 る短く勢いのある直線で、またその後2本の横線で切られているのに対し、縦線はちょうど横線から始 まって交差することがなく、ヘラで手書きされたことをうかがわせるように途中わずかに蛇行する。 何を描いたのか特定できないものの、縦横の3本の沈線で何かが描かれていることは間違いない。

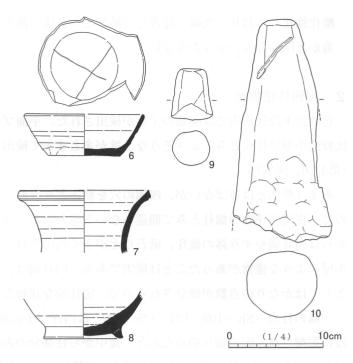
- 2 ほぼ完形の甕。器壁は比較的薄手である。最大径と器高がほぼ同じのややずんぐりした立面観をもち、大きめの底部とあまり高くない胴部からなるので安定感がある。全体にいびつな焼き上がりで、正立させると口縁部は水平にならずかなり傾く。最大径は胴部中位よりやや上にある。口縁部は緩い屈曲をもって外反する。胴部外面ヘラケズリ、内面は丁寧なナデ仕上げ。胴部中位に4.5×3.5cmほどの長円形の破砕孔が見られる。孔の形が整っていること、破砕面に調整されたような痕が見られるので、意図的に空けられた可能性が高いと思われる。底部から胴下位にかけて強く加熱を受けている。器高20cm、橙褐色。
- 3 甕、口頸部の破片でカマド内から出土している。胴の張りの少ない長胴の甕だったみられる。頸部には段も稜もなく、胴部から口縁部へ緩やかに移行する。推定口径18.5cm、橙褐色。
- 4 長胴の甕で、胴中位以下を完存する。大きめの平底から緩やかに内湾しつつ胴部が立ち上がる。胴部 の張りは弱い。器壁は厚い。外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面とも入念に調整されている。褐色、外面は加熱により黒ずむ。
- 5 長胴の甕で、2より胴の張りが強く、胴部は丸みをもつ。胴上位以下完存、肩部から口頸部にかけて 1/2周残る。最大径は胴中位よりやや上にある。肩部から頸部への移行部で軽くくびれて段を形成した あと、外反の度の弱い口縁部が立ち上がる。胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。内面の底部から胴下位に かけて、ヘラ先によるとみられる乱雑な沈線が多数残る。ヘラナデの際偶然についたものとみられるが、 仕上げの粗雑さが目立つといえる。加熱を強く受け、外面にはカマド材が癒着している。橙褐色。 須恵器 (第39図、図版26)
- 6 新治産の杯。底部は全面、体部は1/5周ほど残る。外面は手持ちヘラケズリ。底部内面に焼成後につけられた×印が残る。細く浅い線であるが、須恵器表面を刻みこんでいるので金属によるものと思われる。
- 7 壺の口頸部破片。推定口径13.4cm、頸部現存部分のすぐ下で胴部に移行するとみられるので、口頸部高は6.5cmほどとなる。胴部からすぐラッパ状の口頸部が続き、口縁部は肥厚し、端部は内側につまみあげられる。口縁部外面下端に細い沈線が一条めぐる。須恵器らしい灰色。
- 8 高台付壺の底部付近の破片。7とは別個体。高台はハの字状に短く外反する。ロクロ回転を利用して



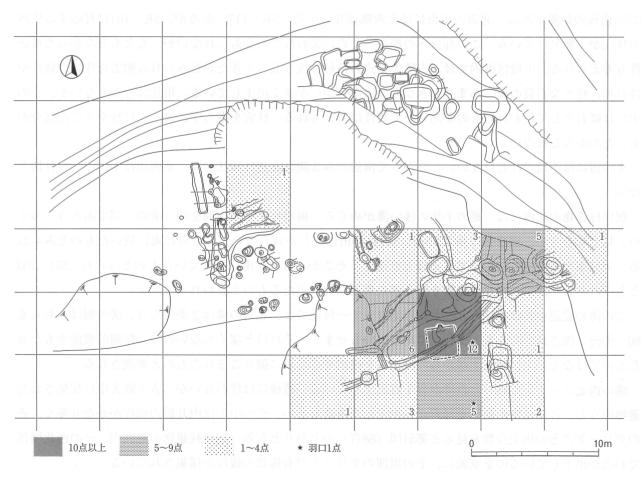
第38図 C地点斜面下部・SI-101住居跡と出土遺物

削り出されたものとみられる。底部から 胴部下位にかけての器肉はぶ厚い。胴部 内外面とも回転を利用したナデ。灰白色。 土製支脚(第39図、図版27)

- 9 土製支脚上端部の破片。現存長5.4cm、 最大径3.9cm、上端径2.7cm前後と細い。外 面は部分的に、縦方向のナデにより面取 りされている。
- 10 現存長23.6cm、底部を欠くが、全長はこれよりそれほど大きくはならないと思われる。上端の径は3.5cmと小さく、そこから大きく径を増していって現存最大径は10.5cmである。上端に近い側面に、付着していた線状のものが脱落した痕のような、断面半円形状の溝が残る。溝部は



第39図 C地点斜面下部・SI-101の出土遺物



第40図 C地点斜面下部・椀形滓・スラグ・羽口出土状況図 (グリッド右下隅の数字は鉄滓の出土数)

酸化鉄化しており、鉄線が付着して錆びたあと抜け落ちたのかとみられるような状態を示す。偶然の付着か意図的なものか分からない。

2 掘建柱建物跡

C地点下段区画内では68基の土坑が検出された。平面プランも大きさも様々だが、遺構群の西北部では、 比較的小型で柱穴とみてよさそうな土坑がまとまって検出され、掘建柱建物1棟の存在が想定されている (第41図、図版15)。

あまり整然とは並ばないが、四隅の穴を結ぶと長方形となり、中間にも柱筋の通るいくつかの穴が並ぶので、掘建柱建物の側柱とみて間違いないと思われる。各土坑とも柱痕は確認されていないが、この付近からは内耳鍋やすり鉢の破片、砥石などが多く検出されており、生活臭が顕著なこともあり、粗末な掘建小屋のような建物があったことは確実である。内耳鍋は、完形近くまで復元できたものはないが、個体数としてはかなりの点数が確認されるので、定住的な建物だったものと思われる。

四隅の柱穴(SK-109、134、125、139)は口径が1m前後と大きく、深さも40~80cmある。いずれも2段に掘削され、広く掘り始めたあと、途中から柱部分のみ深く掘り下げている。四隅の柱穴を結ぶとほぼ長方形となるが、南の辺の方が若干長く、四隅は正しい直角とはならない。柱間距離は南辺7.2m、北辺6.8m、東辺3.9m、西辺4.1mである。

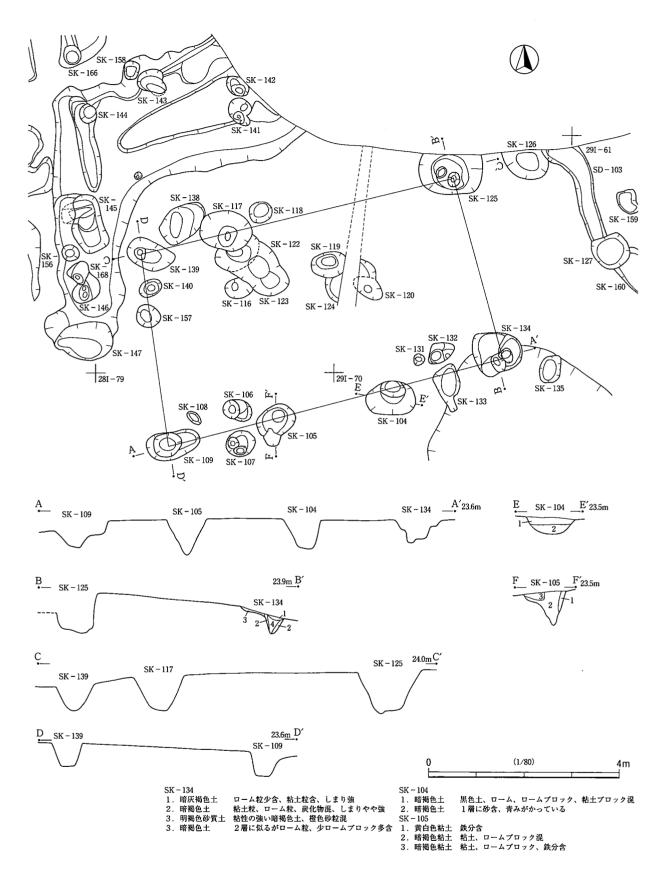
南辺には中間に2つの柱穴(SK-105、104)があって、3つの柱間距離は不ぞろいながら、おおむね 2.5m前後の距離がある。北辺の中央には北西隅寄りに1坑(SK-117)あるが、SK-104に対応する位置 の柱穴が1個欠けている。この部分への攪乱のために失われたのかもしれないが、もともとなかった可能 性も考えられる。下段区画内では、古墳の箱式石棺材を抜き取ってきたかとみられる絹雲母片岩の破片や、砂岩塊、様々な石質の礫(あまり大きなものはないが)が多く出土している。用途は分からないが、その 中には礎石として使われたものがあった可能性は考えられる。柱穴を掘らず、礎石上に柱を立てた部分が あったのかもしれない。

東西辺には中間の柱穴はない。したがって南辺のみ3間、北辺は現状2間、東西辺は1間という柱間となる。

掘建柱建物の北西には、鍵の手状の浅い溝がめぐる。掘建柱建物の周囲を囲う溝の一部であろう。多くの土坑と切り合い、溝自体は南北5.5m、東西は5mほどしか残らないが、さらに東に続いたものとみられる。未発掘部分を東に向かって5mほど直進し、そこから直角に南に折れていたものとみられ、SD-103と名づけられた溝が、掘建柱建物を囲う溝の東辺部分に当たるものと思われる。

この溝の北辺全長は約10mとなる。西北コーナー付近では、北辺の溝は2条になり、溝の幅はどちらも80~90cm、深さはどちらも20cm程度である。幅もせまく、それほど深くもないので、防御的機能をもたせたものではなく、主に斜面上部からの浸出水を排出するために掘りこまれたものと推測される。

溝の西北コーナーで砥石と鉄滓が各1点出土している。遺構には伴わないが、表土除去中に採集された 遺物のうち、この建物の範囲や付近から出土した遺物も多い。その中では内耳鍋の破片がかなり多く、そ のグリッドごとの出土点数を見ると第51図(88頁)のとおりとなる。掘建柱建物の範囲内、その西北隅部 で45点が出土しているのを筆頭に、その周囲のグリッドでも複数の破片が採集されている。



第41図 C地点斜面下部·掘建柱建物跡実測図

すり鉢及び鉢形土器の破片も、掘建柱建物の付近、特にその西北部に集中していた。このような日常生活に不可欠な遺物が、掘建柱建物付近に多量に分布していることは、この建物が臨時の作業小屋のようなものではなく、定住的な家屋であったことを物語る。また、建物外の西北の一角が、廃棄物の投棄場所になっていたことも間違いないところと思われる。

下段区画では砥石や鉄滓も多く出土したが、椀形滓を含む鉄滓の分布状況(第40図)を見ると、SI-101 住居跡内及びその所在グリッドと周囲のグリッド、SD-102内など、発掘区南東の一画に集中する傾向が見られる。したがって、既述のとおり鍛冶関係の仕事は掘建柱建物ではなく、SI-101の住人によって行われた可能性が高いと思われる。

掘建柱建物の範囲や区画溝に重複して多くの土坑が見られる。大小様々で形もそろわないが、この建物に付随する施設の可能性が高いと思われる。貯蔵や廃棄物・排泄物の処理用の穴、また敷地より低い部分で検出された土坑の中には井戸の可能性のあるものも含まれていると思われる。

建物の西北部には柱穴様の小さ目の土坑が多く見られる。柱筋が通るような整然とした並びは認められないが、簡単な小屋掛け程度のものが建てられていた可能性がある。この範囲で砥石が5点出土しており、何らかの作業場として使われていた可能性も考えられる。

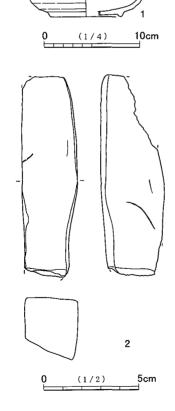
掘建柱建物の柱穴の一つ(SK-117)から内耳土器破片が出土している(第49図6)。 1 対 2 の 3 内耳部分の破片である。高さ8.5cm、復元口径33cm、板状の耳は中央で幅1.5cm内外、厚さ8~9 mmである。耳の内側へのふくらみは小さく、逆に耳の付く部分の器壁を外側にふくらませ、紐を通す空間を確保している。

内面は平滑で、外面は耳の付く部分以外も凹凸が甚だしい。胎土に金雲母を混入する。円盤状の底部の側面に体部を貼り付けて成形していることが、割れ口から観察される。外面に煤の付着が著しい。16世紀後半の所産と考えられる。

また、掘建柱建物の西北を限るカギの手状の落ちこみ内でも遺物が出土している(第42図)。 1 は高台付き皿で1/2周が遺存する。やや黄色みを帯びた灰白色で、表面には不規則な網目状の細かい皺が見られる。釉薬はかけられていないとみられるが、土中などで風化した可能性もある。胎土には砂粒などを含まずきわめて精良である。底面は回転ヘラケズリ、重ね焼きの際のトチンなのか、胎土と同質の小粘土塊が付着している。体部外面はヘラケズリによって上下3段の面が作出されている。2は砥石で長さ10.5cm、最大幅3.2cmの不整な直方体、長側面4面のうち3面がよく研磨され平滑である。鉄錆の付着が目立つ。

3 水場遺構

下段区画の東端にはSK-128、152、136、110とかなり大型の土坑が東西に並んでいた(第37図)。最東端の110では湧水がかなりあり、このため土坑内に木材が遺存していた(第43・44図、図版13・14)。152、136でも杭状の木の断片が残っていた。このことから152、136、110の3基には共通の性格があったものと推察される。

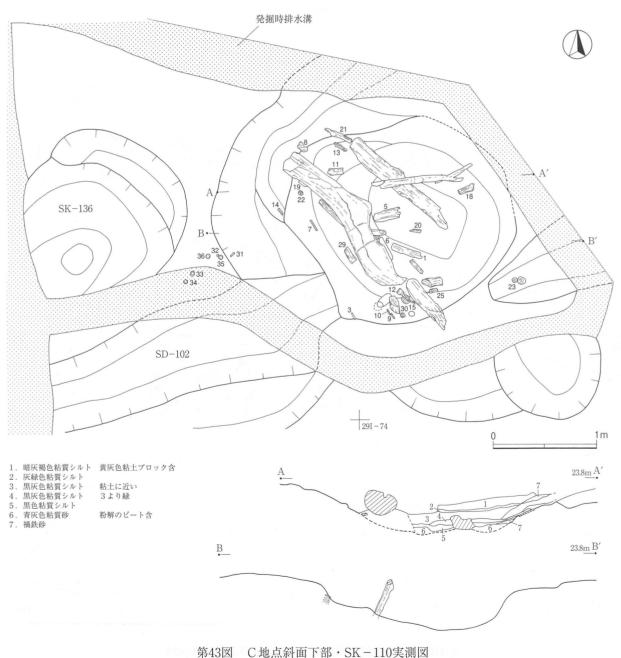


第42図 掘立柱建物北西区画 溝内出土遺物

結論からいうと、この3基は水汲み場なのであろう。それほど深くないので、少し掘り窪めるだけで水 が涌き、坑内が水で満たされたであろうことは、発掘時の湧水の量から推測される。土坑の縁に横木をわ たし、これを木杭で固定して、湧水を堰き止めて水位を上げるとともに、溜まり水を汲むときの足場にも したものと思われる。

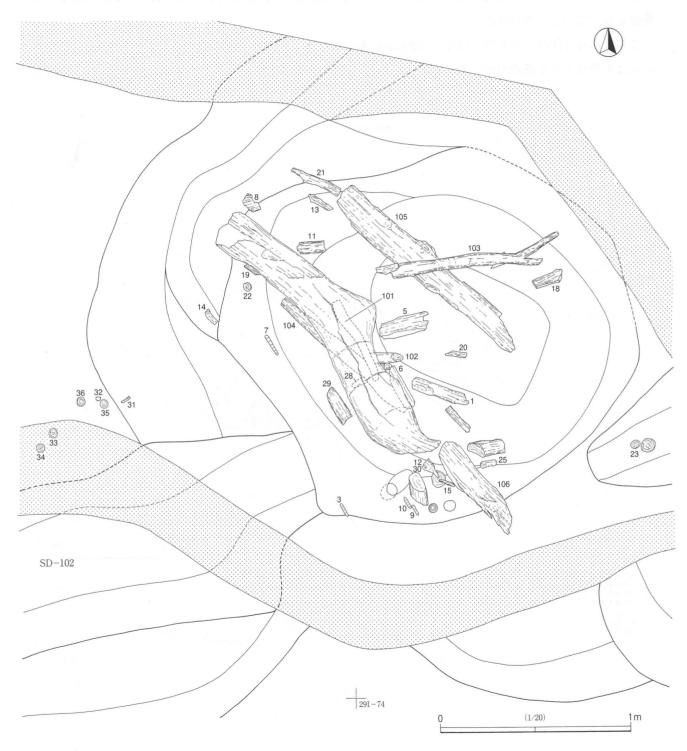
湧水量が多く、オーバーフローした水を流すため、溝(SD-102)が掘られている。おそらく下の水田 に導かれ、灌漑水として利用されたことであろう。溝に直交して置かれた木材は、溝への流出を調整する 機能ももっていたと思われる。

3基は同時に併存したものではなく、湧水が枯渇するなどして何度か掘り直されたものと思われる。136 からは木製品1点と獣骨の細片が1点出土しただけで、使用期間がごく短かった可能性が考えられるが、利



用の時期については不明である。東端の110は最も規模が大きく、木材も多量に遺存していたので、最も長く、また最も近い時期まで利用されていたことが分かる。土坑は横一列に並び、110が最も新しく掘られた可能性が高いので、西から東に順次掘りなおされたものと思われる。

SK-152からは土器片51点(土師器48、須恵器3。ほかに砂岩塊1、礫2、椀形滓1があった)が出土しており、すべて奈良・平安時代の土器の特徴をもつものであった。このことから利用期間が奈良・平安



第44図 C地点斜面下部·SK-110木製品出土状況図

時代までさかのぼる可能性も高いと思われ、台地上の同時代集落の住人によって利用されていたものと推測される。利用開始期がSI-101住居の時期までさかのぼる可能性も十分あり得る。

SK-110は規模が最も大きく、足場材が良好な状態で遺存していたこと、出土遺物に奈良・平安時代の土師器、須恵器片合わせて約100点のほか中近世の磁器破片2点が含まれていたことなどから、古代から中近世にいたるまで長期にわたって利用されていたことは確実である。下段区画の掘建柱建物の住人も利用していたことであろう。

SK-110からは多数の木材が出土している。3種に分かれ、1は足場の横材であり、2はこれを固定するための杭又は矢板、3は井戸の中に落としたか捨てられたもので、ほとんどは小さな木片である。

横材は土坑の谷側(西側)の辺に沿って設置され、溝SD-102に直交して置かれている。このことから、水を汲む際の足場としてだけではなく、湧水をせき止め、水位を調節する機能をもっていたことが分かる。横材は上下 2 段が遺存しており、上の段は、直径25~30cmの雑木の幹を長さ1.6mに切ったもの 1 材からなる。下の段はこれよりかなり小さい木を何本か横に置いたもので、長さ58cm、直径12cmほどの自然木と、長さ94cm、最大幅 9 cmの角材を縦に半裁したもの(104)の 2 本が主なものである。

これらの横材を固定するため、土坑の中心側(東側)に杭が1本、坑底に打ち込まれた状態で残っていた。土坑の縁側(西側)には矢板とみられる板材が4枚(3・7・9・10)打ちこまれ、杭と矢板にはさまれて横材が固定されていたことが分かる。ほかに、杭の痕とみられる穴も2個確認されている。杭や矢板の位置は整然としたものではないが、全体として横木を両側から挟むように打ちこまれていたことは間違いない。

上記の横材に平行して、その東50cmに長さ114cm、直径10~15cmの自然木(105)が横たわっていたが、これは杭などで固定されていないので、3段目の横材が転落したものと考えられる。

横材の隙間やすぐ東側で多数の木片が出土している。何らかの事情で水中にあった木片が、溝への水流の影響で横材の方へ流れ寄せられて引っかかり、そのまま土砂に埋没したものと思われる。

また、これらの土坑西縁の杭・矢板列の南端の矢板(9、10)の東1.3mの位置で、杭1本(23)と、これに接して杭の痕跡が確認されている。土坑の南側の縁にも横木がわたされていた可能性を示唆する資料である。この土坑は西と南が下り斜面となっており、どちらにも横木がわたされていたものと思われる。

水場遺構(SK-110)から出土した主な遺物は次のとおりである。

須恵器(第47図、図版27)

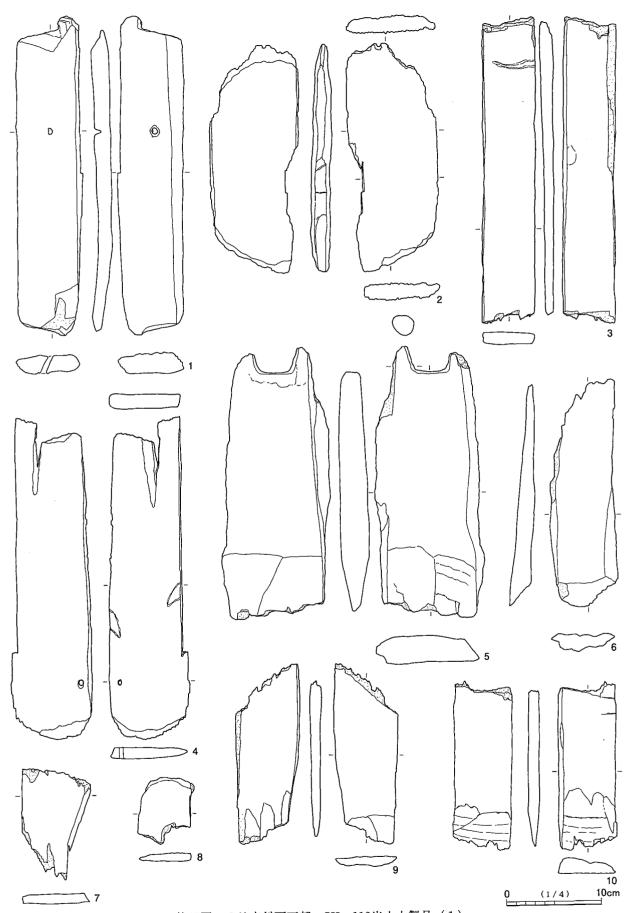
- 1 杯、1/6周ほどの破片。器高は低い。口縁部のヨコナデにより体部との境に稜ができている。内外面と もかなり黒みを帯びる。
- 2 杯、1/6周ほどの破片。内外面とも黒色処理される。底部は一方向のヘラケズリ。
- 4 甑、口頸部1/5周。口縁部は複合口縁状に仕上げられる。胴部は張りがなく、外面に縦方向の叩き目が 残る。頸部内面の屈曲部が横一線でわずかに磨り減っており、土器を重ね入れたことで付いたものなら、 本器は甑ではなく甕の可能性が出てくる。あるいは蓋を受けた痕なのであろうか。

土師器(第47図、図版27)

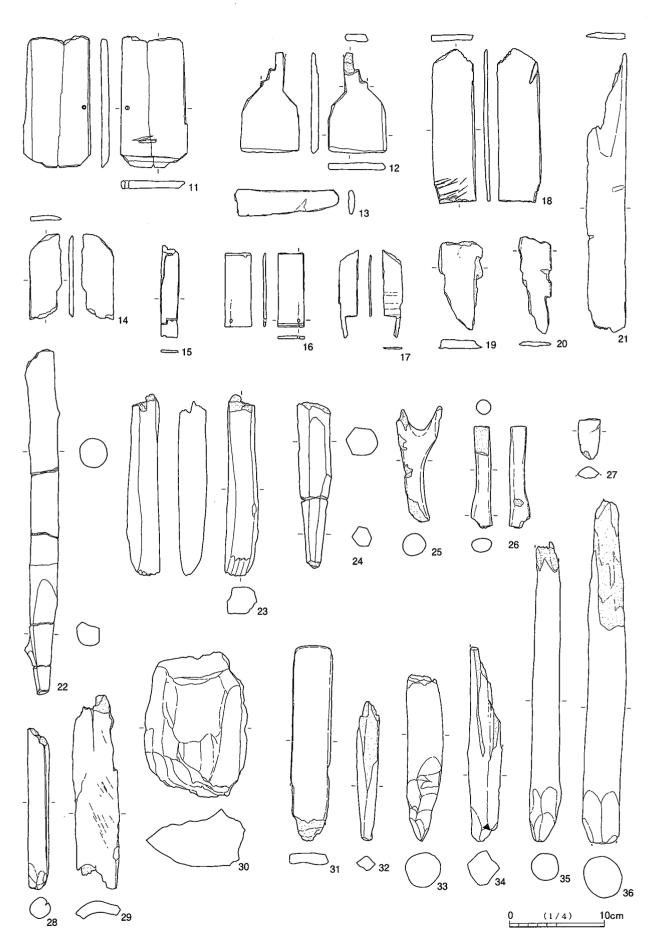
3 3/4周が遺存。口径8.9cm、高さ2.3cmのカワラケ。底部は回転糸切り、無調整。胎土に細かい長石粒等を多量に含む。焼成は堅緻。底部から体部下半にかけて墨が付着している。16世紀代の所産と考えられる。

木製品 (第45・46図、図版33・34)

- 1 最大長33.5cm、幅6.8cm、厚さ最大18mmの板材で、径5~6mmの穴(釘穴?)が貫通しているので何らかの転用材の可能性があるが、最終的には矢板として利用されたものとみられる。一方の木口に枘状の突起が見られるが、これは意図的に作り出されたものではなく、鉈のような工具で断ち割ろうとした際に偶然に生じたものと考えられる。
- 2 現存長24cm、最大幅9cm、厚さ最大18mmの不整形の板材で、本来は丸い蓋のような木製品だったのではないかと考えられる。表面は一方は平坦だが、もう一面は中央に向かって軽く盛り上がり、全体として円盤状を呈していたようである。現在直線状に割れている辺の中央近く(円盤の中央部近くになる)に、四角い枘穴が空けられている。鍋蓋の可能性を考えてよいかもしれない。
- 3 溝SD-102への流出部に打ちこまれていた針葉樹の板材である。厚さ8~14mm、厚さの薄い側を下に して打ちこまれたとみられるが、先端部は残っておらず、打ちこみやすいように先端を刃先のように仕 上げてあったものかどうか分からない。長さ31cmほど(部分的に最大長35.5cmとなる)、最大幅は10.5cm である。
- 4 現存長33.5cm、最大幅8.5cm、厚さ12~15mmの細長い板材である。木口の一方が両面から薄く仕上げられているので矢板として使われていたとみられ、先端の腐朽によって浮き上がり、横木に引っかかったものと思われる。径5mmほどの穴が空いているので転用材の可能性が高い。
- 5 最大厚さ30mmというぶ厚い板材である。最大長28.5cm、幅11cmで、木口の一端が両刃状に両面から削られており、矢板として加工されていることが分かる。土坑の底部に接するように横たわった状態で出土しているので、先端の腐朽などのため倒れたものと思われる。木口の他端にはU字形の刳りこみが認められる。矢板としては不必要な加工であり、ほかの矢板材にくらべかなりぶ厚いことも考えあわせると、何らかの建築部材が転用された可能性が高いと思われる。
- 6 横木の集積の東側にあったもので、矢板の上部が折れたものとみられる。現存長24cm、幅7cm、厚さ最大20mmである。
- 7 杭22の南30cmにあった矢板で、現存最大幅7cm、最大長11.5cmとわずかな部分しか残っていなかった。 厚さ1cmほどの板材で、木端の一方の面が鋭利な刃物で斜めに切られている。
- 8 現存長7cm、最大幅6cm、厚さ最大で9mm、片側の木端に向けて薄くなる。本来の用途は不明だが、最終的には矢板として用いられたものと思われる。
- 9 横木の西側の矢板のうち南端に位置していた。現存長19cm、最大幅6.7cm、最大厚さは12mm、木端の一面(図の右側)は鋭利な刃物で削られ平滑である。また木口の一方は裏表両面から削られ、先端が両刃 状に仕上げられている。他端は折れ損じている。
- 10 矢板列の南端近く、9のすぐ北側に打ちこまれていたものである。厚さ16~10mm、幅6cmの板材で、一方の木口を表、裏両面から切削し尖らせている。現存長は17cmである。
- 11 厚さ8mm前後、幅6.3~7cm、最大長13.8cmの板材。一端は折れ、他端は片面から削られ、片刃状となり、木端の両側からも斜めに切られている。一方の木端近くに径4mmの穴が空いており、何らかの転用 材とみられるが、最終的には矢板として利用されたものと思われる。
- 12 厚さ7~8mmの板材を羽子板状に加工した木片である。最大幅8.1cm、長さ10.4cm、柄状部は途中で折れており、現存長は左右で異なるが長い側で4cm、幅は2、3cmほどである。側面は刃物で細かく削ら



第45図 C地点斜面下部・SK-110出土木製品(1)



第46図 C地点斜面下部・SK-110出土木製品 (2) 及びSD-102出土木製品 (31~36)

- れ、意識的に羽子板状に仕上げられていることが分かる。柄と反対側の木口は、何かにこすりつけるような使用方法によって均等に摩滅している。平らな面に何かを塗るような用具であった可能性が考えられる。
- 13 現存長10.8cm、最大幅2.7cm、厚さ4~8 mm。木口の一端のみ破損面で、ほかは当初の状態をとどめる。 木端が軽く反り、木口の一端が丸味をもって終わり、一見、刀の柄に似た形状をもつ。横断面も木端の 一方が厚く、他方が薄くなっている。刀を模した木製品の一部である可能性が考えられる遺物である。
- 14 厚さ 4 mmほどの薄い板で、刀の刃から切っ先にかけてのようなラインを示す部分が当初の状態を残し、 それ以外は折れ損じた部分である。切っ先様の部分は擦られた状態を示し、何らかの工具として用いら れた可能性が考えられる。
- 15 現存長9.5cm、幅1.7cm前後、厚さ1.5mmの細い経木である。両木口は折れ損じている。実測面は黒く、 漆が塗られているものと見られる。片側の木端にも黒色塗料が見られるので、こちらは当初の面が残り、 反対側は折れ損じていることが分かる。
- 16 長さ7.7cm、幅2.7cm、厚さ1.5~2.5mmの整った長方形の経木で、木口の一端は斜めに削ぎ落とされ、切削面は滑らかである。こちらの木口近くに、竹か木で作られた釘が、実測面側から打ちこまれている。もう一方の木口は、もともと鋸で浅い切れ目を入れて折り曲げられていたところで折れたように見えるが、端部は直線的で調整された様子がある。
- 17 厚さ 1 mmの経木で、幅 2 cm、現存長 9 cm、一端は斜めに折れ損じ、もう一端は意図的に四角く切り欠かれている。切り欠き側の一面に、長辺にほぼ直交するように直線が刻まれている。線間隔は図の上から3.6mm、6.9mm、6.1nm、5.9nmであり、細く切り残された部分にも直線はみられるが、ほかにくらべ木端に対しかなり斜めになっており、間隔も不ぞろいである。物差しの目盛りのようにも見えるが、何らかの文様か、あるいは単なる手なぐさみかもしれず、間隔がかなり不ぞろいなこともあり目盛りの可能性は低いとみておきたい。
- 18 厚さ3~4 mmという薄い板材で、幅は4.2cm前後で一定している。木端は平滑で、鉋で仕上げられたものと思われる。木口の一端は山形をなすが、本来は刀の切っ先のように斜めに切られていたものが、先端が折れたため山形になったものと思われる。本来の切っ先部の木口は何かにこすりつけられたように均等に磨り減っている。他端は木端に対し直角に折られている。その付近の表面には、鋸で付けられたとみられる切り傷が十数本残る。
- 19 現存長9.2cm、最大幅4.7cm、厚さ9mm、両側縁に意図的な切り込みが見られる。現在のものより幅は小さいが、卒塔婆の可能性は考えられないだろうか。
- 20 現存長10.2cm、最大幅3.4cm、厚さ5 mm、010より薄く、切りこみは明瞭であり、卒塔婆の可能性も十分 考えられる木片である。
- 21 現存長29cm、幅4cm、厚さは最大で7mmという薄い板材で、刀の断面のように木端の一方へ向けて薄くなっている。両木端は直線的に入念に仕上げられている。表面が部分的に、縦方向に削られ、削られた面は滑らかである。
- 22 横木の外(西) 側に何本かの杭と矢板がほぼ直線的に打ち込まれていたが、そのうちの最北端にあった杭である。直径3cmほど、断面がほぼ正円形の自然木(針葉樹の枝か)を利用し、一端を削り尖らせている(切削は3回)。現存長は36cmである。

- 23 現存長19cmで、杭の根本だけが残ったものである。ほかの杭が自然の枝や幹をほとんどそのまま使い、 横断面形が丸かったのに対し、この杭は断面が四角ないし五角形で、一面だけ自然の木肌をとどめるが、 ほかの面は断ち割られた面である。何らかの転用材であろう。
- 24 横木に引っかかっていた木材として一括取り上げされたものである。現存長17cm、最大径は3.5cm弱、一端が杭状に削られている。ほかの杭とちがうのは、先端の切削が6面(ほかは3面)と入念なこと、またかなり上まで切削されているのも相違点で、上部の切削は5面である。全体に丹念な加工が施されていることから、単なる杭ではないかもしれないが、その場合、具体的な用途は不明である。
- 25 横材の東側を止める杭の残欠と思われる。横方向に意図不明の切り欠きが4段にわたって認められる。 上部が二股に分かれる。樹表は黒く炭化している。
- 26 長さ10.5cmの木枝の断片で、加工の痕は認められないが杭として用いられていたものと思われる。
- 27 現存長4.3cm、杭先端部の断片である。
- 28 杭102と交差するように打ち込まれていた。現存長16.5cm、太さは径2cm内外、上端は節の部分のため これより太くなる。下端は多方向から細かく削られているが、先端は腐朽して失われている。
- 29 現存長20cm、樹芯部がなく一見竹のようにも見えるが、杭として用いられたものとみなされる。杭としては太めである。表面に斜め方向の刃物傷が目立つ。
- 30 横材の西側に接するように直立して出土したので、横材を止める杭として打ち込まれた材の下端部だけが残ったものと思われる。現存長15cm、最大幅11cm、図の裏面が樹表の自然面を残しており、もとはかなりの巨木を縦に断ち割って作られた柱材が、杭に転用されたものと思われる。

水場遺構横材等 (実測図なし、図版32)

SK-110の足場材などは大きな木材のため出土後の管理が難しく、本格的な整理作業を開始するまでの数年間のあいだでかなり変形してしまった。実測図の作成が事実上不可能なため、記述説明と発掘時の写真で概要を推察していただきたい。出土時の状況は第43、44図、図版14を参照されたい。

- 101 横木の東側、杭102の少し北で斜めに倒れた状態で出土した。もともとこのあたりに打ちこまれていたものと思われる。出土後の管理が悪く、細かく分断してしまったが、本来は長さ50cm、最大径30mmほど、広葉樹の枝を切っただけで、ほとんど加工せずに杭として用いられたものと思われる。
- 102 水位調節の横木の東側に打ちこまれていた杭、太さ $4 \sim 5$ cmの軽く曲がりくねった自然木の一端(樹頂部または枝先側)を、鉈のような工具で削り、尖らせている(切削は 3 回で、3 つの切削面ができている)。派生する枝も枝元で削っている。現存長73 cm。
- 103 長さ約90cm、根本側の最大径5cmほどの曲がりくねった自然の枝で、先端が二股に分かれる。枝分かれした一方は、12cm先で鋸で斜めに切られる。片方は21cmほど先で、鋸で斜めに切りかけているが途中でやめている。根本側が折れ損じているため末端の形状が不明だが、枝先の一方が斜めに切り落とされているとはいえ、こちらを地面に突き刺すような意図はなかったと思われ、杭のように使われていたとすれば、根本側を下にしたものと思われる。出土状況は、横木集積の東側に打ちこまれていた杭が、根本が腐ったため土坑中央側へ倒れたような状況を示しており、横木を押さえる杭だった可能性が高い。あるいは、そのように地面に打ちこんで、二股の部分で何らかの横木を受けるような使われ方をしていたのかもしれない。
- 104 横木集積の最も下にあった材である。現存長94cm、角材を対角線で縦に割ったような形状をもち、断

面は三角形で、最も太い部分で各辺の長さは $9 \times 7.5 \times 5$ cmである。角材の角に相当する部分はほぼ直角である。建築部材の転用であろう。

- 105 土坑西側の横木集積の東側60cmで、これと平行して出土した木材で、ほぼ坑底に接する深い部位で出土した。この木材を止めるような杭も矢板も検出されていないので、西側の横木の上の方にあった部材が転落したものと思われる。現存長114cm、直径12cm前後の広葉樹の幹か枝で、縦に半裁されている。派生する枝はすべて根本で断ち切られている。
- 106 長さ58cm、直径最大12cm前後、軽く曲がった自然の樹幹を切り取った材で、一端に切断面が残る。それ以外に加工の痕は見られない。

4 溝

掘建柱建物の背後(北側)を「コ」の字形に囲う浅い溝のほか、発掘区東端の水場遺構に発する、湧水の流路として掘られたかとみられる溝が3条平行して検出されている。どれも東北東から西南西に向けて流れるもので、北からSD-104、101、102と名づけられている(第37図、図版15)。

SD-104

幅40~50cm、長さは5 mほどで途切れるが、本来はもっと長く続いていたものと思われる。SK-128あるいは114に関連する溝の可能性があるが、斜面上部からの浸出水や雨水などを排出し、全体的に湿気を除去するために掘られたものかもしれない。出土遺物はない。

SD-101

SD-101はSK-128、152、136などからの流出水を処理するために掘られたものと思われる。幅は1 m 内外で、SK-128と接するあたりでは1.3mほどになる。128との境界は不明ながら、5 mほど南西に向かったあと、90度近く南方向に折れ、SD-102にぶつかる。102と合流して、ここで終わっていたのか、さらに南まで続いていたか、発掘区外となるので確認できない。

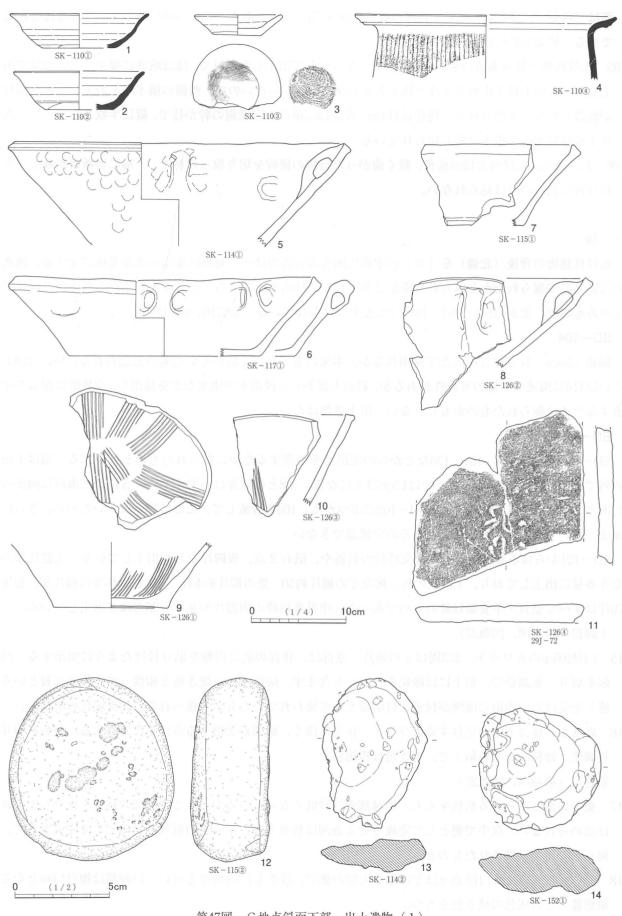
SD-101からは石鏃、磨石など縄文時代の石器や、砥石2点、板碑片などが出土している。土器片はかなり多量に出土しており、土師質の杯、椀などの破片約50、甕の破片約400、須恵質の杯等の破片50、甕等70片はすべて奈良・平安期以降のものであった。中近世以降の陶器片や瓦片も25点ほど出土している。

土師器(第48図、図版27)

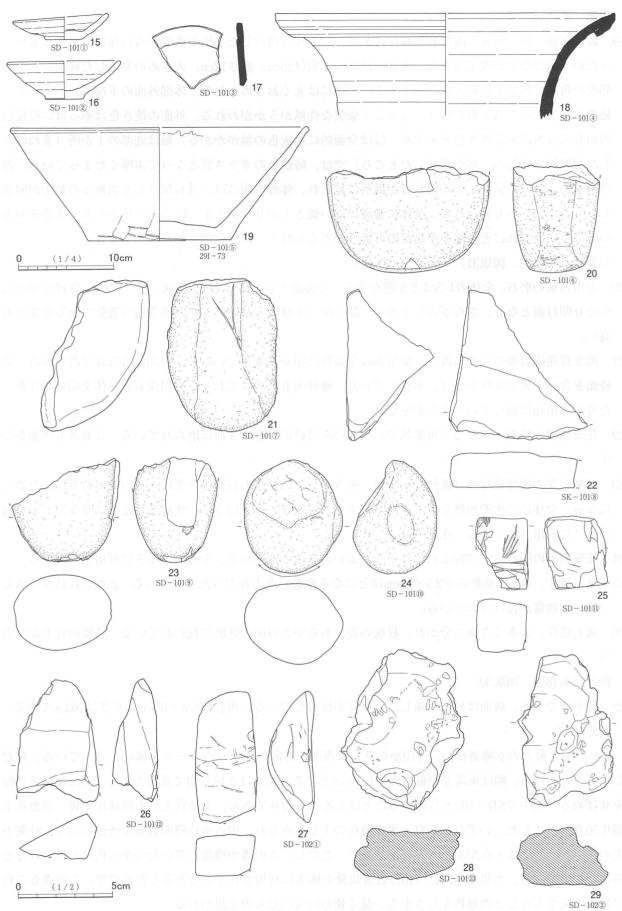
- 15 口径9.6cmのカワラケ。2/3周ほどの破片。底部は、体部の底に円盤を貼り付けたように突出する。回転糸切り、無調整で、胎土には砂粒をほとんど含まず、灰色っぽい焼き色と相俟って全体に瓦質という感じを受ける。内面に油煙が付着、灯明皿として使われていたものと思われる。16世紀代の所産か。
- 16 底部から体部下半が完存するカワラケ。体部は深く、底部が突出する点は1に共通する。回転糸切り、 無調整。砂粒の少ない胎土で、焼き色は橙褐色。

須恵器(第48図、図版27)

- 17 甕の底部とみられる形状をもち、周縁部が一段低くなっているが、ここに胴部の粘土を接合した痕跡 は認められない。途中で甕として完成させる意図は放棄され、平らな円盤状の物体として完成されて、 何らかの用途に供されたものと考えられる。
- 18 甕、口頸部破片。口径35cmほどになる大型の甕で、器壁も1.2cm前後と厚い。口縁部は複合口縁となる。 須恵器らしい灰色の焼き色をもつ。



第47図 С地点斜面下部・出土遺物 (1)



第48図 C地点斜面下部·出土遺物(2)

陶器(第48図、図版28)

19 鉢形陶器。同一個体の陶器破片 6 片があり、このうち接合した 2 片が底部から口縁部まで続くものだったので器高などが復元できた。復元口径35cm、底径15cm、高さ12cm、大きめの安定した底部から、約45度の角度で体部が直線的に立ち上がる。口縁部は丸くおさめられる。体部外面の下端に、下から上へ施されたナデの工具圧痕が残り、荒々しく豪快な作風がうかがわれる。外面の焼き色は赤っぽい橙褐色、内面も部分的に同じ焼き色を示すが、ほぼ全面的に緑灰色の釉がかかる。釉は底部の1か所(重ね焼きした別個体の底部の一部が固着したところ)では、暗緑色のガラス質となってぶ厚くたまっている。器壁断面には気泡の膨張による割れ目が随所に見られ、体部内面には、重ね焼きした別個体の粘土が固着したものがいくつも見られる。全体に常滑に近い焼き上がりを示すが、胎土その他からみて常滑そのものではなく、これに近い知多半島産の可能性が考えられる。16世紀代に比定されよう。

石製品(第48図、図版31)

- 20 安山岩製の磨石。全体の1/3ほどが遺存する。表裏面とも磨られ非常になめらかである。側縁は全面に わたり叩打面となり、ざらざらしており、特に図の下側の荒れが著しい。縄文期の遺物である可能性も 高い。
- 21 黒雲母花崗岩製の叩石の破片。使用面は全面的に叩かれ荒れているが、一部は磨られ平滑である。破 砕面を含め全体が加熱を受け、赤化している。破砕面も摩滅しており、破損後も石全体を叩いたり磨っ たりする用途に使っていたことが分かる。
- 22 花崗岩製の砥石。不整な三角錐状で、一面のみ破砕面で他の3面は磨られている。3面とも凹面をなす。
- 23 磨製石斧の頭部破片の可能性もあるが、そうだとすると元の石斧は非常に大型の蛤刃石斧だったことになる。全体に二次的加熱を受け表面が黒ずむ。破損後も再利用され、側縁と下端部は叩きに、表裏面は磨りに利用されている。花崗岩製。
- 24 花崗岩製の叩石。掌で握るのにちょうどよい大きさの楕円形で、全面的に叩きに利用されている。
- 25 砥石破片。本来は横断面が2.5×3.5cmほどになる細長い直方体だったと思われる。表面に鉄錆が付着し、 一面に刃物傷が付けられている。
- 26 砥石破片。大きく3面に分かれ、程度の差はあるがどの面も研磨に使われている。鉄錆の付着が目立つ。

鉄滓(第48図、図版30)

28 椀形滓であり、底面は軽く湾曲し、炉壁材が付着している。現存長8cm×5.5cm、重さは162gである。 SD-102

SD-102は最大の水場遺構SK-110から発し、西南西方向へ弓なりのカーブを描いて下っている。確認した長さは約18m、幅は東端部が最も広く1.1mほど、 $7\sim8m$ ほど同じ幅で進んだあと、50cm前後まで幅をせばめる。途中でSD-101と合流することは上述のとおりである。土師質土器の微細片 1 袋、須恵質土器片50点が出土した。いずれも奈良・平安時代の土器とみられ、中近世以降の遺物は皆無に近く、時期不明の瓦質土器の細片 1 点が出土したにすぎない。ただし、この溝が機能していたのが古代にかぎられるとみるべきではなく、水場遺構SK-110は近世以降も確実に利用されていたとみられるので、この溝もこれに伴って底ざらえなどの補修をしながら、長く使われていたものと思われる。

SD-102からは杭状の木材4点、矢板状の板材1点のほか、不定形の細かい木片が40点ほど出土している。細かい木片の出土状況は不明で、SK-128に伴うものも含まれているかもしれない。杭と矢板状の木材は溝の東端、SK-110に接するあたりで出土した(第44図)。溝の北側壁の肩から溝外の平坦部に移行する部位で、溝の方向にほぼ一線に並んで打ちこまれた状態で出土している。出土状況からみて、この杭列は溝のノリ面肩を保護するために打ちこまれたものと考えるのが自然である。なぜ保護が必要だったのか推測の域を出ないが、台地上や掘建柱建物の住人などが水場遺構SK-110に行くためには、溝SD-102に沿って歩いて行かなければならないから、頻繁な通行による溝肩の崩壊を防止するため、杭を打って結界としたか、あるいはその外側に板材などを敷いて歩道としたものかと思われる。

出土遺物のうち図化可能なものは以下のとおりである。

石製品(第48図、図版31)

27 砥石。長期の使用で半月形に摩滅し、長さ7cm足らずまで小さくなっている。5面とも平滑で、表面に鉄錆が付着する。

鉄滓 (第48図)

29 椀形滓で、意図的に打ち割られている。現存長8cm×5cmで、底面に炉壁材が付着する。151g。なお、ほかに椀形滓の断片とみられるもの2点が出土しているがどれとも接合しない。

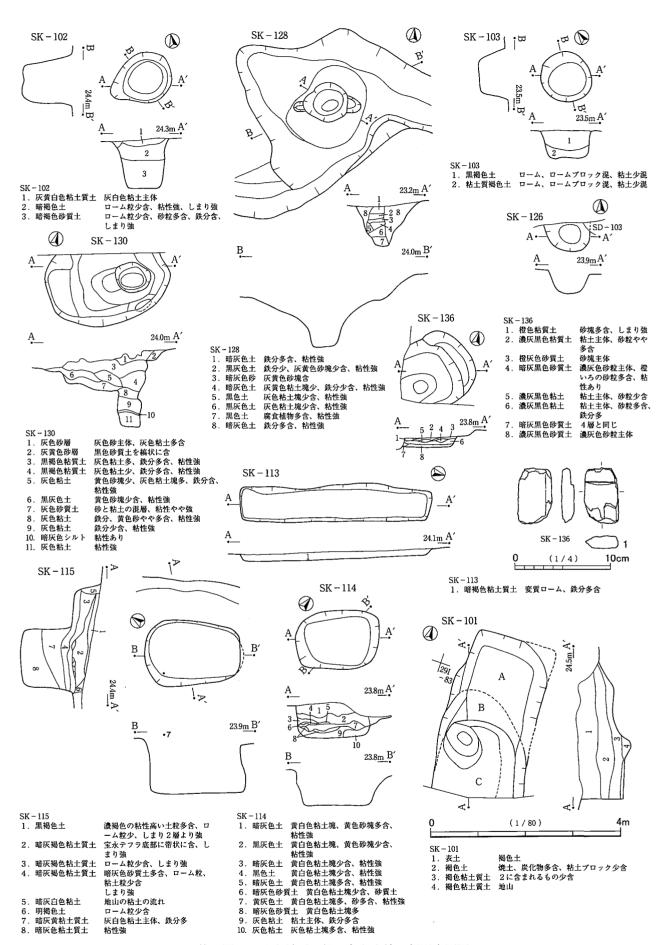
木製品 (第46図、図版30)

- 31 現存長20.3cm、幅は4cmから4.1cmとほぼ一定する。木口の一端は折れているが、木口のもう一端及び木端の両側と表裏両面は整形された元の状態を残す。横断面形を見ると片面は平坦で、もう一面はわずかに蒲鉾状のカーブをもっている。最大厚さ1cm前後で、両木端と木口はこれより若干薄い。全体に整った姿であり、各面とも丁寧に整形されているが、地面に刺さった状態で出土しているので、最終的には矢板として利用されたのは間違いない。ただ、ほかの矢板材にくらべ整形が入念なことから、本来は別の用途をもっていた可能性が高い。
- 32 現存長14.6cm、杭先端部の断片で、切削面が2面見られる。
- 33 現存長17.5cm、最大径3.5cmの杭、先端は2方向から何度か鉈で削られ、尖っている。
- 34 現存長20.5cm、最大径4.3cmの杭状の木片で、両端とも破損面である。一端に繊維状の付着物が認められる。
- 35 現存長31.5cm、最大径3.2cmの杭。一端が鉈で削られ杭状に仕上げられている。材の先端に近い部位の 樹皮が、3か所で縦方向に薄く削り取られているが、目的は分からない。
- 36 現存長34cm、最大径4.2cm、一端を鉈で削り(切削面は3面)尖らせている。その後先端側からの切り こみが加えられ、先端が折られている。他端は自然腐朽によるものか先細りになっている。

5 その他の土坑

下段区画で検出された土坑数は66、掘建柱建物とこれに付随する小屋の柱穴かと見られるものが最も多く、また明確に建物を復元できないものの、柱穴程度の小さな土坑がほかにもかなり多い。このような土坑及び水場遺構を除くと、ある程度の平面規模と深さをもつ土坑は第48図に示した程度であり、用途もはっきりは分からないものがほとんどである(第49図、図版16)。

SK-102は溝SD-102の南にあった径1m内外の円形の土坑である。深さも1mほどだが、土層差が見



第49図 С地点斜面下部・主な土坑の個別実測図

分け難かったため検出面をかなり掘りすぎてしまったかと記録されており、本来はもっと深かったと思われる。発掘時点でも湧水がかなりあり、井戸ではなかったかと考えられている。土師器細片14点、須恵器細片1点が出土しており、いずれも奈良・平安期土器の特徴をもつものであった。

SK-103もほぼ同形、同大の遺構で湧水があり、現場では井戸の可能性が指摘された。30cmほどの深さしかないが、これも本来はもっと深かったと思われる。西の縁から細い溝が派出しているが、土坑との先後関係などは分からない。土師器 6 点、須恵器 1 点が出土しており、いずれも奈良・平安期土器の特徴をもつ微細片であった。

SK-128は水場遺構かもしれないが、木材の出土はなく、その他の遺物も皆無なため、肯定材料には欠ける。周囲がかなり広く、不整形に掘りくぼめられ、その中に直径80cm、深さ1mの円形の土坑が掘られる。覆土断面に柱の腐食痕のような土層があったと記録されている。土坑の用途は不明といわざるを得ないが、井戸の可能性も捨てきれないと思われる。出土遺物はない。

SK-113は掘建柱建物の西北にあり、長さ4m、幅80cmの浅い溝で、掘建柱建物の柱筋と同じ向きなので、これに伴う区画溝の一部かもしれない。土師質の土器片2点(うち1片は中近世のものか)、須恵器片1点が出土した。

SK-126は掘建柱建物の北東に接して検出された。直径80cm前後の円形の土坑で、中から比較的多量の遺物が出土した。土師質土器片46、須恵質片9はほとんど奈良・平安期のものだが、すり鉢片1、内耳鍋片4、板碑破片1など中近世の遺物も含まれており、この土坑の時期が掘建柱建物に近いことを示している。主な出土遺物を図示する(第47図)と、8は内耳土器で現存高9.5cm、口径にくらべ底径がかなり小さくなる形態だったと思われる。板状の耳は幅2cm強、厚さも1cmほどあって堅牢な作りである。口縁端部は内外方に少しずつ張り出し、上面がわずかにくぼむ。内面は丹念にナデ調整されるが、画面は粗雑な調整で凹凸がある。外面には煤の付着が著しい。15世紀後半から16世紀前半ころまでの所産であろう。9、10は擂鉢の口縁部と底部の破片で、互いに接合しないが、胎土その他から同一個体であることは確実と思われる。底径12cm、現存高6.5cm、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内面は丹念にナデ調整したあと、底部から上に向かって櫛目が施される。櫛歯は7本である。内外面とも黒色を呈するが煤の付着によるものではなく、本来の焼き色のようである。胎土には長石の微少な粒を多量に含む。これも15世紀後半から16世紀にかけての遺物であろう。11は板碑の破片、厚さ1.5~1.8cmの緑泥片岩製で2つの破片が接合した。四周はすべて破砕面である。キリークの種子が彫られている。

SK-130は長径1.3m、最大幅は不明ながら 1 m前後だったと思われる。深さ30cmほどで一旦鍋底状の面ができ、そこからさらに直径40cm、深さ70cmほどの深い穴が掘られる。土師器細片 8 点、須恵器細片 1 点のほか、割箸より少し幅広い長さ14cmの木片 2 点と、長さ 8 cm、底辺 3 cmの長三角形状の板1点が出土している。

SK-136は水場遺構SK-110の西に隣接した土坑で、西と南を発掘時の排水溝に切られているため全形は不明だが、長軸長1m強、短軸長0.8mほどの長円形プランをもっていたと思われる。掘りこみは比較的浅い。この土坑からは木製品が出土している(第49図1)。現存長6.8cm、幅3.6cm、厚さ13mmの板材の断片で、木口の一端が鋸で切られ薄く仕上げられている。建築部材の残欠かもしれない。

SK-152は128、136とほぼ同形の土坑で、東西に並んでいる(第37図)。先述のとおり、この3基は井戸として次々と掘り直されていったものと思われる。鉄滓が1点出土している(第47図14)。ほぼ円形の椀形

滓で、周囲に破砕面はなく完形である。116g。

SK-114と115は相接して掘りこまれ、平断面プランも似かようので、時期も掘削目的にも近いものがあったかと推測される。114は長軸長1.7m、幅1.2m、深さ70cm、平安期以前の土器細片 3 点、内耳鍋の大破片 1 点、椀形滓 1 が出土した。覆土の層はやや複雑で、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。内耳土器破片(第47図 5)は現存高11cm、復元口径は35cm、2 個一対の耳の部分の破片で、1 個は剥がれ落ちている。残った耳は幅の狭い板状で、耳の上端は吊り紐との摩擦で両側から抉れており、長期間使用されたことをうかがわせる。内面は丹念にナデ調整されるが、外面は指頭で粘土をなでつけたような細かい凹凸が目立つ。口縁端部の断面は四角く、端面はわずかにくぼむ。15世紀後半から16世紀ころの所産と考えられる。鉄滓(第47図13)は不整な長円形の椀形滓で、割られていない。底面の湾曲の程度は弱い。8 cm×5.5cm、76 g。

SK-115は長軸長2m、最大幅1.4mと一回り大きく、深さも1.2mと深い。陶器片1、内耳鍋片7、板碑片1、叩き石1など中近世の遺物を中心に出土している。平安期以前の土器は見られなかった。覆土は自然に堆積したような様相を示す。覆土のかなり高い部位、土坑がほぼ完全に埋まりかけたころの面に宝永テフラが降着している。本土坑の営まれたのが中世末期前後の可能性が高いことを示している。内耳土器破片のうち1点を図示する(第47図7)。高さ8.5cmと浅い鍋状で、底面は平坦だったと思われる。体部は外反しつつ立ち上がり、口縁端部は内側につまみ上げられ、内面では口唇部下に稜ができる。内面は平滑で、外面も比較的丁寧な仕上げであるが、凹凸は残る。胎土に金雲母を多く含む。16世紀代に比定されよう。叩石(第47図12)は完形品で、側縁の一部に磨り面が残るが、そのほかは全面的に叩かれ表面が荒れている。花崗岩製。

SK-101は長方形の土坑に、不整円形の土坑が重複したような複雑なプランを示す。坑底に小ピットも見られるが、偶然の重複か、付属構造なのか分からない。土師質20、須恵質6のすべて平安期以前の土器細片のほか、中近世の陶器片2、近世の瓦片2、鉄滓1などが採集されている。複数の土坑の重複とすれば、各時期の遺物がそれぞれに帰属するのかもしれないが、検証は困難である。

6 C地点表土中出土の遺物

C地点の遺構検出作業中に表土中などから採集され、遺構に伴わない遺物のうち、実測可能なものを掲示する。

須恵器 (第50図、図版28)

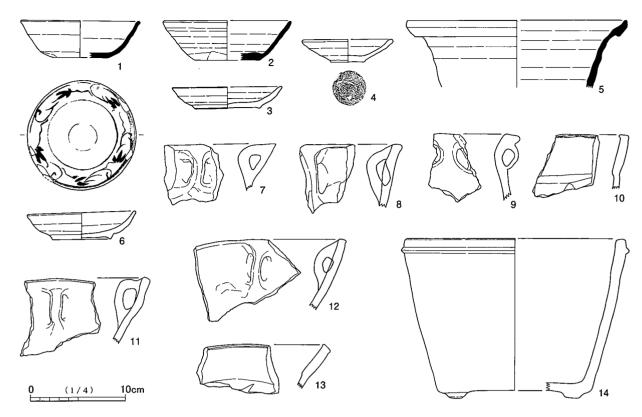
- 1 杯の破片。内外面とも均質な黒色を呈する。胎土の内部は褐色。
- 2 杯、1/4周の破片。底部は手持ちヘラケズリ、胎土に不透明な白い石粒を多く含む。灰橙褐色。
- 5 甕の破片。頸部の長い形態の甕で、口縁部は複合口縁状に肥厚する。

土師器(第50図、図版28)

4 口径9.2cmのかわらけ。作りは丹念で、焼成も堅緻で、須恵器に近い質感をもつ。底部は回転糸切り無調整。16世紀後半ころの所産かとみられる。

陶器 (第50図、図版28)

3 1/2周の破片。復元口径11.2cm、底径6.9cm、高さ2.3cmの浅い皿で、低い高台が削り出される。内外面 ともに灰釉がかかり、内面は細かい嵌入が顕著である。志野の丸皿で17世紀初頭ころの作と推定される。



第50図 C地点斜面下部・表土中出土遺物(1)

6 口縁部をわずかに欠くほかは完形。口径11.1cm、高台の径5.9cm、高さ3cm。高台に囲まれた底面にトチンを剥がした痕が3個残る。内外面とも薄いクリーム色の灰釉がかけられ、内面にはその後に呉須で文様が描かれる。口縁直下と体部中位、および底面に、ロクロの回転を利用して3本の圏線が描かれ、上2本の圏線間に草葉と蔓をあしらった文様が描かれる。草葉は3枚1組で、すべて横向きに5組描かれ、その間に唐草風の蔓を配する。胎土はクリーム色で、比較的大粒の長石を含んでいる。いわゆる志野の鉄絵皿で、17世紀初頭の所産と考えられる。

内耳土器 (第50図、図版28)

7 紐状の耳をもつ内耳土器で、耳は太く、断面はほぼ円形で、半環状に付けられている。耳はかなり堅 牢に作られているといえる。口縁端部は水平で、外側に向かって鋭く尖る。体部内面も黒みの強い焼き 色を示す。

なお、紐状耳をもつ内耳土器破片は、すべて胎土に金雲母や長石を含まないことが注意される。

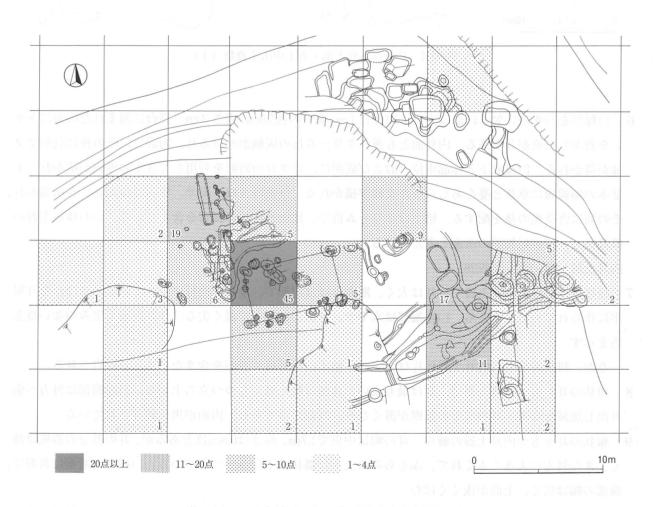
- 8 紐状の耳をもつ内耳土器で、耳は最も太い。体部は軽く外反しつつ立ち上がる。口縁端部は外方へ張り出し加減となる。耳の部分の器壁が薄くなり、外側にふくらむ。内面が黒色処理されている。
- 9 板状の耳をもつ内耳土器の破片。耳の幅は中央で1.7cm、厚さは0.8cmほどあるが、耳の部分の器壁は薄く、また外方に大きくふくれて、ふくらみの上下に皺状のくぼみができている。口縁部の断面は角形で、端部の幅は広く、上面が浅くくぼむ。
- 10 内耳土器破片。体部が上下2段に分かれ、下段はふくらみが強く、途中でくびれ、やや直線的に立ち上がる上半部に移行する。くびれた部分の内面には、明瞭な稜が形づくられる。内面の焼き色は灰色で、

胎土に微少な雲母を混入する。

- 11 紐状の耳をもつ内耳土器で、胎土などからみて12とは明らかに別個体である。体部の断面形は23に似るが、外面の調整は粗雑である。
- 12 紐状の耳をもつ。耳の太さは7~10mm、断面はやや扁平な円形である。吊り紐による擦痕がわずかに 見られる。体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。体部外面もかなり平滑に仕上げられ ている。
- 13 内耳土器破片。10と同じように体部が上下2段に分かれるもので、体部下段はふくらみをもつ。途中のくびれは10より弱く、くびれた部分の内面の稜もそれほど鋭くない。内外面とも黒色処理され、調整も入念である。

以上の内耳鍋のうち、10、13は口縁部下の内面に稜をもち、これは鉄鍋の形態を模倣したものであり、時期がさかのぼる可能性を示す。15世紀代の所産であろう。

また、紐状の耳をもつものは比較的古く位置づけられ、15世紀後半ころに比定されよう。板状の耳をもつ9は非常に粗雑な作りであり、16世紀でも後半か、17世紀はじめころまで下る可能性が考えられる。



第51図 C地点斜面下部・内耳鍋破片出土状況図

深鉢形土器 (第50図、図版28)

14 全体の1/4周ほどが残る。底部に円形の小さな脚が付き、脚を含む高さ16.7cm、体部だけの高さは16.2 cm、復元口径は22cmあまり、底径は15cmあまりである。器壁の厚さは1cm前後とほぼ一定し、口縁部下の突帯のあたりがほかよりやや厚い。体部はほぼ直線的に立ち上がり、胴中位がわずかにふくらみ加減である。口縁端部は丸くおさめられる。口縁部下の外面に1条の突帯がめぐる。体部外面は加熱によるものか、全体的にかなり剥落している。また、内面の口縁部から下1~2cmの範囲がかなり激しく摩滅している。別の土器などが常態的に載せられたためかとも思われる。内外面とも比較的丁寧にナデ調整されている。内面は黒色処理され、外面は橙褐色の焼き色で、部分的に黒斑(または煤の付着か)が見られる。火鉢として用いられた17世紀前半ころの土器とみられる。

石製品(第52·53図、図版31·32)

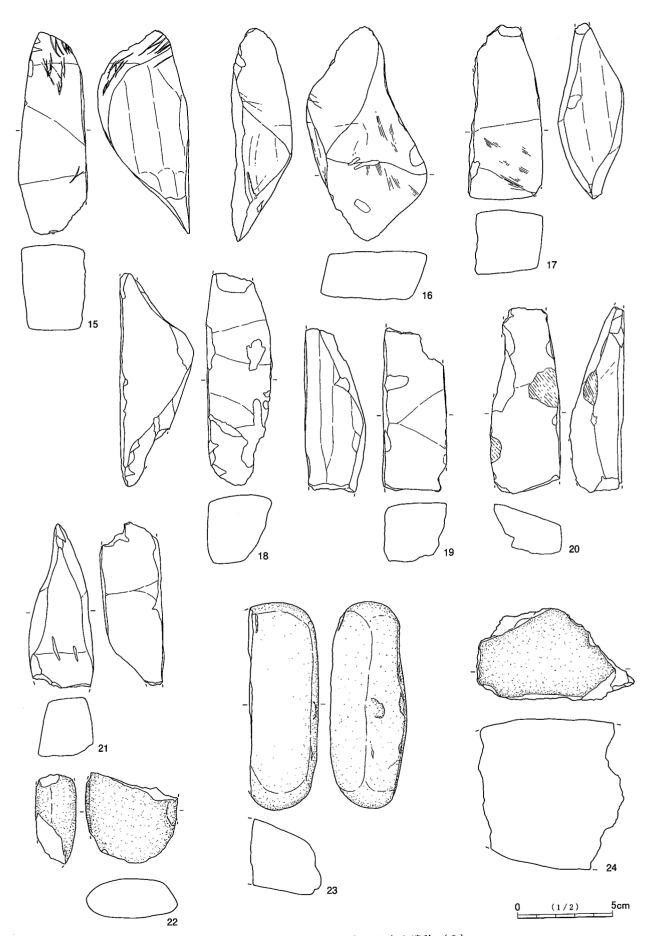
- 15~21 何れも凝灰岩製の砥石である。材質はたがいによく似ており、15、16、17の3点は灰色で部分的に黒ずむなど共通点が多い。18と21はやや青みがかった灰色、19と20は若干黄色みを帯びた灰色と相共通する。もともとは細長い直方体だったと思われるが、長年の使用によって摩滅し、不整な形に変形している。表面に金属の刃による傷の残るものも多い。
- 22 凝灰岩製の磨製石斧の刃部破片かとみられるが、破損し打製石斧の刃部のように変形している。
- 23 長さ11cmの細長い花崗岩の両端を叩きに使い、強打のためか縦に割れている。側面は磨り石として利用されており平滑である。
- 24 安山岩製の磨石又は石皿の破片で、厚さが8cmもある。上下面は磨られているがそれほど滑らかではない。
- 25 花崗岩製の叩石ないし砥石で、側縁部のうち丸味を帯びた部分には叩き痕が目立つ。表裏面は砥石として利用され凹面となる。側縁部のうち直線的な2面も砥石として利用されている。全体に鉄錆が付着している。
- 26 花崗岩製の叩石ないし磨石。側縁には叩き痕、表面には磨った痕が目立つ。火にかかり赤化し、部分的に鉄錆が付着している。
- 27 滑らかな平面と丸味のある側面をもつことから石臼の断片と考えられる。安山岩製であろう。

羽口(第53図、図版30)

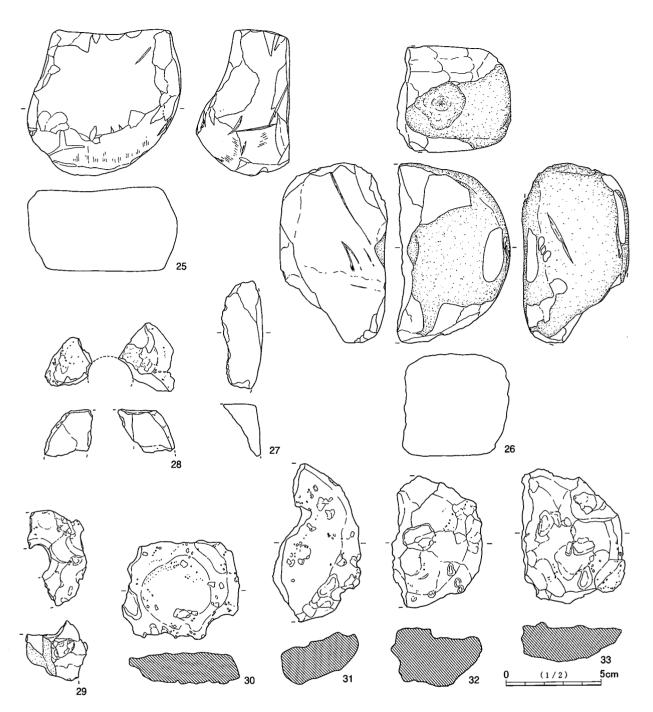
28、29 鞴の羽口先端部の破片が3点、同じグリッドで採集されている。同一個体の破片の可能性も高いが互いに接合しない。溶融の具合の差、29の方は全体に細長い形状になるとみられるのに対し、28の2片は下方にふくらんでいく感じがあり、別個体として実測した。3片とも強い加熱により部分的にガラス質に変じている。

鉄滓 (第53図、図版30)

- 30 炉底滓とみられるが、通常の椀形滓とちがい平面形が長方形となっている。4辺とも断ち割られた面ではなく本来の形をとどめる。偶然の結果か、炉底の構造に起因するものか分からないが、注意しておきたい特徴である。重さ72.5g。
- 31 半裁された椀形滓で、当初の直径は10cmほどもあったと思われる。重さ90.5g。
- 32 ちょうど半分に割られた椀形滓で、径の割に厚みがあり重い。104g。
- 33 断ち割られ全体の2/3ほどが残る椀形滓。102 g。



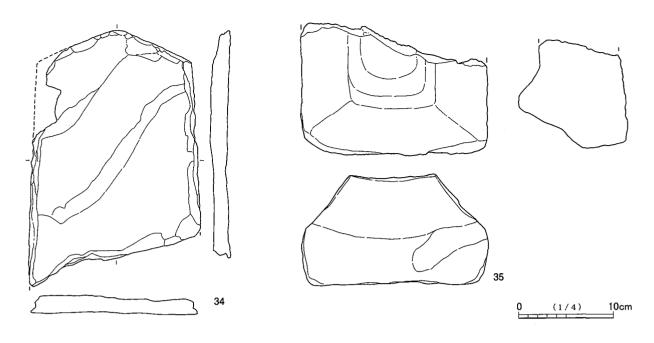
第52図 C地点斜面下部・表土中出土遺物 (2)



第53図 С地点斜面下部・表土中出土遺物 (3)

板碑・石塔 (第54図、図版30)

- 34 板碑の破片。山形の頂部をもつが、頂部も両側縁も全く調整されていない。また表面には二条線や種子その他の彫りこみもない。未製品なのであろうか。現存27cm、最大幅18cm、厚さは最大で2cmである。
- 35 五輪塔の火輪部の破片である。遺跡内で表採されたものというが、採集地点に関する詳しい記録は伝えられていない。軒の一辺19.5cm、頂部の一辺は9cm、全体の高さ11.5cm、頂部は2.5cmほど窪んでいる。表面全体に整形の際の工具痕が残る。安山岩製。



第54図 C地点斜面下部・表土中出土遺物 (4)

7 その他の遺物

郷遺跡のA、B、C3地点からは少量の縄文土器片と石器、弥生土器(1点のみ)などが採集されている。いずれも同時代の遺構や包含層から出土したものではなく、完形にはほど遠い断片的資料なので一括して記述する。

縄文土器 (第55図、図版35)

1は口縁部の破片で、口唇外面に平行する斜行沈線が密に刻まれ、その下方には貝殻腹縁による連続波 状文が現状で2段認められる。浮島3式であろう。

2、3は加曽利B式の精製土器、4、5は加曽利B式の粗製土器で、類例の多い文様構成要素をもつ。 6は、たがいに接合しないが同一個体と思われる口縁部の破片3点で、安行1式の精製土器である。7は 波状口縁の把手部分の破片で、安行2式ないし3a式であろう。8も安行式で、口唇下部に連続爪形が付さ れた粗製土器である。

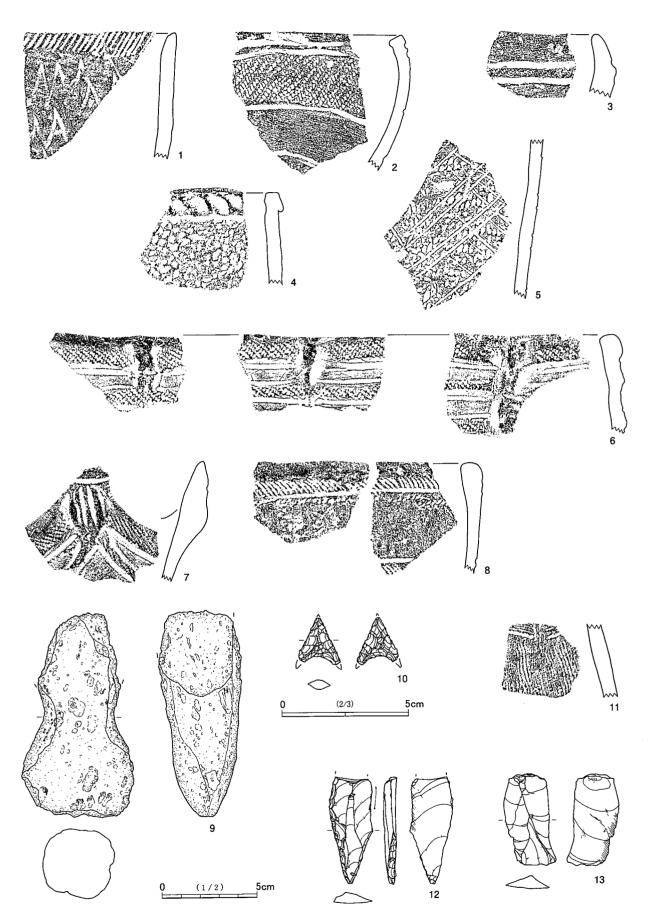
石器 (第55図、図版35)

9は石斧で、一見軽石かと見まがう多孔質の石材でできている。材質は堅い。分銅形の磨製石斧で、上部を欠き、刃部も使用による刃こぼれが目立つ。現存長10.6cm、最大幅 6 cm、縄文時代の遺物とみてよいと思われる。10は黒曜石製の無茎の石鏃である。

12はA地点の溝SD-002覆土中から採集されたナイフ形石器で、先端部が切損している。表面は基部側から剥離が繰り返され、側縁部を細かく調整剥離し、基部の形を整えている。硬質頁岩製である。13はC地点斜面下部で採集された使用痕のある剥片で、図の下端部が刃部として利用されている。珪質頁岩製である。

弥生土器(第55図、図版35)

11 は北関東系の弥生土器の甕で、縄文の施された胴部から、ヘラ描き沈線で飾られた頸部にかけての破



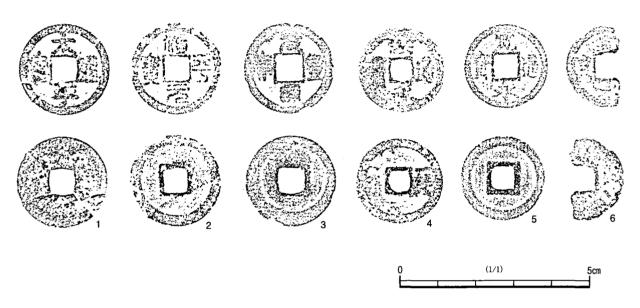
第55図 郷遺跡出土縄文土器・弥生土器及び石器

片である。

銅銭 (第56図、図版32)

A地点で2枚、C地点で2枚の銅銭が出土し、ほかに2枚が表面採集されている。A地点出土品は1と2で、1は溝SD-002の覆土中出土の北宋銭で、「太平通寶」(初鋳976年)である。2もSD-002の西端部がかかるグリッド中出土なので、溝との関係が考えられる。篆体の「治平元寶」(1,064年)である。

3はC地点の溝SD-102から出土した北宋銭で、篆体の「元豊通寶」(1,078年)である。 $1 \sim 3$ の背はいずれも無文である。4もC地点の下段区画内出土で、明の「洪武通寶」(1,368年)で背に「一銭」と記される。5、6 はどちらも表採の「寛永通寶」である。



第56図 郷遺跡出土銭

第3章 中久喜遺跡

第1節 検出した遺構と遺物

1 検出した遺構の概要

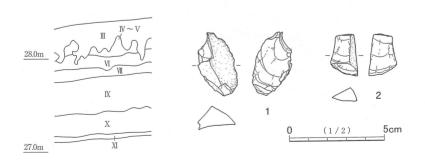
検出された遺構の種別と数量、遺構番号は以下に示すとおりである。遺構番号は検出順に付けられているが、土坑(SK)の中に、その後の検討で、木の根の腐朽痕その他の人為的な遺構ではないことが明らかになったものがあり、これについては欠番となっている。



第57図 中久喜遺跡の地形と遺構検出状況



第58図 中久喜遺跡下層確認グリッド配置図



第59図 下層基準土層図と出土遺物

住居跡 (SI) 5軒 (SI-001~005) 土 坑 (SK) 40基 (SK-001~042。 028と032は欠番) ピット (P) 4個 (P-001~004)

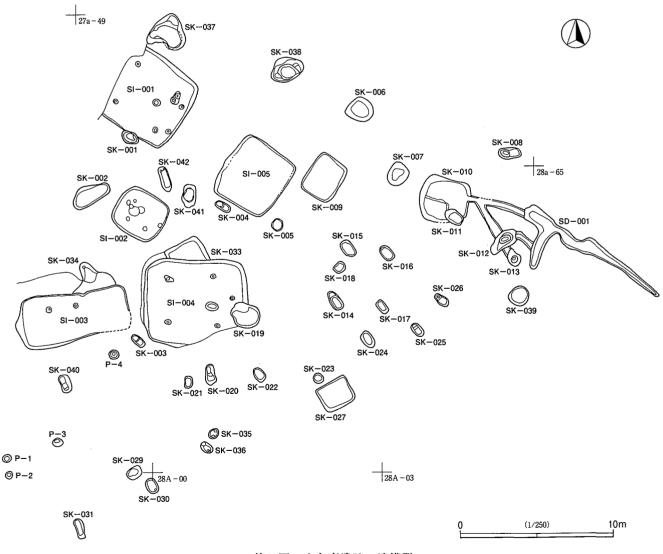
溝 (SD) 1条 (SD-001)

上記のうち、ピット (P) とされたものは土坑 (SK) として扱ってもよいと思われるが、他の土坑にくらべて小さく、当初、掘建柱建物の柱穴としてまとまる可能性を考えてPという別個の遺構番号が付された。ここでは、現場での扱いを尊重してそのままの呼称を踏襲しておく。

発掘区は、東に向かって三角形状に張り出した台地先端部に位置する。竪穴住居跡は発掘区の西半部に 集中するが、その範囲が台地上の平坦部の限界で、これより北、東、南の三方は緩い傾斜面となって、こ こが土坑等の主な分布範囲となる。さらにその外側は急傾斜となって、遺構の存在しない地域となる。

住居跡

竪穴住居はどれもカマドをもたず、床面に炉を設けている。平面プランは隅丸方形で、わずかに胴張りする。柱穴4個を完備するものは3軒(SI-001、002、004)、このうちSI-002は火災住居で、炭化材が多



第60図 中久喜遺跡の遺構群

量に出土している。

炉は床面の中央より、四壁のうち一つの壁面に片寄っている。SI-002ではその反対側に出入口施設に関係するとみられる柱穴があり、ほかの遺跡での事例からみても、柱穴がない場合も出入口部は炉が片寄った壁面の反対側にあった可能性が高いと思われる。このように仮定して、出入口から炉を見た方向を主軸方位とすると、北東方向を向くのが1軒(SI-005)、北を向くのが1軒(SI-003)で、この2軒は主軸方向に対して横長の竪穴となり、胴張りの弱いという共通性をもつ。SI-001、002、004の3軒は縦長で、主軸方位は001、002が北西、004は東向きである。この3軒は軽く胴張りして四隅も丸く、小判形に近い平面プランをもつという共通性が認められる。

SI-001で完形の台付甕3点(うち小型甕のみ台部の一部を欠失)が出土したほかには完形土器の出土はなく、その住居で使われていた土器の遺留品と確実に認められるものはない。ただし、出土土器片はほぼすべて五領式期かその直前期の特徴をもち、わずかながら異条斜縄文をもつ弥生終末期の土器片が混じり、集落の形成時期を示している。

なお、SI-003は最終的に、東西に非常に長い長方形プランに掘り上げられた。調査時には、土層の連続性からみて、当初からこのようなプランをもつ1軒の住居跡と結論された。しかし、当地では弥生時代終末から古墳時代初期にこのようなプランの住居は認められないから、何らかの事情で拡張されたものとみるのが妥当である。北側の辺にくびれが見られるので、これより西側が本来の竪穴範囲なのだろう。

土坑

40基の土坑は規模、形態とも多様だが、いくつかのグループに分類できる。

一つは縄文時代の炉穴3基(SK-037、038、006)で、台地の北縁に沿って一列に並ぶ。このうち多量の焼土が堆積し、炉穴として長期の使用が認められるのはSK-037だけだが、ほかの2基も形態や覆土中に焼土、炭化物を含むことから、炉穴と認定されている。

方形プランをもち、炭化物が顕著なことから、明らかに近世以降の炭窯と認められるものも3基あった。いずれも長辺の長さ2m以上の規模をもつ。SK-033と009は台地中央部にあり、033はSI-004の覆土を一部切り込んでいる。SK-027のみ台地南辺の緩斜面部に位置している。

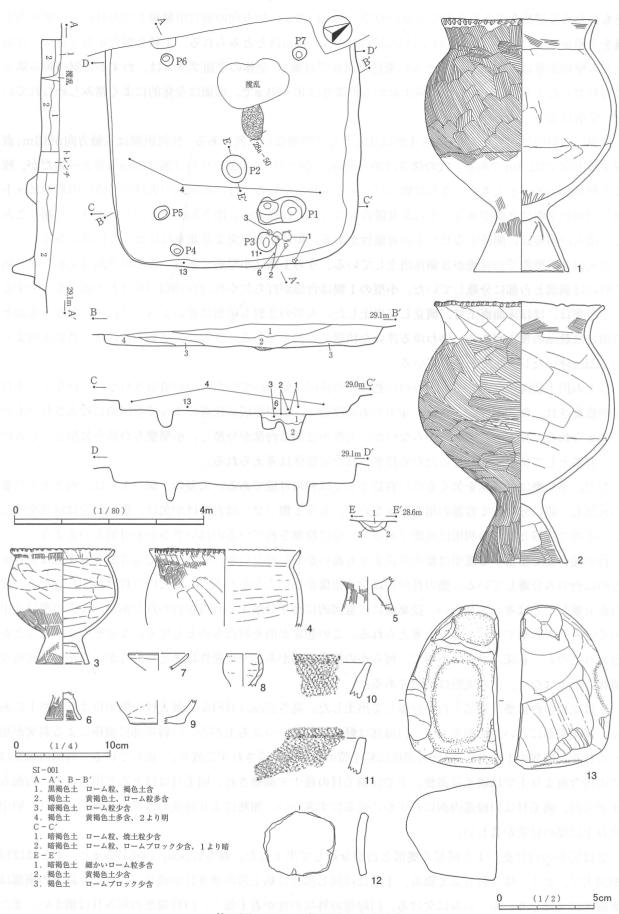
上記の2グループは平面プランの共通性や焼土、炭化材を伴うことなど、他の土坑との差異が際だつものである。これ以外は、一部の孤立したプランの土坑を除き、長方形ないし長円形プランのものと、円形プランのものに2大別され、前者に属すものが圧倒的に多い。

長方形ないし長円形プランのものはほぼ例外なく、主軸方位を北西から北北西方向に向けており、互いの関連性の深さをうかがわせる。また、5軒の竪穴住居と重複するものが一つもない点も注目される。長方形あるいは長円形プランといっても形態上の差はわずかなものであり、意図的に区別して掘りこまれたものかどうか分からない。いずれも長軸長1mから1.5mほど、最大幅は0.7m前後、深さ(検出面からの)も0.5m内外で1mを超えるものはない。長方形ないし長円形プランの土坑で遺物の出土したものはない。したがって、土坑の時期、性格については不明な点が多いが、この点については後述する。

2 竪穴住居跡

SI-001 (第61図、図版38・47)

竪穴北西部がわずかに発掘区域外にかかるため、北西壁は確認されていない。竪穴住居跡は隅丸プラン



第61図 SI-001住居跡と出土遺物

をもつため各辺長を測ることができないので、出入口部から炉方向の竪穴中軸線上での対応する壁間の距離を主軸長とすると、この住居の主軸長は推定で5.5~5.6mほどとみられる。主軸と竪穴中央で直交する線上での壁間距離は5.2mである(ともに遺構検出面で計測)。全体の平面プランは、わずかに胴の張る隅丸長方形だったとみてよいだろう。検出面からの深さは40~50cmで、床面は全体的によく踏みしめられていた。壁溝はない。

床面に8個のピットがあり、うち4個は柱穴として問題ない位置にある。柱間距離は主軸方向が3.3m、直交する方向では2.8mである。穴の深さは30~60cm、穴の口径は4個のうち3個は30cm前後と一定だが、残り1個は50~60cmと大きく、さらに別のピットと重複している。ほかに床面中央付近に浅い円形のピット、出入口側の壁際に2個があり、うち北東側のもの(P3)は径40cm、深さ50cmほどのしっかりした掘りこみで、出入口の施設に関係するピットの可能性がある。炉は床面中央より北東に片寄った位置にある。

出入口側の壁際で台付甕が3個体出土している。うち1個は小型甕である。大型の2個は完形だが、出土時には胴部と台部に分離していた。小型の1個は台部が打ち欠かれ、台の裾3/4周ほどの破片を欠失する。小型甕は、ほぼ床面直上で、倒立して出土した。大型の2個も床面に近いレベルで出土したが、床面との間には数cmの覆土があり、いわゆる浮いた状態での出土である。さらに、2個の台部は、共に床面より15~23cm浮いたレベルで出土している。

以上の出土状況からみて、3個の台付甕はこの住居で使われていたものが遺留されたのではなく、本住 居が放棄され、竪穴が埋没していく途中のある段階で、別の住居居住者によって意図的に投入されたもの と考えられる。投入の意図は分からないが、大型の2個は台部が分離し、小型甕も台部を欠損しているの で、容器として使用不要となったため投棄された可能性は考えられる。

ただ、小型甕は台部裾を欠くものの容器としては利用可能である。大型の1個(1)は、台とともに甕の底部も一緒に分離して容器の用をなさないが、もう1個(2)は台だけが欠け、甕の部分は底部を残しているので容器としての利用は可能である。一様に投棄されているのはいささか不可解といえよう。

台の接合部で損傷する確率は他の部位よりも高いかもしれないが、それにしても3個とも甕部は完存するのに台のみ分離している。甕の部分には全く損傷がないことからみて、竪穴内に投げ捨てられたことで台が分離したとは考えられない。投棄前に、意図的に台を分離する行為が行われたあと、竪穴の埋没途中のくぼみに置き棄てられたものと考えられる。この想定が的を射たものとしても、なぜそのようなことが行われたのか、意味、目的は不明で、何らかの祭祀目的があった可能性は考えられるが、ほかに祭祀的な遺物の出土はなく、その実態は不明である。

1 は完形の台付甕。甕部と台が分離して出土した。高さ27cm、口径16cm、最大径が胴中位よりやや上にあり、無花果形に近い立面観をもつ。口縁部は軽く外反しつつ立ち上がる。口唇端部に細棒による刺突が加えられる。胴部の下から1/3ほどの部位に粘土帯の接合痕が消されずに残り、一周している。外面の調整は、この接合痕より上では刷毛目調整、下では刷毛目の後ナデ調整され、刷毛目はほとんど消される。内面もナデられ、刷毛目は口縁部内面にわずかに残るにすぎない。加熱により外面の器肌が全体的に荒れ、胴中位以上に煤の付着が著しい。

2 は完形の台付甕。1 と同じく甕部と台が分離して出土した。高さ27.5cm、口径17.5cmと、1 とほぼ同形同大で、胎土、焼き色もよく似る。1 とほぼ同じ部位に粘土帯の継ぎ目が残り、これより以下の胴部は直線的にすぼまり、ふくらみに欠ける。口縁部の外反の度が若干強く、口唇端部の刻み目は細かい。また、

胴部以下の外面全体に刷毛目が残り、口縁部外面には刷毛目が全く残らない点なども相違点である。二次 的加熱や煤の付着の程度は2と同じである。

3は小型台付甕。甕部完存、台部は意図的に打ち欠かれたとみられる。台裾部までの1/4周ほどの破片が接合したが、ほかの破片は失われていた。台部を含めて高さ12cm、口径11cmという小型の甕で、器壁は薄い。全体に粗雑な作りで、輪積み痕が完全に消されずに残る。上下に若干つぶされたような球形の体部に、内湾しながら立ち上がる短い口縁部が付く。口唇端部には細かい押圧が加えられる。押圧された面には布目が刻されており、先端に布を巻いた細棒が使われていることがわかる。頸部と胴下半部、台部(いずれも外面)に縦方向の刷毛目が残る。その他の部分及び内面はナデ調整される。加熱を受け、胴外面と口縁部内外面に煤が付着している。

4 は甕の口縁部付近1/4周ほどの破片。口唇部に刷毛目工具による刺突が加えられる。刷毛目は頸部外面にのみ見られる。内面は全体に丁寧にナデられ平滑、胴部外面は細かくヘラケズリされたままでやや粗い仕上がりである。

5は小型器台の柱状部の破片で、外面に縦方向の刷毛目が残る。

6は小型の台付甕の完形の台部で、裾径は4cmと小さい。この台に見合う甕部は見いだされていない。内外面とも細かく刷毛調整されている。外面に煤が付着している。

7 は小さな盃状の土器破片で、器壁は薄い。内外面とも黒色で、ヘラミガキされて光沢をもつ。台が付いていたのかどうか、全体の器形は分からない。

8もミニチュア土器で、深めの椀形の器形をもつ。器壁は薄く、外面が丹念に調整されている点が手づくね土器と異なる。内面に粘土帯積み上げ痕が残る。

9は小型甕の底部破片である。

10、11は北関東系弥生土器の甕の口縁部破片で、外面と口唇部にも縄文が施文される。

12は土器片の破砕面を調整した円盤で、穿孔はみられない。外面に刷毛目は見られず、比較的丹念に調整されているが、器壁の厚さなどからみて甕形土器の胴部破片を利用したものだろう。

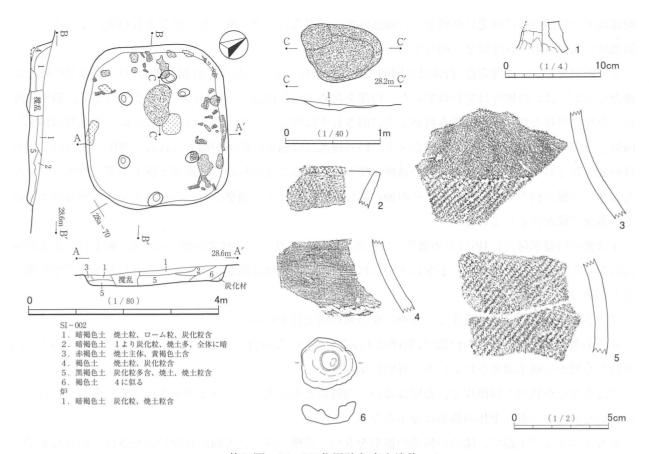
13は磨石である。青みを帯びた凝灰岩質の自然礫で、打割面を除く自然面はすべてよく磨られ、滑らかである。

SI-002 (第62図、図版39·47)

北側斜面に面するSI-001、005、南側斜面に面するSI-003、004とに囲まれ、その中心に位置する。主軸を北西に向け、主軸方向に長い隅丸長方形の平面プランをもつ。主軸長3.4m、短軸長3 m、北西壁では検出面から床面までの壁高は40cmほど、台地先端側の南東壁では20cmほどしか残っていなかった。壁溝はめぐっていない。

床面には主柱穴 4 個が整然と配置される。柱間距離は長軸方向が1.8m前後、短軸方向は北側が1.5m、南が1.3mとバラツキがある。各穴は口径25cm内外、深さは40~60cmである。南東壁中央部の壁際に深さ20cm、口径25~30cmのピットがある。出入口の施設に関係するものであろう。床面中央より北西寄りに炉があった。床面の掘りこみは 0.8×0.5 mで、長軸方向に長い不整な長円形の掘りこみである。炉の北側に径30cm弱、深さ $7\sim8$ cmの浅い窪みがあった。深さからみて柱穴とは考えられず、性格は不明である。

床面には、焼土と炭化材がかなり多く堆積していた。壁際沿いに多く、特に北東壁に沿って多くの炭化 材が遺存していた。上屋が消失していることは確実である。



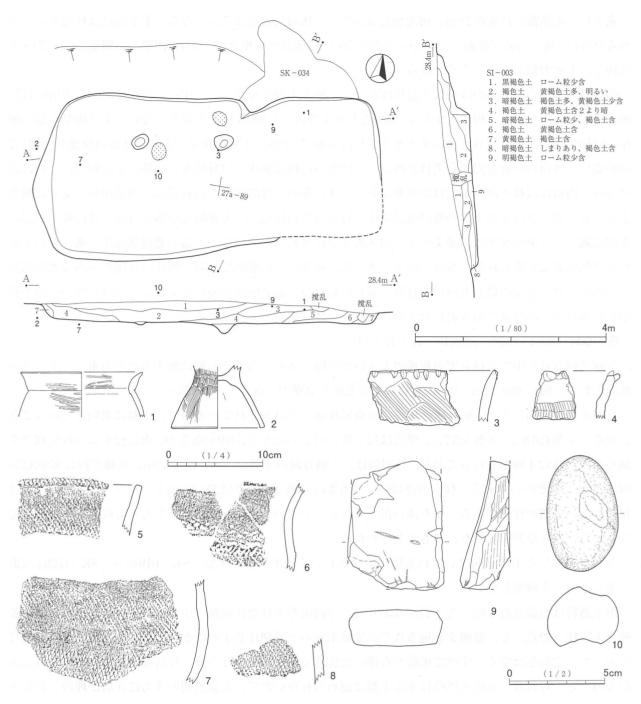
第62図 SI-002住居跡と出土遺物

出土遺物は土器の細片50点のみで、そのうち縄文土器が12点(うち9点は条痕文系土器、2点は浮島系の破片)、須恵器の微細片(杯の口縁部)1点のほかは弥生土器ないし古式土師器の破片であった。細縄文やS字状結節文をもつ破片が5点、これらは弥生時代終末期の土器とみてよいと思われる。ほかには高坏脚部の破片2点、台付甕の台部の破片があり、これは古墳時代に下るものかもしれないが、いずれも細片であり、確言はできない。1は高坏柱状部の小破片。比較的小型の高坏で、杯部内面と脚部外面はよくへラミガキされている。2は弥生土器の甕の口縁部細片。外面と口唇端部に細縄文が施される。3は摩滅して分かりにくいが縄文帯とその上部を限るS字状結節文が残る。5は3と同一個体の可能性のある壺の胴部破片である。4は縄文帯の上部を限るS字状結節文が残る。6は径2.5cmほどの円盤形土製品で、中央に径8mmほどの窪みがある。手捏ね土器の一種かもしれない。

SI-003 (第63図、図版39 · 40 · 47)

遺構が検出された際、普通の竪穴住居としては東西に異常に長い落ちこみだったので、2軒の竪穴の重複が想定された。このため、切り合い関係を把握するため東西に土層ベルトを設定して発掘が行われたが、土層観察の結果切り合いは確認されず、東西に細長い1軒の竪穴住居跡と結論されている。出土遺物から弥生時代終末から古墳時代はじめころの住居とみられるが、この時期にはあまり見られないプランであり疑問ももたれる(ほかの時期にもあまり例はない)。

竪穴の北壁、北西コーナーから3.6mほどのところにくびれた部分があり、ここが本来の北東コーナーだった可能性は高いと思われる。この部分より東の床面にも硬化面が見られたというので、東半部も居住範



第63図 SI-003住居跡と出土遺物

囲だったものとみられ、当初西半部のみの通常規模の竪穴だったものが、ある時期に拡張されたと考える のが最も妥当性があると思われる。

このように考えると、当初の竪穴(西半部)は長軸をほぼ東西方向にとり、長軸長4.4m(推定)、短軸長3.4mの、通有な隅丸長方形プランをもつやや小型の竪穴住居だったとみられる。壁の高さは最大で50cmあった。床面に径30cm前後、深さ20~30cmのピットが2個あったが、通常の柱穴の位置にはなく、出入口施設に関係するものでもなさそうである。焼土の堆積も2か所見られ、このうち床面中央よりやや北に寄った位置のものは、床面への掘りこみはないものの、位置からみて炉の痕跡かもしれない。

東半部(拡張部)は東西2.6m、南北軸長3 mで、全体の長軸長は7 mとなる。東半部には柱穴も炉も認められない。何のために拡張したのかも分からない。拡張部の東壁とSI-004の西壁との間隔は $60\sim70$ cmと近接し、上屋の裾が重複しそうである。

出土遺物は2点の石器のほかは土器片ばかりで、縄文土器片を除くと、すべて弥生終末から古墳時代初頭の土器片とみられる。細片ばかりで、微細なものを含めても180片ほどと量も少ない。1は坩形土器の細片。口縁部内外面と胴部外面はヘラミガキされ滑らかで、全体に丁寧な作りである。2は台付甕の台部1/2周の破片。外面のみ縦方向の刷毛目が残る。3は甕の口縁部細片。口唇端部に細棒による刺突、外面は斜め方向、内面には横方向の刷毛目が顕著である。4は甕の口縁部細片。口唇端部に内外面から交互に刺突が加えられる。5は弥生土器の甕口縁部細片。外面及び口唇端部にも細縄文が施される。6は弥生土器の甕胴部破片。2条のS字状結節文の下に羽状縄文が付される。7は弥生土器の甕胴部破片。縄文帯の上端がS字状結節文で限られる。8は、胎土、焼き色、縄文が5に酷似し、同一個体の可能性がある甕胴部細片である。9は現在の砥石と同様の材質の砥石の破片で、表裏両面が使われている。10は自然の小礫を利用した叩石で、両端部に叩き痕がわずかに残る。全体に加熱を受けている。

SI-004 (第64·65図、図版40·41·47·48)

今回発掘された中では最も平面規模の大きい住居跡である。南側斜面部に面するため南東コーナー部が確認されず、SK-033とSK-019の重複により北壁と東壁の一部が失われている。

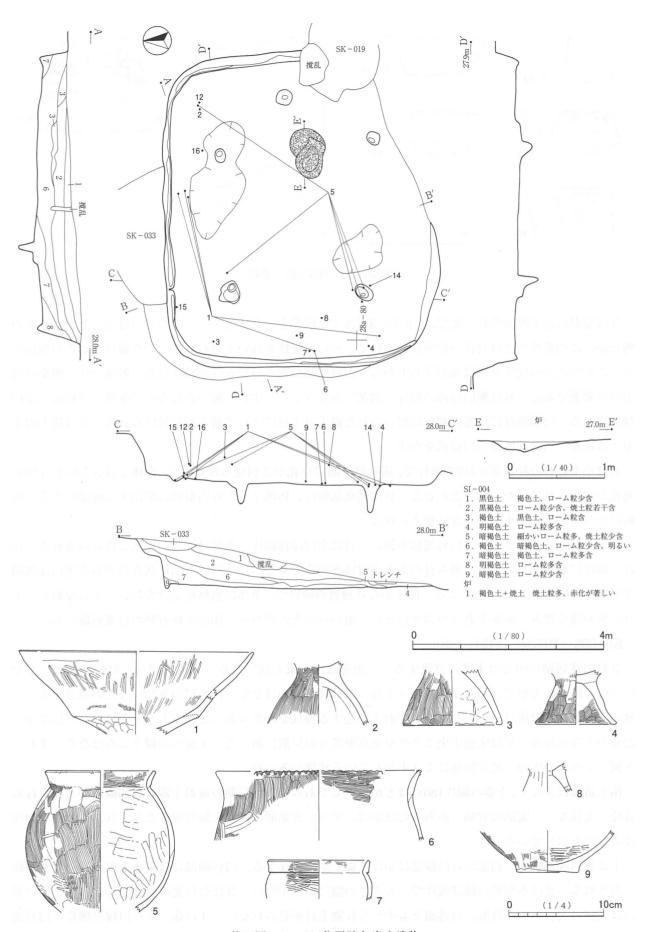
長軸を東西方向にとり、炉は床面中央より東に片寄って設置されているので、主軸は東向きということになる。主軸長6.8m、短軸長5.7m、壁高は最も残りのよい北壁では0.9mあるが、南に行くにつれて高さを減じる。主柱穴4個がそろっており、柱間隔は、主軸方向の北側で3m、南で3.3m、短軸方向は東が3.2m、西が2.8mと不ぞろいである。柱穴の径はいずれも30cm前後で、深さは20~60cmとバラツキが大きい。炉は短軸方向の東側の柱間にある。やや深い掘りこみと浅いものが重複しており、どちらも底面が焼けていることから、掘りなおして使われたものと思われる。

なお、重複した土坑 2 基はいずれも住居より新しいもので、壁と床面(SK - 019のみ。SK - 033は床面に達しない)を破壊している。

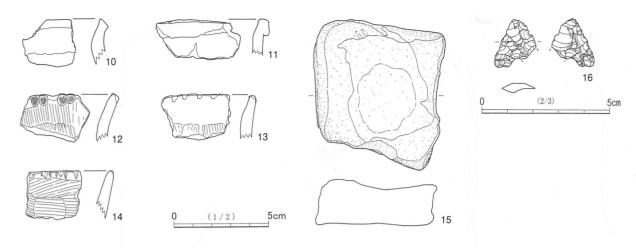
出土遺物は石器 2 点を除くと土器片ばかりで、今回調査された住居跡の中では最も多量に出土している。 縄文土器片(22点)と、細縄文を施された弥生終末期の土器細片若干のほかは、すべて古式土師器の破片 であった。完形品はなく、すべて床面から浮いた状態で出土しているので、住居廃絶後に自然に流れこん だものと考えられる。五領式以降に下る土器は認められないので、五領式期のうちに住居が埋没したこと が確実で、この住居の存続時期を弥生終末期から五領式期のあいだに比定することができる。

1は大型の高坏の杯部破片で、口縁部の破片と体部下半部と接合しないが、胎土、焼き色などからみて同一個体に間違いないので図上復元した。体部の低い位置に明確な稜があり、そこから一旦外反しつつ立ち上がり、口縁部近くでは逆に内湾気味になる。内面は丁寧にヘラミガキされ光沢をもつ。外面は口縁部近くのみヘラミガキ、以下はナデられ、部分的に刷毛目が消されずに残る。

2は台付甕の台部破片。甕部との接合部の割れ口が、破損後に調整されており、上から見ると割れ口が 円形になっている。袴状に台中位がふくらむ側面形をもつのが特徴である。3は台付甕の台部1/4周の破 片。外面には加熱によるひび割れが目立つ。4は台付甕の台部1/2周の破片。これも2と同じく甕部との接 合部での割れ口が調整された感じがある。内外面ともに刷毛目が残る。



第64図 SI-004住居跡と出土遺物



第65図 SI-004の出土遺物

5は完形に近く復元された甕で、胴下半1/3周ほどと底部を完全に欠く。このため台付だったかどうか不明だが、この遺跡の甕は台付の比率が高いので、その可能性が高いと思われる。やや縦長の球形の胴部から、くの字状に外反する口縁部が立ち上がる。口唇端部に細かい刻み目が施される。外面全体に細かい刷毛目が顕著である。6は甕口縁部の破片。頸部であまりくびれずに、緩やかなカーブを描いて外反する口縁部に至る。口唇端部には器面調整に用いられた刷毛目工具によって刻み目が付けられる。7は坩形の小型土器細片。口縁部は複合口縁状をなす。

8は小型器台の柱状部1/4周の破片で、現存部下端に穿孔が2個見られるので、全体では3ないし4個の 丸孔が空けられていたものと思われる。9は甕底部破片、体部下半から円盤状に突出する底部に至る。内 面にはヘラ先によるナデが丹念に加えられる。

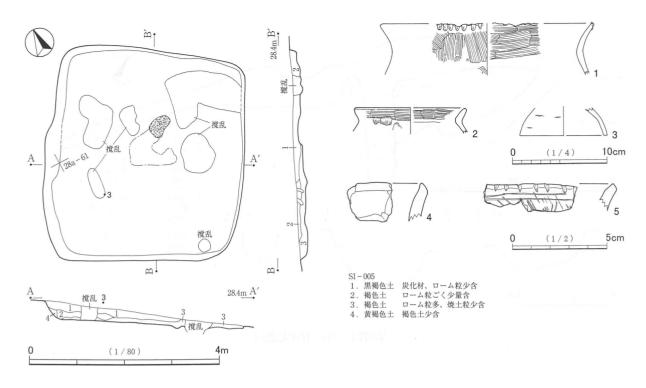
10は壺(?)口縁部細片、口唇端部が鋭い。11は壺口縁部細片。端部は複合口縁状に折り返される。12 は、端部に布目のしるされた刻み目のある甕口縁部細片である。13、14は端部に刻み目のある甕口縁部細片で、14の刻み目は ヘラ先による。15はかなり硬質の砂岩で、全体に加熱を受けもろい。平らな面の一方は中央が浅く窪み、何かを磨りつぶす台として用いられたのだろう。16は黒曜石製の打製石鏃である。

SI-005 (第66図、図版41·48)

5軒の住居跡の中では東端に位置する。主軸をほぼ北東方向にとる。主軸長4.5m、短軸は4.0m、ややいびつな隅丸長方形で、わずかに胴張りする。壁は高さ20cmほどで、西北壁のみ40cmほどの高さがあった。柱穴、貯蔵穴、壁溝は認められない。床面まで達する攪乱がかなりあったが、もともと柱穴などはなかったものとみられる。炉は床面中央よりやや北東壁寄りの位置にあった。床面への掘りこみはなく、まわりと同一レベルの床の一部が加熱により赤化している状態であった。

出土遺物は少なく、土器の細片180点ほどがすべてであった。弥生期の壺形土器の肩部破片かとみられる破片(文様なし。実測図省略)があったほかは、すべて五領期に属す土師器破片とみられ、この住居の埋没の時期を示している。

1は甕口縁部破片。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。口唇端部には斜め方向からの刺突が繰り返される。2は小型甕口縁部破片で、大きさの割に器壁が厚い。3は台付甕の台部破片。高さが低い割には底径の大きいのが特徴、内外面ともナデられ刷毛目が見られない。4は壺(?)口縁部細片。口唇端



第66図 SI-005住居跡と出土遺物

部が鋭く立ち上がる。5は甕の口唇部細片。口唇の上方から刷毛目工具の角によって刻み目が付けられる。

3 溝

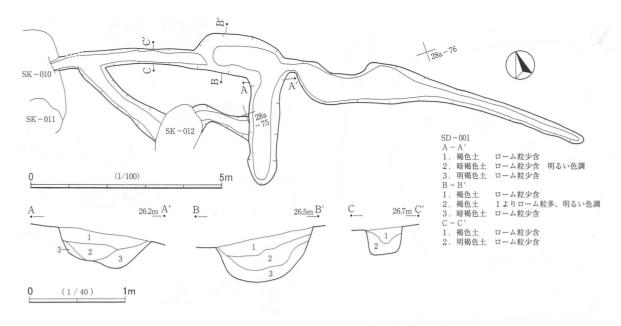
発掘区東端の斜面部で、やや複雑に分岐する溝 1 条(SD-001)が出土している(第67図)。東側へ突き出た舌状台地の先端部の尾根筋上に掘りこまれている。西北西から東南東方向に、やや弓なりになって東西14mにわたって続く。幅は平均 $40\sim60$ cm、部分的にふくらみ 1 mほどの箇所もある。主溝の中央部で、南に向かって 3 mほどの溝が派生する。さらにこの溝の南端と主溝の西端近くを結ぶ溝も掘られ、全体では 4 の字形の平面プランをもつ。

出土遺物は時期不明の土師質の土器細片 4 点のみで、溝の掘削時期、また性格も不明とせざるを得ない。 底面が硬化していないので道路の可能性は低い。溝の西端に性格不明の土坑SK – 010があり、枝溝はSK – 011、012とも重複しており、これらとの関係も考えられるが、具体的な関係は分からない。主溝だけ見れば、道の可能性とともに何らかの排水目的の可能性が高いように考えられるが、断定はできず、時期、性格とも不明としておきたい。

4 土坑

炉穴 (第68図、図版42)

縄文時代早期の炉穴3基は、台地北側の緩斜面部にほぼ一列に並んで検出された。これより北側は急斜面になるから、傾斜変換線に沿って営まれていることになる。計画的な配置状況といえるが、既存の施設との関係や風向きなどが考慮されたためであろう。



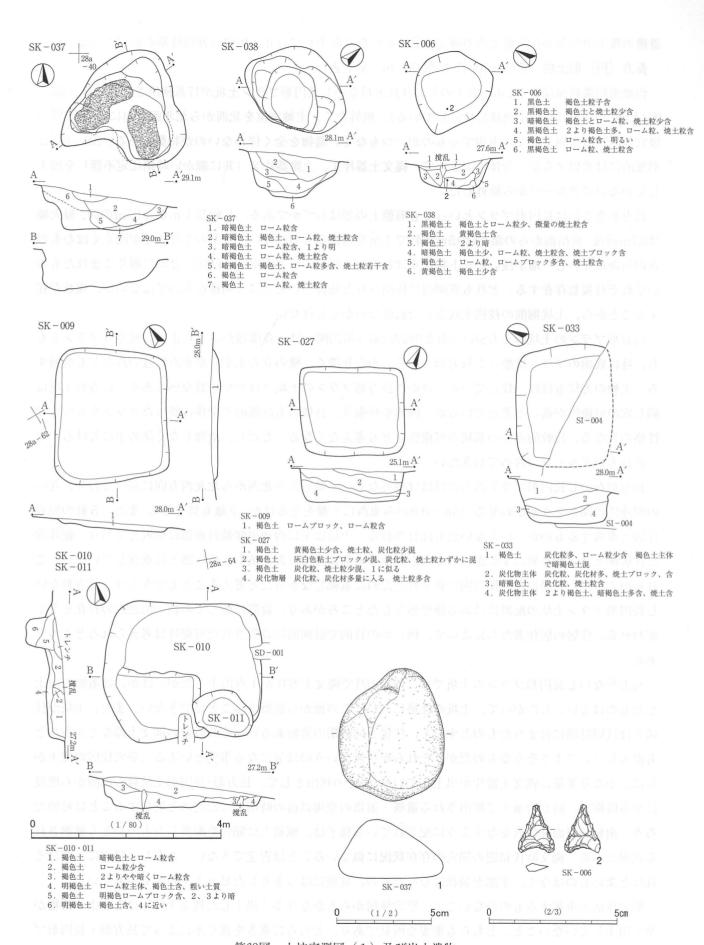
第67図 SD-001実測図

SK-006は 3 基のうち東端にあった。不整な円形で、長軸を北西方向にとり、長軸長は1.65m、短軸は1.5mほど、検出面からの深さは最大で約70cmである。床面はほぼ平坦で、北から南側にゆるやかに傾斜し、ピットなどは認められない。南側の壁面が強く赤化し、炉穴として機能していたことをうかがわせる。ただ、覆土中に焼土粒が含まれていたものの、焼土の明確な堆積は認められなかった。覆土上部から石鏃 1 点が出土したが、ほかに土器などの出土はなかった。土坑の時期は不明だが、SK-037、038との共通性からこれと同時期の可能性が高い。本土坑出土の石鏃(第68図 2)は、無茎のチャート製打製石鏃である。

SI-037は発掘区の北西端で検出された。 2つの炉穴が重複したかとみられる状態を示し、焼土の堆積範囲が 2 か所に分かれる。全体では丸味をもった不整な三角形状の平面プランをもち、南辺には 2 穴の重複を示すようなくびれが認められる。東西の最大幅 2.6 m、南北も最大で 2.4 mに達する。深さは南壁で 90 cmある。西側の焼土堆積は 1.4×0.6 m の範囲に広がり、その西南端の壁面は激しく赤化している。東側の焼土は 1.1×0.5 m の範囲で、その南端はオーバーハングした南壁に接している。総じて南壁は急な立ち上がりで部分的にオーバーハングし、壁面下半部はよく焼けている。これに対し北壁の立ち上がりは緩い。焼土上部から火に罹った叩石 1 点が出土し、ほかに覆土中からは土器の細片 1 点が出土しただけであった。文様等はっきりしないがおそらく縄文早期末ころのものと考えられる。叩石(第68図 1)は自然礫で、火を受けている。きわめて堅い材質で、3 つの側面は磨られて滑らか、端部は叩きに利用されている。

SI-038はいびつな楕円形で、長軸を西南西から東北東方向にとる。長軸長2.3m、最大幅は1.7m、最も深いところでほぼ1mの深さがある。中央部が一段低く、東西壁は途中に段差があり、小さなフラット面が形成される。南壁の立ち上がりは急で、北側は逆に緩やかである。覆土の最下層部に焼土粒の混入が目立ち、南壁下半部は火を受けている。出土遺物はない。

以上3基は立地が共通し、平面規模も大きく、1 m前後の深さがあって南壁がよく焼けていることなど 共通点が多く、同じ目的、機能をもっていた可能性が高い。出土遺物は皆無に近く、時期判定も正確にはで きかねるが、他遺跡の事例などからみて、縄文時代早期後半ころの炉穴の可能性が高い。本遺跡では、他



第68図 土坑実測図(1)及び出土遺物

遺構の覆土中などから条痕文系の縄文土器片がかなり出土しており、炉穴の使用時期が推定される。

長方(円)形土坑(第69·70図、図版43~46、第1表)

台地南側緩斜面部を中心に、表1のとおり長方形ないし長円形プラン土坑が17基検出されている(SK - 004と042の2基は台地中央部に位置している)。例外なく、主軸方位を北西から北北西方向に向け、5軒の竪穴住居のほか他遺構とは重複するものが一つもなく、遺物を全く伴わないのが特徴である。SK - 015は形態的には類似するが、全体に大きめで、縄文土器片1、土師器片2(共に細かい時期比定不能)を出土しているのでグループから除外した。

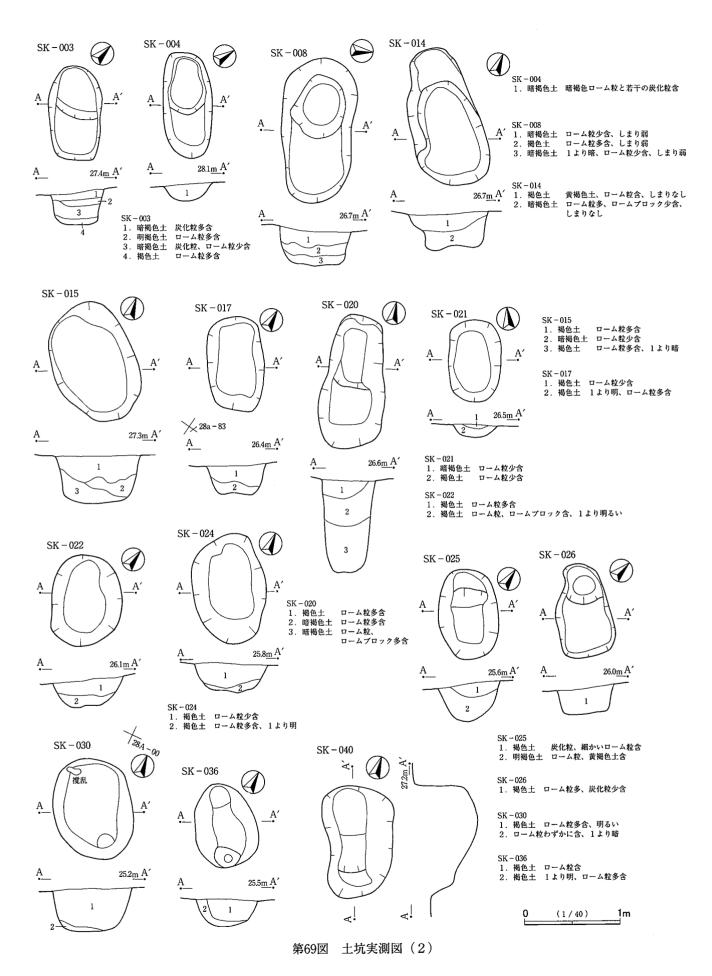
長方形あるいは長円形プランといっても形態上の差はわずかである。長軸長1mから1.5mの間、最大幅は0.7m前後、検出面からの深さは0.5m内外で1mを超えるものはない。底面の半分ほどが浅くくぼむもの、底面の両端ないし一端が浅いピット状にくぼむもの、短辺の一方の壁が階段状に2段に掘りこまれたものがそれぞれ複数存在する。どれも意図的に作出された施設といえるほど明確なものではないが、複数存在することから、土坑掘削の技法上残された痕跡なのかもしれない。

長方形プランの土坑のうちSK-031と042の2基(第70図)は、長側辺がふくらまない長方形プランをもち、特に底面のプランは整った長方形となる。かなり深く、壁の立ち上がりが垂直に近い点なども共通する。主軸の方位もほぼ一致している。ほかの長方形プランの土坑とはやや異質な感もある。長方形土坑は陥し穴の可能性が高いと考えているが、四隅が角張り、長側辺も直線的で全体に整ったプランをもつので、性格の異なる、比較的近年の墓坑の可能性なども考えたくなる。ただし、遺物もなく決め手に欠けるので、一応長方形グループに含めておきたい。

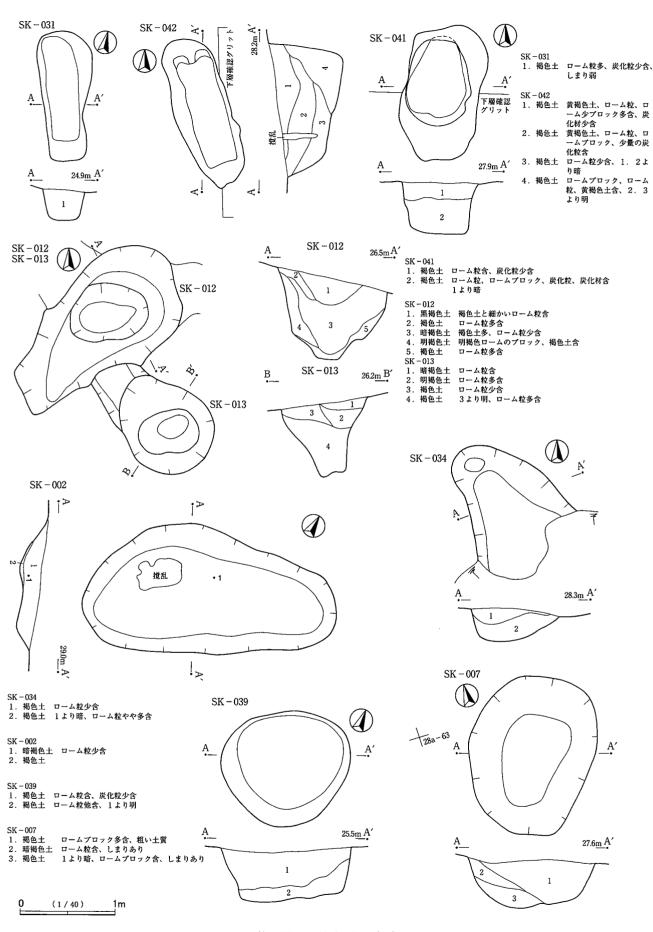
長方形ないし長円形プランのものはほぼ例外なく、主軸方位を北西から北北西方向に向けており、互いの関連性の深さをうかがわせる(SK - 008のみ東西に主軸をとるほか、立地も異なる)。また、5軒の竪穴住居と重複するものが一つもない点も注目される。土坑は主に台地南側緩斜面部に位置しており、総体的に住居跡とは立地を異にするが、いくつか台地中央部に営まれた土坑も、住居跡とは重複していない。これらの土坑が、住居の存続期間内に営まれたために重複しなかったと考えることもできよう。長方形ないし長円形プラン土坑の配置にはある種整然としたところがあり、設置に際しての統一的意志の存在をうかがわせる。住居の居住者たちによって、何らかの目的で計画的に設置された可能性は考えられるところである。

長方形ないし長円形プランの土坑では、SK-021で縄文土器片が1点出土したが、ほかには遺物の出土したものはない。したがって、土坑の性格についてこの面から推察することはできない。また、土坑が住居とほぼ同時期に営まれたものとすると、住居と同時期の遺物あるいはそれ以前の縄文土器などが多少とも混入していてよさそうなものだが、それらが皆無というのは気になる事実といえる(竪穴住居の覆土からは、かなり多量に縄文土器片が出土している)。その理由として、長方形・長円形土坑群の掘削から埋没に至る時期が、同じ台地上で検出される遺構・遺物の登場以前の時期だったためと解釈することは可能だろう。南側緩斜面部に列をなすように配されている様子は、獣道上に陥穴を配置したものかとも推測される状況である。縄文時代初期の陥穴の存在状況に似ていることは否定できない。ただし、陥穴にしてはそれほど深いものはなく、下部が袋状になったもの、坑底にはっきりしたピットを残すものもない。

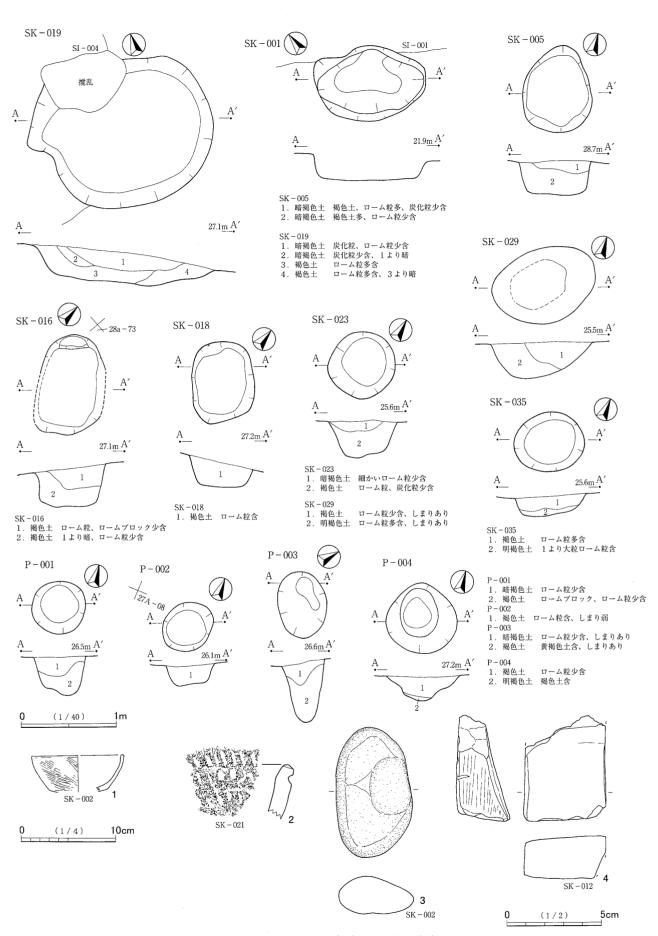
竪穴住居と重複するものがないこと、竪穴住居からもかなり多く出土した縄文土器片はもとより遺物が 全く出土していないこと、どちらも重要な所見であり、どちらに重きを置くかによって長方形・長円形プ



— 111 —



第70図 土坑実測図(3)



第71図 土坑実測図(4)及び出土遺物

ラン土坑の時期、性格に関する見方が大きく異なってくる。

どちらを採るべきか決め手に欠けるが、遺物が皆無なことは看過しがたい要素といえる。混入遺物がないのは、土坑が掘削される以前、また掘削から自然に埋没するまでの期間、土坑分布範囲には人工的遺物が皆無だったからと考えるしかない。なぜそうなのかといえば、土坑造営期以前にこの台地上において人間の生活がなかったからと解するのが最も自然である。

発掘区内で最も古い遺構は縄文早期の炉穴で、条痕文系土器を伴う。これ以前の遺物としては撚糸文土器の破片が10点ほど採集されているが、同時期の遺構は伴わない。縄文早期後半以前の生活の痕跡はごく微弱であり、長方形・長円形土坑群の形成がそのころに行われた可能性は十分考えられるものと思う。

なお、SK-041は長円形プランをもつが、陶器片や生々しい炭化材が出土しており、新しい時期のものと思われる。

SK-021で出土した縄文土器は、口唇部に刻み目、口縁部外面にヘラ先による刺突が加えられたもので、 浮島系土器であろう。

その他の土坑 (第68・70・71図、図版42・45・46・48)

炭化物を含む方形プランの土坑が3基検出されている(第68図)。SK-009と033は台地中央部にあり、SK-027は台地南辺の緩斜面部にあった。SK-033はSI-004の覆土を一部切りこみ、SK-009の覆土中からは土器細片 4点(縄文 1、土師器 2、須恵器 1)が出土している。須恵器は奈良・平安期の杯底部であり、これらの土坑の時期がかなり下ることを物語る。おそらく近世以降の炭窯とみてまちがいなかろう。

SK-009は長軸長2.7m、短軸2.35m、台形状の平面プランをもつ。壁は10cmほどの高さしかなく、焼土 粒、炭化物を含むわりには床面、壁面とも火を受けた痕跡は認められなかった。

SK-027は長軸長2.2m、短軸長1.8mのやや台形状の長方形プランをもつ。深さ70cm、底面はローム層を抜け白色粘土層に達する。覆土中に多量の炭化物、焼土を含み、最下層は純炭層とでもいうべき状態であった。ただ、壁面、床面とも火を受けた様子は認められていない。

SK-033はSI-004の北壁を切りこんでいる。深さ90cmほどあり、平面は推定で 2.5×2.1 mほどの隅丸方形プランをもつ。覆土中に多量の炭化材を含み、壁の下部では炭が地山に食いこむような状態で出土している。

以上3基は、他遺跡での検出例などからみて、比較的新しい時期の炭窯跡と考えられる。

SK-010 (第68図) は軸長 3.4×2.7 mという大きな土坑で、隅丸長方形プランをもつ。溝SD-001と切り合い、覆土の状態からこれより新しいという。また、南東隅部にSK-011が重複しているが先後関係は不明である。床面南西隅が方形に一段くぼむが、別遺構の重複ではなさそうである。出土遺物はなく、時期、性格とも不明の遺構とせざるを得ない。SK-011 (第68図) は不整な長円形で、近くに同じようなプランをもつSK-012と013 (第70図) がある。いずれも深さ $70\sim90$ cmほどと深い点も共通するが、時期の分かる遺物を伴わず、時期、性格とも不明である。SK-012では砥石(第71図 4)が出土している。側面に櫛歯状工具痕が見られるので近世以降の所産と思われる。

SK-002(第70図)は長軸長2.6m、最大幅1.3m、深さ0.3mの不整な楕円形プランをもつ。若干の遺物が出土している。第71図の1は小型椀形土器破片でミニチュア土器に近い大きさだが、器壁は薄く、外面は入念にヘラミガキされている。内面は加熱により剥落が著しい。五領期ころの土器とみられる。3は磨石で、自然の小礫だが全面的に磨られ滑らかになっている。ほかには土師器片6点、縄文土器片(?)2点

第1表 中久喜遺跡・土坑一覧表

第Ⅰ表 ┗	一八台退 跡		見衣				(単位:m)
遺構番号	長軸長	最大幅	深さ	平面形	方位	出土遺物	特記事項
SK - 001	1.2	0.8	0.25	長 円 形	北西		SI-001に重複、SI-001に先行
SK - 002	2.65	1.3	0.3	"	東北東	小型坩1、叩石1、土器片9	
SK - 003	0.95	0.55	0.35	隅丸長方形	北 西		底面に段差
SK-004	1.1	0.5	0.15	隅丸長方形	西北西		底面に段差
SK - 005	0.9	0.75	0.45	ほぼ円形	北北西		覆土に少量の炭化粒
SK - 006	1.7	1.6	0.6	不整円形	北西	石鏃 1	壁面の一部加熱により赤化
SK-007	1.65	1.3	0.5	長 円 形	北東		人為的埋め戻し
SK - 008	1.5	0.75	0.4	隅丸長方形	北		底面に段差
SK - 009	2.3	2.35	0.2	方 形	北東	土器片 4	覆土中に焼土、炭化粒
SK-010	3.35	2.9	0.65	隅丸方形	東西		SD-001、SK-010と重複、SD-001 より新しい
SK - 011	1.35	0.9	0.7	長 円 形	西北西		SK-010と重複
SK - 012	2.15	1.1	1.1	不整長円形	北東	縄文5、土師?1、砥石1	SD-001と重複、SD-001より新しい
SK - 013	1	0.9	0.8	ほぼ円形	北西		SD-001と重複、SD-001より新しい
SK - 014	1.45	0.8	0.4	不整長円形	北北西		一端が階段状(2段)
SK - 015	1.25	0.9	0.5	長 円 形	北西	縄文1、土師1	
SK - 016	1	0.75	0.6	長円形	北北西		一端が小さくくぼむ
SK - 017	1	0.6	0.35	隅丸長方形	北北西		
SK - 018	0.85	0.65	0.3	隅丸方形	北東		
SK - 019	1.7	1.5	0.4	隅丸方形	東西		SI-004と重複、先後不明
SK - 020	1.4	0.7	0.95	長円形	北	1734471	壁垂直で深い、底面に段差
SK - 021	0.85	0.55	0.1	隅丸長方形	北		至至区(冰、(公園)-(人工
SK - 021	1.05	0.75	0.3	長円形	北西		
SK - 023	0.7	0.73	0.4	円形	40 13		覆土中に少量の炭化粒
SK - 024	1.15	0.7	0.35	長円形	北北西	·	18上十七万里が八七年
SK - 024	0.95	0.65	0.33	長円形	北北西		底面に段差
SK - 025	1	0.63	0.4	隅丸長方形	北西		底面に段差、壁垂直
SK - 020	2.2	1.9	0.65	方 形	東北東		選出中に多量の炭化物、焼土
SK - 027	欠番	1.9	0.03	7) 10	米北米		後上午4〜9重シルドに初、加上
SK - 029	1.1	0.8	0.4	格 円 形	東北東		
SK - 029	1.1	0.8	0.4	作 口 ル	米北米	図面には土器片(縄文・土師)出土	
SK - 030	1.05	0.8	0.5	長円形	北北西	の注記あるも現物なし	床面に浅いピット状のくぼみ
SK - 031	1.35	0.4	0.35	長 方 形	北北西		
SK - 032	欠番		0.05	+ "	中小牛		第上由上名具不巴拉斯 域上
SK - 033	2.4	?	0.95	方 形			覆土中に多量の炭化物、焼土
SK - 034	?	1.15	0.35	不整長三角形	北北西		SI-003と重複、先後不明。一端に段
SK - 035	0.7	0.65	0.25	ほほ円形	北東		〒441~24、ノルマフ
SK - 036	0.9	0.7	0.3	精 円 形	北 西	を用去す (元子ンロロ) ロファマ	両端に浅いくぼみ
SK - 037	2.4~2.7	2.7	1.1	不整三角形		縄文1 (所在不明)、叩石1	炉穴2基の重複
SK - 038	2.3	1.7	0.95	不整楕円形	東北東		覆土下層に焼土粒
SK - 039	1.3	1.2	0.6	不整楕円形	北東		覆土に微量の炭化粒、壁垂直
SK - 040	1.2	0.75	0.7	隅丸長方形	北北西	L BELL LAW (American Mark)	一端が階段状(2段)
SK - 041	1.4	0.8	0.65	隅丸長方形	北	土器片一括(所在不明)、炭化材	一端が階段状(2段)
SK - 042	1.6	0.6	0.75	長 方 形	北北西		一端に浅いピット2個
					1		
P-001	0.55	_	0.4	円 形			
P-002	0.5~0.55	_	0.2	円 形			
P-003	0.7	0.5	0.65	長 円 形	東西		
P-004	0.7	_	0.25	円 形		土師1	

などが出土しているが、いずれも混入品とみられる。奈良・平安期の須恵器杯底部破片も1点出土しており、遺構の時期はこの時期以降に下る。遺構の性格は不明である。

SK-034 (第70図) はSI-003に重複するため全形は不明だが、SK002に似たプランをもっていたと思われる。現存長1.4m、出土遺物はない。

SK-007、039(第70図)の2基はほぼ円形プランの、比較的大型の土坑である。007は 1.7×1.3 mのやや長円形で、覆土は西から東に一気に埋め戻されたかとみられ、人為的に埋め戻された可能性が高い。039は径 $1.2 \sim 1.3$ mのほぼ円形で、深さ60cm、壁は垂直に近く立ち上がる。出土遺物はない。

円形プランで上の2基より小型のものにSK-001、005、016、018、023、029、035がある(第71図)。分布状況に統一性はなく、細かい平面プランも異なる。長円形に近いものも長軸方向はまちまちである。平面規模は径1 m内外で、深さは50~60cm未満である。SK-001はSI-001と重複し、これより古いことが確認されている。出土遺物は全くなく、時期、性格とも不明である。

ピット (第71図、図版46)

発掘段階で、他の土坑にくらべて小さく、掘建柱建物の柱穴としてまとまる可能性を考えてPという別個の遺構番号が付されたものである。土坑(SK)として扱ってもよいが、現場での扱いを尊重してそのままの呼称を踏襲しておく。P-001は径0.55mの正円形、深さ0.4m、P-002は径0.5m前後の円形で深さ0.2m、P-003は 0.7×0.5 mの長円形、深さ0.75mと深い。以上 3 基は発掘区南西部にあった。P-004は径0.7mと比較的大きい円形で深さ0.3m、他のピットからやや離れて存在する。台付甕の台部破片が出土している。4 基とも時期、性格は不明である。

5 グリッド採集の遺物

トレンチ発掘の段階で表土中から出土した遺物、あるいは掘削機械による表土除去後の遺構検出作業の 過程などで採集された遺物で、遺構との関連が確認できないものを一括して説明する。

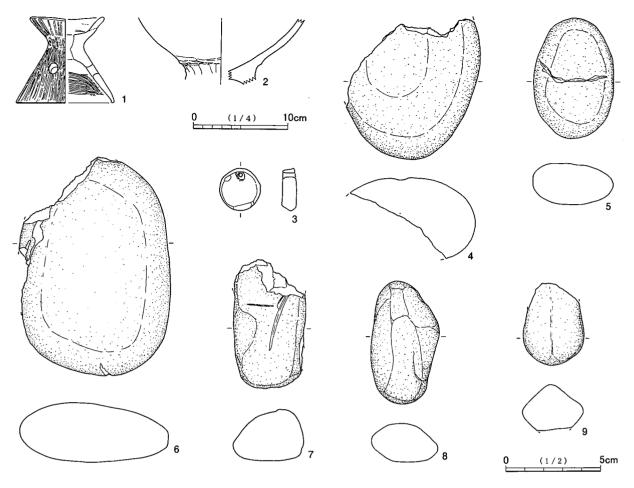
土師器、石器(第72図、図版48・50)

1はほぼ完形の小型器台で、受部のみ1/3周ほどを欠く。高さ9cm、受部口径7.5cm、裾部径10cm、受部内外面、脚部外面へラミガキ、受部と脚部の接合部のみ刷毛目が残る。脚部内面は横方向の刷毛目が顕著である。脚部中位に透かし孔3個が空けられる。

2は台付の器形だが、甕にしては調整が入念で、器壁も厚い。台の最上部には粘土紐が剥がれた痕が一周している。台部とその上の器の部分の境界に、何らかの装飾をもつ突帯が貼り付けられていたものと思われる。鉢形の、深めの体部をもつ大型の高坏なのか、台付の壺なのか分からないが、前者の可能性が高いと思われる。

3は土製の円形垂飾である。直径 $2 \, \mathrm{cm}$ 前後、厚さ $6 \, \mathrm{mm}$ の整った円形で、縁の近くに $1 \, \mathrm{か所小孔がうがた}$ れている。

4は花崗岩のやや大きめの礫で、磨りと叩きの痕があり、加熱を受けている。5は花崗岩質の堅い礫で、全体に強い加熱を受け赤く変色している。全面磨られている。6は凝灰岩質の扁平な石で、両側の平坦面及び側面全体が磨られている。両端部は叩きにも利用されている。7は砂岩質の自然の小礫だが、破砕面1面を除いて全面磨られている。加熱を受けている。8は花崗岩質の自然礫で磨られた痕がある。加熱は全く受けていない。9は花崗岩質の自然礫で、磨りと叩きに利用された痕が見られる。



第72図 遺構外の出土遺物

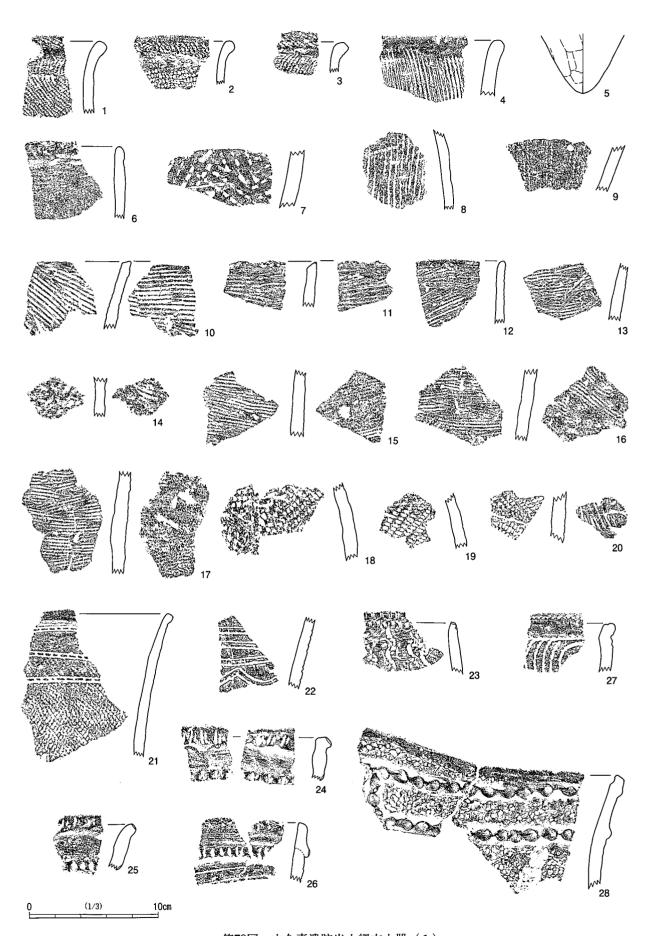
縄文土器 (第73・74図、図版49・50)

中久喜遺跡では、確実な縄文時代の遺構として炉穴3基が検出されているが、これに伴う遺物は皆無に近く、SK-037で叩石と早期末ころとみられる土器片(表面剥落のため細かい時期比定不能)が各1点、SK-006で黒曜石製の無茎石鏃が1点出土したのみであった。

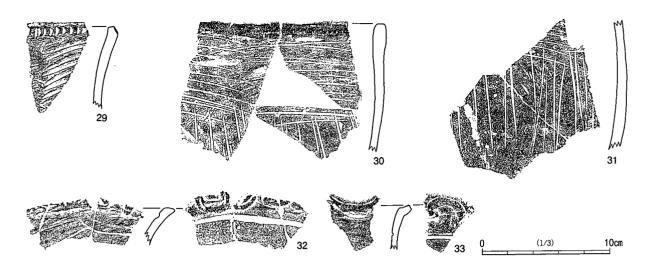
ほかに表土中や竪穴住居跡の覆土中から縄文土器片が出土している。それぞれ量は少ないものの、早期から晩期初頭までの土器片が採集されており、この台地上が長期にわたって断続的に、何らかの生活の場として利用されてきたことをうかがわせる。発掘区より西の遺跡本体部には、縄文期の遺構もかなり存在している可能性が考えられる。

第73図と第74図に縄文土器片の主なものの拓影図を示した。第73図 I ~17は早期の土器である。 $1 \sim 9$ は撚糸文系の土器片で、 $1 \sim 3$ は井草 I 式、 4 は夏島式、 9 は稲荷台式に比定される。 $6 \sim 8$ は撚糸文系の終末期の土器とみられ、 6 は無文、 7 はアナダラ属の貝殻側縁による刺突文、 8 は撚糸文の上から絡条体圧痕が施される。

 $10\sim17$ は茅山式で、表面は貝殻条痕で覆われる。裏面も条痕の施されるものが多いが、無文のもの(13)、縄文の施されるもの(14)も見られる。10、11、12の3点は口縁部の破片で、10、11の端部は内面に向かって斜めにそぎ落とされたように角張り、12は丸味をもつ。12、14、17の胎土には繊維が混入されている。



第73図 中久喜遺跡出土縄文土器(1)



第74図 中久喜遺跡出土縄文土器(2)

18~26は前期の土器である。18、19、20の3点は黒浜式で、胎土に繊維の混入が目立つ。表面には荒い縄文が施されるが、この型式に特有の羽状縄文は明確でない。20の裏面には条痕が見られる。

21は深鉢形土器の口縁部破片で、口縁下に3条の半載竹管による連続爪形文が施され、その下は細かい縄文で満たされる。器壁は薄く、口縁端部は丸くおさめられる。諸磯a式であろう。この破片と同一個体とみられる土器片は40点ほどまとまって出土しているが、ほとんど接合しない。出土位置はSK-038(炉穴)に近い北側斜面部なので、投棄された土器なのであろう。22も半載竹管による平行線文と連弧文が見られる。諸磯b式ないし浮島式と考えられる。

23は口唇とそのすぐ下に、細い角棒による連続刺突が加えられ、その下には綾繰文が施される。型式は不明だが、前期末ころの土器と思われる。

24は複合口縁の複合部の破片で、口唇部には線状の刺突が、複合部下端には丸味をもつ刺突が加えられる。25も同様の破片だが、口唇部の刺突の間隔が荒いので、別個体と分かる。複合部下端の刺突工具も異なる。26も複合口縁をもち、複合部下端に爪形の刺突が加えられる。口唇部は摩滅しており刺突の有無は分からない。胴部には横方向の2本の細い沈線が見られる。以上3点も細かい型式は不明だが前期末の土器と考えられる。

27は阿玉台式土器で、胎土に雲母や長石粒を含む。細い竹管を縦に4分割したほどの工具の先端で連続刺突し、体部外面に連弧文を施し、口唇部にも同様の刺突が1列加えられる。

28は波状口縁をもつ大型の深鉢形土器で、指頭(?)による連続圧痕の施された隆帯が、口縁部にほぼ 平行して2条つけられる。波状の頂点部では、その間に縦方向の同様の隆帯が付される。加曽利B式であ ろう。

29~31は安行式の粗製土器である。細分型式は不明だが、後期段階のものと思われる。29は比較的丁寧に調整された土器で、外面には斜め方向の条痕が見られ、内面は丹念にヘラミガキされる。口唇部外面にはヘラによる刻み目がつく。30、31は同一個体で、全体に粗雑な作りである。口縁部の下には6cmほどの幅で横方向に弧状の沈線文が、それより下は縦方向の沈線が施される。沈線の間隔は不ぞろいで、方向も一定しない。32、33は浅鉢形土器で、口縁部下の沈線の位置、太さ、施文具などがちがうので別個体と思わ

れる。32の口縁端部は平坦で8㎜前後の幅をもち、その平坦面に2個一対のC字形文が貼り付けられ、さらに沈線によるC字形文も1個見られる。口縁部下の外面にはヘラ先で粗雑な弧線が引かれ、内面には太い沈線が1条めぐる。33もこれとよく似た土器で、C字形が大ぶりで、内面の沈線が細いというちがいがある。32、33の類似資料は市原市西広貝塚で出土し、伴出土器などから安行3b式に比定されている¹⁾。注1 市原市教育委員会『市原市西広貝塚II』2005年、250頁

第4章 ま と め

第1節 郷遺跡

1 住居跡の時期その他

郷遺跡では、舌状台地上のA地点で竪穴住居跡が18軒、南側斜面下部の平坦部で1軒検出された。このうち出土土器がほとんどないSI-003と008は、奈良・平安期に属すことは間違いないと思われるが、それ以上の時期限定は不可能である。

残り16軒のうちSI-009、010の2軒は、比較的豊富な土器の様相から鬼高式期に属すことが明らかである。SI-006も、住居に伴うのは椀形土器 1 点だけだが、形態や比較的厚手の胎土などからみて鬼高期に比定するのが妥当と考えられる。006を除く3軒では長胴化した甕を伴うことなどから実年代としては古墳時代の終末期、7世紀前半から中葉にかけての時期とみられる。また、SI-019は土器による時期判定ができないが、9世紀はじめころに比定されるSI-017、018住居に切られているので、それ以前に廃絶していることは確実である。本遺跡ではそれ以前の住居としては鬼高期のものしか確認されていないので、019も同じ時期の可能性が高いと思われる。

奈良・平安期の住居はほぼすべて9世紀代に比定される。SI-016など8世紀末までさかのぼる可能性のあるものが最も古く、足高高台付の杯などを伴って最も新しい様相をもつSI-011が9世紀末から10世紀にかかるかとみられるほかは、おおむね9世紀代の中に収まるとみてよさそうである。

奈良・平安期の土器の様相は、房総においても地域差があり、編年観も分かれる。そこで、ここでは同じ物井地区内の遺跡で、本遺跡とも至近の位置にある小屋ノ内遺跡の土器編年に従っておきたい。この遺跡では283軒の奈良・平安期住居跡が検出され、編年の指標となる良好な土器セットも多数出土している。

小屋ノ内遺跡の土器群による糸川道行の編年¹⁾ によれば、「須恵器がほぼ新治窯産のもので占められる土器群」が I 群 (期)、「新治窯産の須恵器と千葉産の須恵器が混在する土器群」が II 群、「須恵器は千葉産が主体である土器群」が II 群と大別され、 I 群は 2 期に、 II 群は 4 期に細分される(II 群は 1 期)。

細分の根拠は原典にゆずるとして、暦年代については、

I期 8世紀第2四半期~第3四半期前半

Ⅰ-1期はその前半、Ⅰ-2期はその後半

Ⅱ期 8世紀第3四半期後半~9世紀初頭

Ⅲ-1期 9世紀第1四半期後半~第2四半期前半

Ⅲ-2期 9世紀第2四半期後半~第3四半期

Ⅲ-3期 9世紀第4四半期

Ⅲ-4期 10世紀

と考えられている。もとより編年も暦年代比定も流動的ではあろうが、物井地区では拠るべき最も信頼性 の高い時期区分であると思われる。

糸川編年に当てはめてみると、郷遺跡の住居のうちⅠ期にさかのぼるものは見いだせず、Ⅱ期以降Ⅲ-

4期まで、数は少ないものの以下のように各期の住居が存在する。

II期 SI-016、017(?)、018(?)

III - 1期 SI - 004、007、013

 $\Pi - 2$ 期 SI-012(?)、015、020(?)

Ⅲ-3期 SI-001、014

Ⅲ-4期 SI-011

各住居に確実に伴う土器の器種も量も不足であり、上記のとらえ方もやや不確実な面はあるが、それほど大きく変わることはないと考える。

各住居の立地に時期別の大きな変化はないが、鬼高期の住居が台地中央部寄りに集中するのに対し、奈良・平安期住居はほぼ一貫して南西緩斜面部に集中する傾向があり、互いに重複するものも目立つ。

掘建柱建物は1棟も検出されなかった。台地中央部から基部にかけての平坦部が後世の削平を受けたため遺存しなかった可能性が考えられる。本来は平坦部に何棟かあったのかもしれない。台地上の発掘区内で今回確認された竪穴住居は18軒だったが、竪穴住居も本来はこの2倍近くあったと考えるのが自然であるう。

谷をはさんで西側の台地上には同時期の大集落稲荷塚遺跡があり、総計232軒の住居跡が検出されている。数量的には大きな差があるが、これは発掘面積の差に起因するもので、住居の分布密度ではそれほどの差はないように思われる。本遺跡の東、開発区域外には平坦な台地が続いており、集落の主体はそちらに広がっているものと思われる。おそらく小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡に匹敵するような大集落が展開しているはずであり、今回はその西端の一部を発掘したことになる。

今回の発掘範囲からは特別な遺構は検出されず、普通の農耕集落ととらえられる。その中で、SI-014、015の2軒からは鞴の羽口が出土しており、炉跡は検出されていないものの、9世紀後半ころ、この地に鍛冶工房があったことを推察させる資料として貴重である。

鬼高期のSI-010では、カマド上に落下した土器群の中に混じってU字形鋤先と鏡を模した土製品が出土している。同時期の我孫子市日秀西遺跡041B住居²⁾でも、カマドの両脇とカマド上で8点のU字形鋤先(完形品 3、互いに接合しない破片 5 点)がほぼ一直線上で出土しており、カマドの上方に棚が渡され、その上に置かれていたものが落下したかと思える出土状況であった。今日の神棚のようなものを考えてもよいかもしれない。同じ旧下総地域内ながらかなり遠隔の地で、同様の祭祀遺物が全く同様の出土状況で出土していることは、このような土製品を用いる斉一的な祭祀が一定の展開を示していたことをうかがわせ興味深い。

- 注 1 糸川道行「土器編年」『四街道市小屋ノ内遺跡(3)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書V-』(財)千葉県教育振興財団、2007年、145~159頁
 - 2 (財)千葉県文化財センター『千葉県我孫子市日秀西遺跡発掘調査報告書』1980年、277~281頁

2 南東斜面部の遺構の性格

郷遺跡の南東斜面部では上下2段に遺構が密集する区画があった。

斜面上部には2基の地下式坑(SK-037、040)が営まれ、その後に相接して多数の土坑が営まれた。人骨や副葬品など、埋葬の証拠となる遺物の出土はなかったが、地下式坑を取りまくように、しかも互いに

切り合うことなく掘りこまれていることなどから、中世末から近世初頭ころの墓坑群である可能性が高い。 一方、斜面下部の様相は複雑であった。まず、鬼高期の住居が1軒あり、この時期の住居立地が洪積台 地斜面の裾部にまで降りてきた類例が追加された。物井地区ではほかに古屋城跡の西側斜面下部でも同時 期の住居跡が3軒確認されている(平成19年度調査)。

中世末から近世初頭の掘建柱建物も1棟検出された。付近から内耳鍋やすり鉢の破片、砥石などが多く 検出されており、粗末ながら定住的な建物があったことは確実である。内耳鍋は完形近くまで復元できた ものはないが、個体数としてはかなりの点数が確認されるので、かなり長期にわたって居住されていたこ とは確実である。

内耳鍋は、内面に稜をもつ鉄鍋の形態を模したもの、紐状の耳をもつもののほか、板状の耳をもつものがあり、前2者が全体に丁寧な作りなのにくらべ、板状耳のものは概して粗雑な作りのものが多い。前者は16世紀代でも古いころ、あるいは15世紀後半にかかるかという時期に、後者のうち最も粗略なものは17世紀初頭に下る可能性がある。内耳鍋が掘建柱建物の居住者によって利用されていたものとすると、その居住期間はおおむね16世紀代の100年間を中心とする時間幅で考えられよう。中世の最末期に、ほぼ2~3世代にわたって、定住か季節的かは別として、下段区画が生活の場として利用されたことは明らかである。

発掘区内からは砥石や椀形滓を含む鉄滓が多量に出土し、叩打に使われた礫、あるいはその台石かとみられる石なども多く見いだされている。ある程度長期間、鉄鍛冶が操業されていたことは確実である。これらの遺物はほとんどグリッド採集された表土中出土のものか、時期不明の溝の中などから出土したものであるが、明らかに鬼高期の住居跡を中心に分布している。したがって、この住居ないし至近の場所で操業されていた可能性が高く、掘建柱建物の住人ではなく、鬼高期住居の居住者によって操業されていたとみるのが至当といえよう。いずれにしても、鉄鍛冶という特殊な作業を行うため、台地斜面の下部という居住には必ずしも好適とはいえない場所が選ばれたことは間違いないと思われる。

斜面下部の区域では土坑も多数検出された。ほとんどは性格不明だが、下段区画の東端には井戸とみられる4基のかなり大型の土坑が東西に並んでいた。最東端のSK-110では発掘時にもかなりの湧水量があり、このため土坑内に木材が遺存していた。これは明らかに水汲み場の遺構である。ほかにSK-102、103なども井戸の可能性が高く、長期間水汲み場として利用されてきたことがわかる。また、灌漑用水の水源の一つにもなっていたはずで、比較的近年まで維持されていたものと思われる。

自然の湧水点として、かなり早くから利用されてきた可能性は高いと考えられる。掘建柱建物の住人は水汲み場として当然利用していただろうし、鬼高期住居(SI-101)の住人も利用していたことは十分考えられる。水場に近いということも占地の理由であろう。水場遺構内からは奈良・平安期の土器片もかなり出土しているので、この時期の台地上の住居居住者によって利用されていた可能性も高いと考える。鬼高期及び奈良・平安期の集落と直接関係する水場遺構の発掘例として資料的価値は高い。

今回の調査では、台地南東部の傾斜がはじまりかけた部位で中・近世の台地整形区画が検出され、斜面下部の平場も同様の整形区画ではないかとみてトレンチが設定され、多様な遺構の検出につながった。地形上から通常は発掘対象外とされる場所で、古代にさかのぼる可能性の高い水場遺構が検出されるなど大きな成果が得られた。今後は、遺跡の立地に関する通念にとらわれず、遺構の所在を確認していく姿勢が重要なものとなろう。

第2節 中久喜遺跡

1 住居跡の時期その他

今回検出した住居跡は5軒にとどまるが、発掘区域が台地突端部のわずかな面積(3,100㎡)に限られ、しかも区域の大半は台地斜面部で、わずかな平坦部に5軒が集中していたことからみて、今回の発掘区の西側に広がる台地上には、同時代の多数の住居跡がかなりの密度で分布していることは確実と思われる。今回は、その大集落の東端のごく一部を明らかにしたものといえる。

5軒の住居跡は、竪穴の平面プラン(隅丸、胴張りの程度)の類似から、たがいに近い時期の住居とみてまちがいない。この中ではSI-002が小判形に近いプランをもち、時期がさかのぼる可能性を示唆する。 覆土中の出土ではあるが細縄文を施された弥生土器片が検出されており、住居の廃絶が弥生期のうちにあった可能性は十分考えられる。

ほかの4軒でも、その住居で使われていた土器が遺留されたとみられるものは出土していない。その中でSI-001では完形に復元された台付甕3個が出土した。何らかの事情で、住居埋没の早い段階でもたらされたもので、住居廃絶の時期と土器の年代は近いと思われる。2個は大型の甕で、口縁部の外反が緩やかで、いわゆる「くの字状」口縁とはならず、頸部内面にも稜は認められない。小型甕を含め口唇部にはどれも刻み目があり、装飾的要素をとどめている。弥生終末期から古墳時代でもかなり早い段階の所産であることをうかがわせる。

ほかの住居でも、小型器台や小型坩を伴わず、甕の破片は口唇部に刻み目をもつものが多く、異条斜縄 文などで飾られた壺形土器の破片を伴っている。これらのことから5軒の住居はいずれも弥生終末期に営 まれた可能性が高く、どんなに下っても古墳時代のごく早い時期までには廃絶したものと結論して誤りな いと思われる。

住居の配置には特に計画性は認められず、一時期に何軒が併存していたのかも分からない。中ではSI-004は最も規模が大きく、4個の主柱穴を完備するなど整然とした造りを示すが、ほかの住居から隔絶した存在とまではいえない。総じて、周辺地域における同時期の住居遺構と異なることのない通有の住居群といえる。

縄文をもつ壺形土器片はいずれも細片で、全形をうかがうに足る資料はないが、どれも頸部があまりす ぼまらない北関東系に属すものと思われる。これに対し、南関東に通有の壺形土器は認められず、東海、 畿内系統の弥生土器、古式土師器なども確認されない。基本的に在地色の強い、印旛沼周辺地域に通有の 土器組成を示すものといえよう。

住居跡以外に集落と同時期と認められる確実な遺構は存在しない。土器以外の同時代遺物もなく、農耕 集落の一部にはちがいないとみられるものの、集落の形成の過程や性格などの解明は今回の部分的な調査 では明らかにできない。

2 土坑群について

住居跡以外の遺構としては40基の土坑が検出された。うち3基は明らかに近世以降の炭窯であった。ほかに時期が特定できるものは縄文時代の炉穴3基(SK-037、038、006)で、土器片は茅山式かとみられるものが1片出土しただけだが、同種遺構の盛行時期からみても、縄文時代早期末に営まれたものである

可能性が高い。表土中採集遺物の中にも条痕文系の土器片は比較的多く見いだされ、この時期にある程度 定住的な生活が開始されたことをうかがわせる。SK-021でも浮島系の土器片が一点出土しているが、細 片であり、出土状況も不明なため土坑の時期をおさえる資料とはみなしがたい。

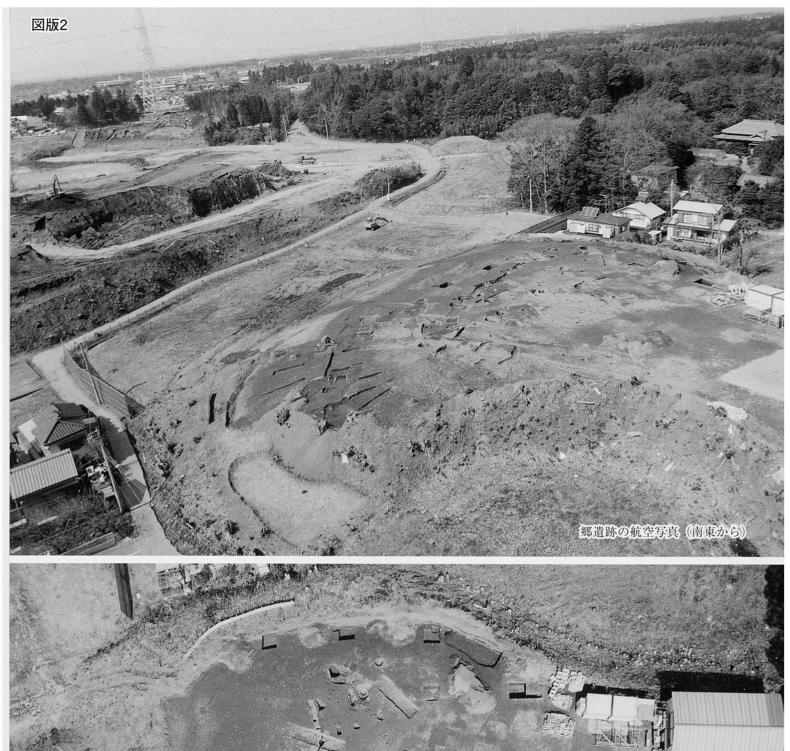
ほかには、長方形ないし長円形プランの土坑が多く(17基)あったのが注意された。これらは、台地の 南側斜面部に位置し、ほぼ例外なく主軸方位を北西から北北西方向に向け、また、5軒の竪穴住居と重複 するものはなかった。このことから、これらの土坑が住居の居住者たちによって計画的に設置された可能 性も考えられないことではない。ただ、集落と同時代の遺構であればその時期の遺物や、それ以前の縄文 土器などが混入しているはずだが、それらの出土が皆無であることから、その可能性は低い。遺物皆無と いう事実を重視し、定住的生活の開始期(縄文早期末)以前の遺構とみるのが至当であり、縄文早期末以 前の陥穴と考えておきたい。

これ以外の土坑についても遺物が皆無に近く、すべて性格不明とするしかない。

今回の調査で、遺構検出作業に伴って表土中から採集された遺物に、集落の時期より新しい遺物がほとんど認められない点が注意される。奈良・平安期の土師器や中近世の陶磁器片などはほとんど採集されていない。このことは、弥生末から古墳時代初頭の集落が廃絶したあとは、台地上が生活の場として利用されることのなかったことを物語る。農地としての利用でも、もう少し後世の遺物が残されていてよいと思われる。炭焼窯の存在も土地利用の実態を推察させるものといえよう。

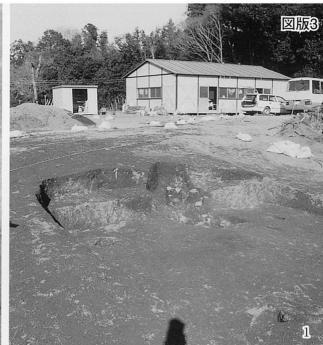
写 真 図 版











1. SI-001全景

2. SI-001のカマド内遺物出土状況



3. SI-004全景



4. SI-004カマド部分



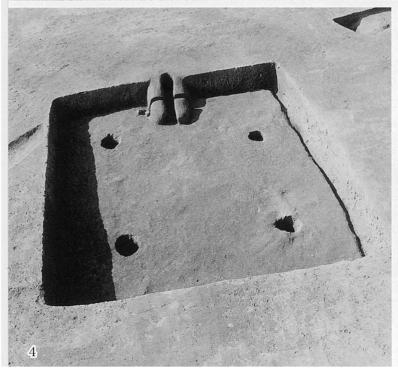




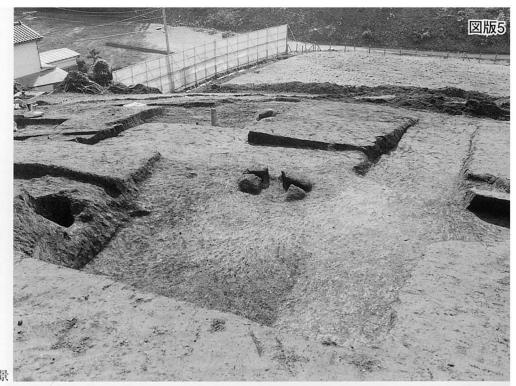
1. SI-006全景 2. SI-006貯蔵穴内遺物出土状況



- 4. SI-009全景
- 5. SI-009カマド部分







1. SI-010全景



2. SI-010遺物出土状況全景



3. SI-010遺物出土状況近景 (中央に鋤先形土製品が見える)



1. SI-011全景



2. SI-012全景



3. SI-014全景



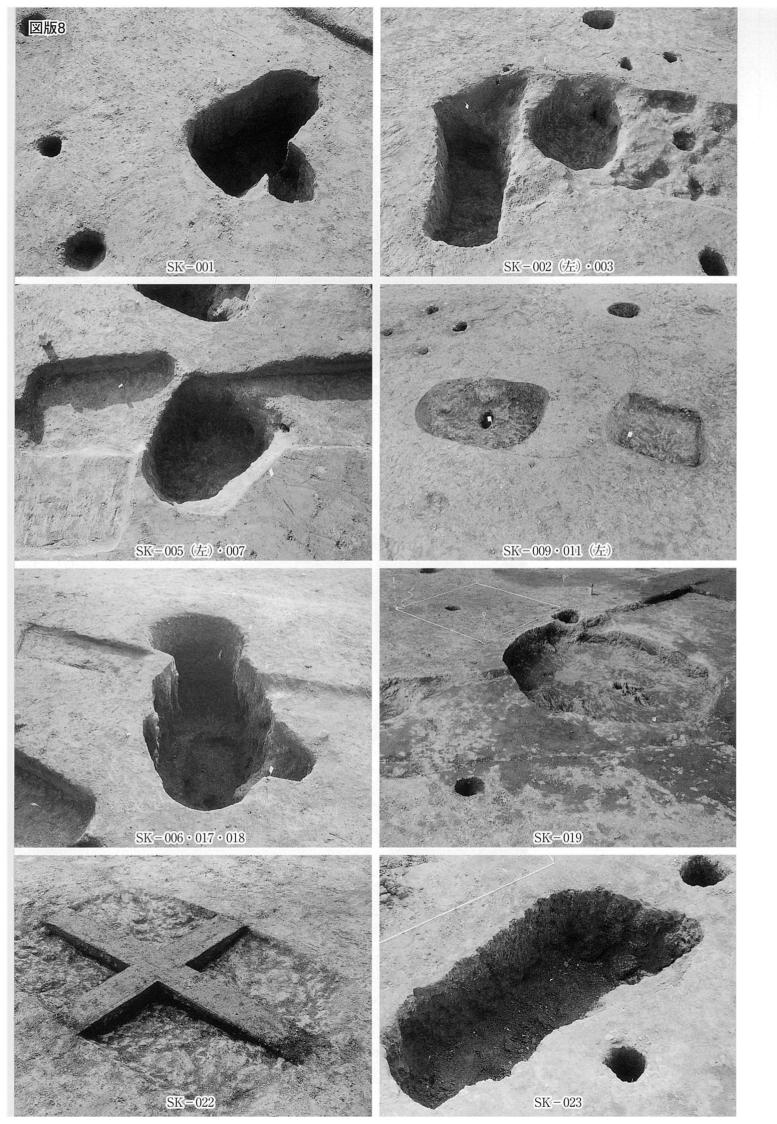
1. SI-015全景、 SI-016カマド (手前)



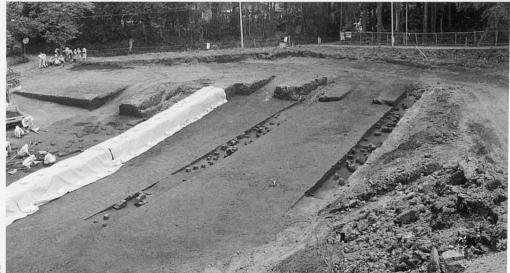
2. SI-017、018 (手前の竪穴) とSI-019全景



3. SI-020全景







1. B地点発掘状況



2. B地点トレンチ近景



1. C地点発掘前の全景



2. C地点上段遺構全景 (東から)



3. C地点上段遺構全景 (西から)



1. SK-037



2. SK-037覆土断面



3. SK-040







1. SI-101全景



2. SI-101遺物出土状況



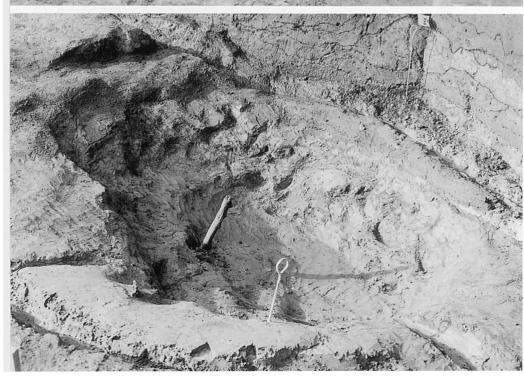
3. SK-152・136・110の配置



1. SK-110杭と横材(上半部)



2. SK-110杭と横材 (下半部)



3. SK-110完掘状態



1. SD-101



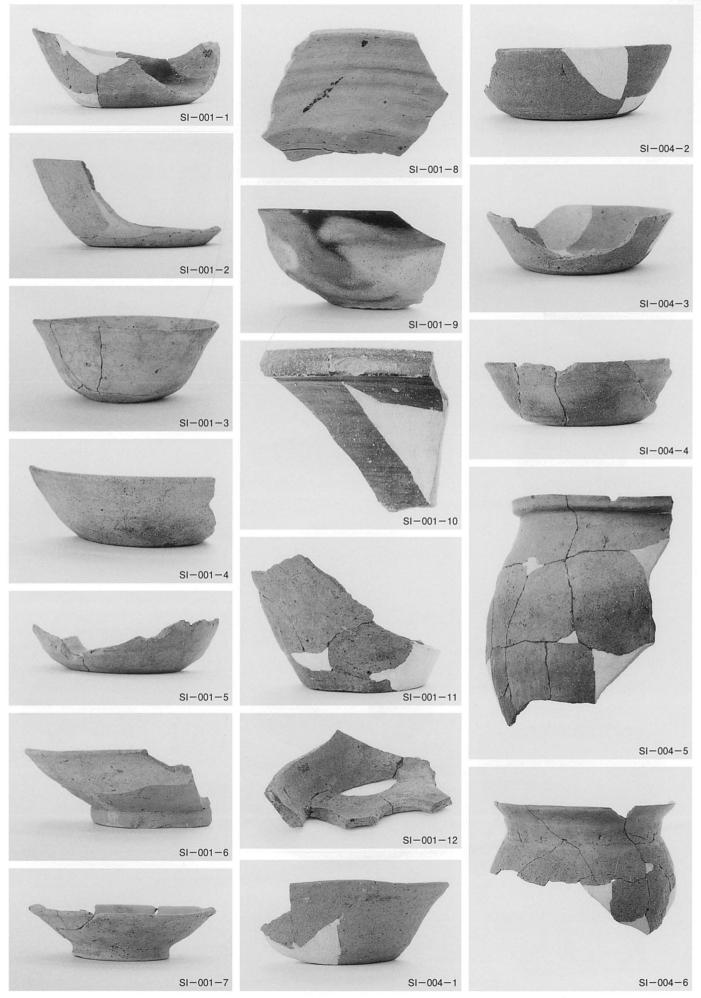
2. SD-102 SK-110からの流入部 (溝の外に杭が1本見える)

3. SD-102 (溝脇の杭列)

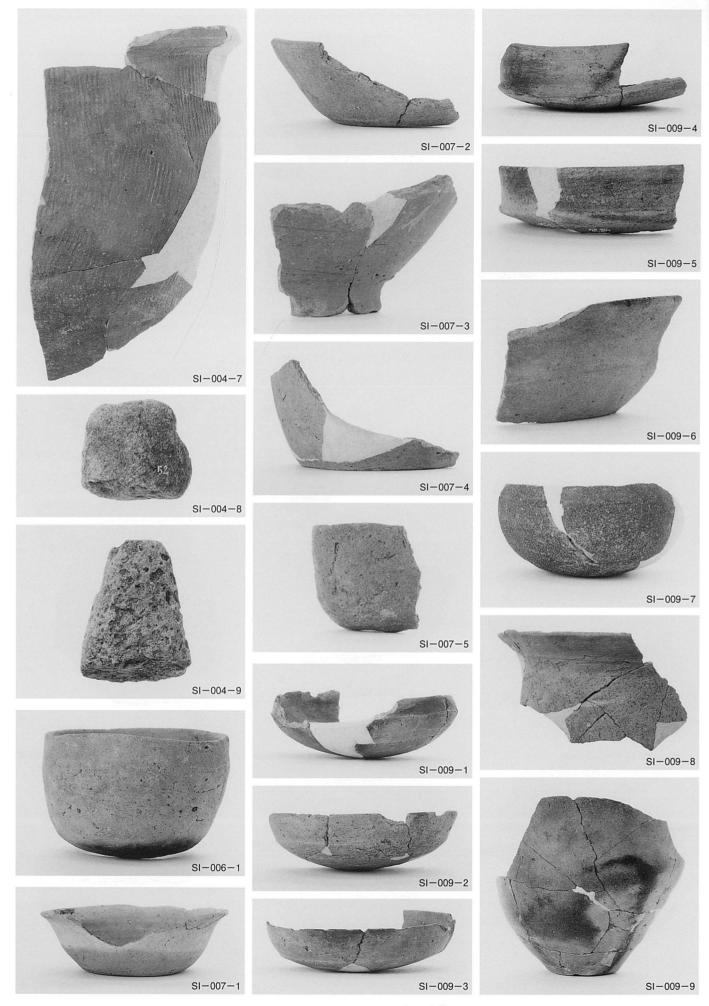


4. 掘建柱建物の西北を限る溝と 周囲の土坑

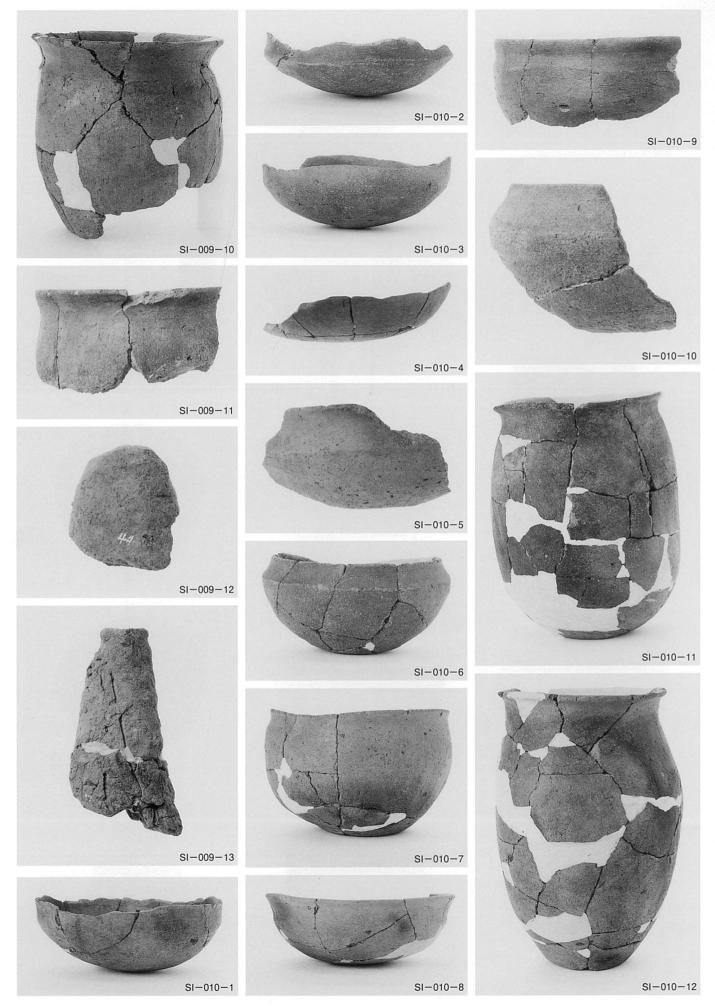




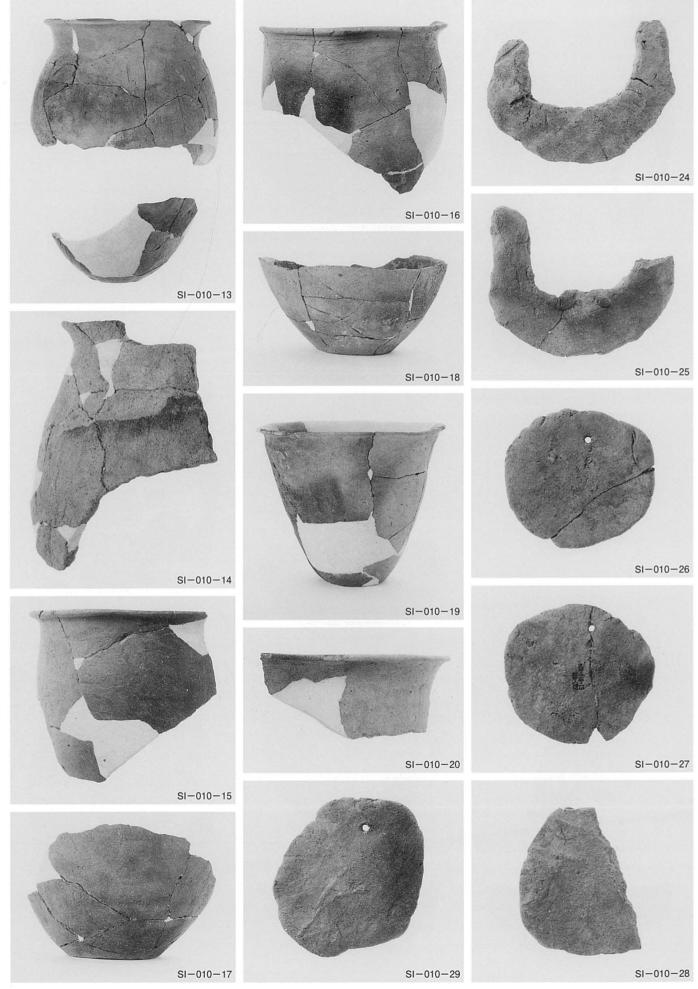
SI-001·004出土土器



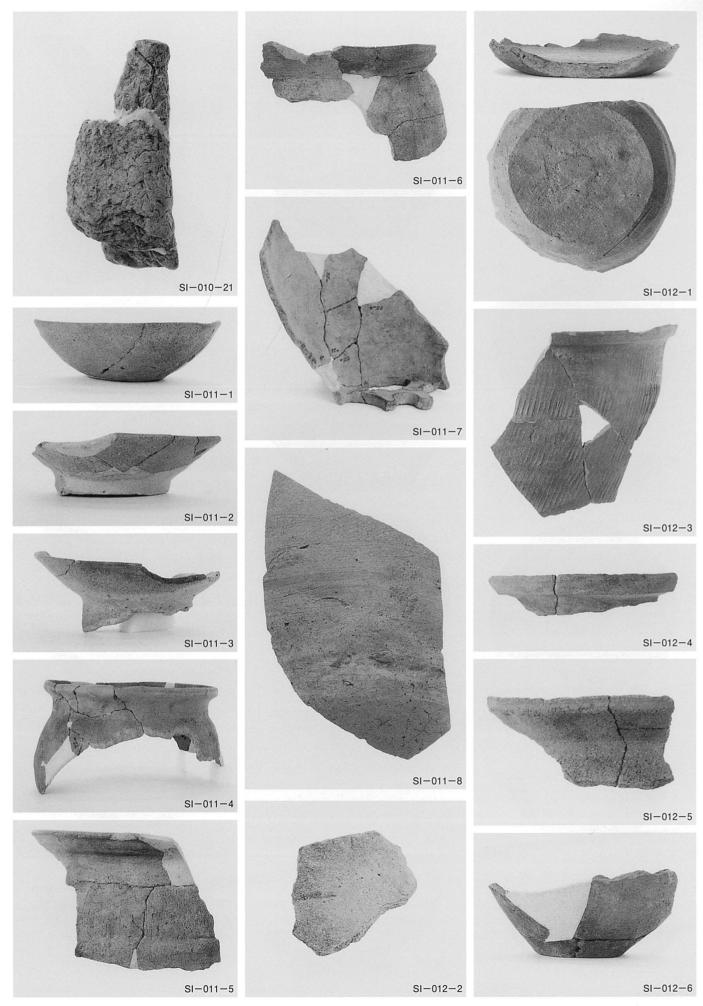
SI-004 · 005 · 007 · 009出土遺物



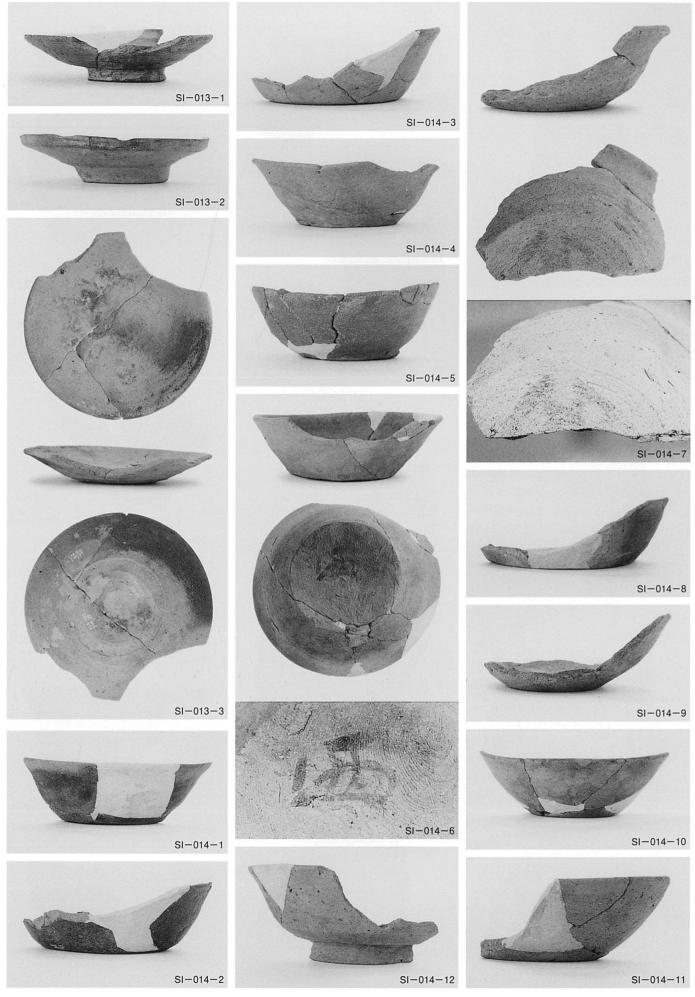
SI-009·010出土遺物



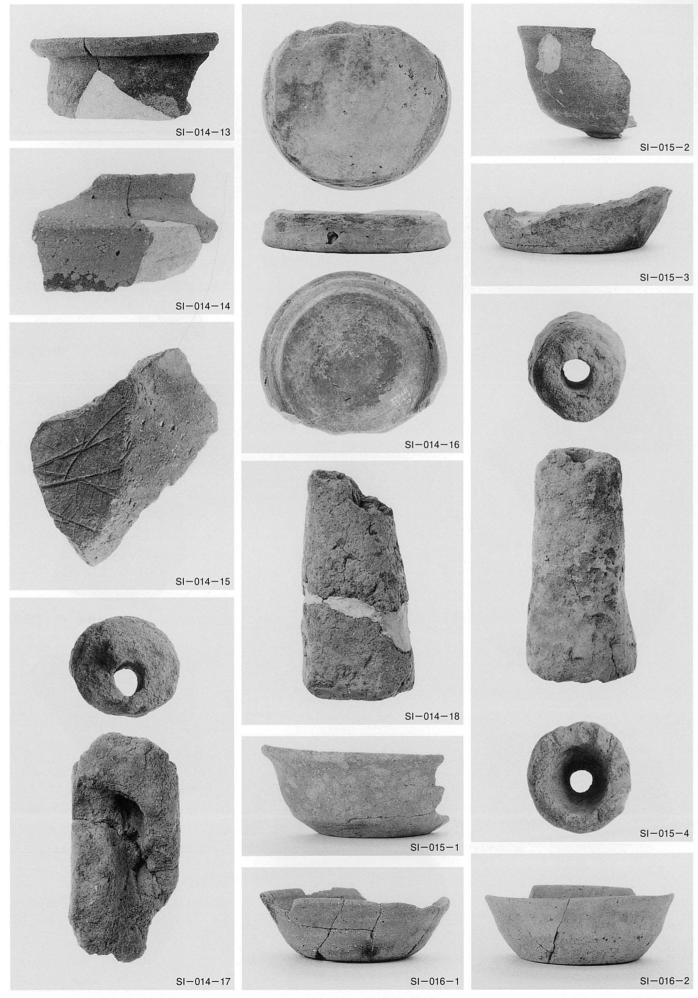
SI-010出土遺物



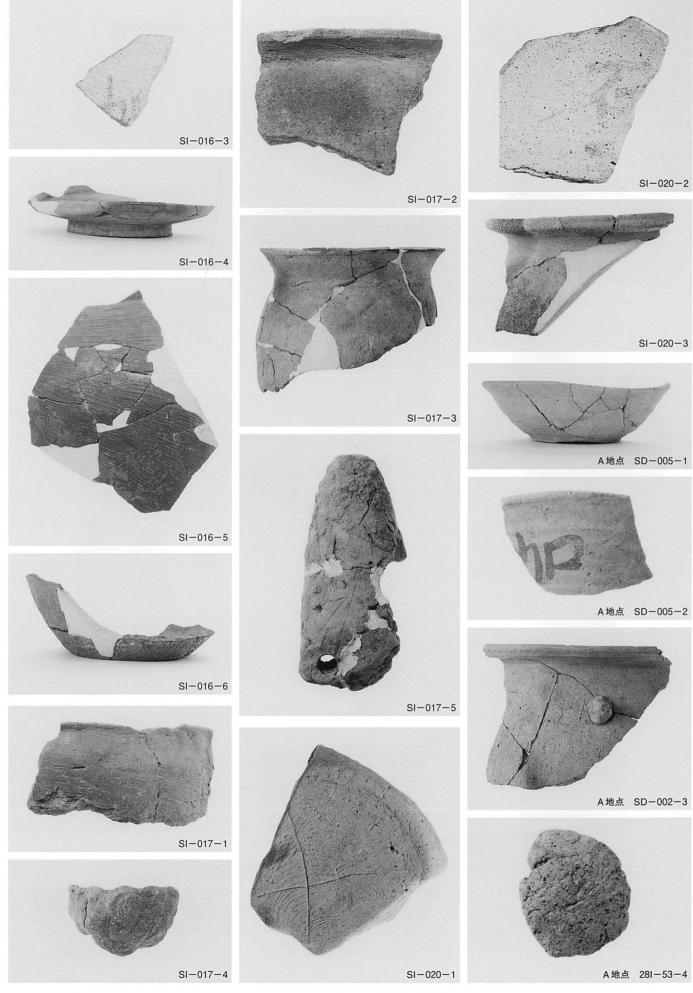
SI-010 · 011 · 012出土遺物



SI-013·014出土遺物



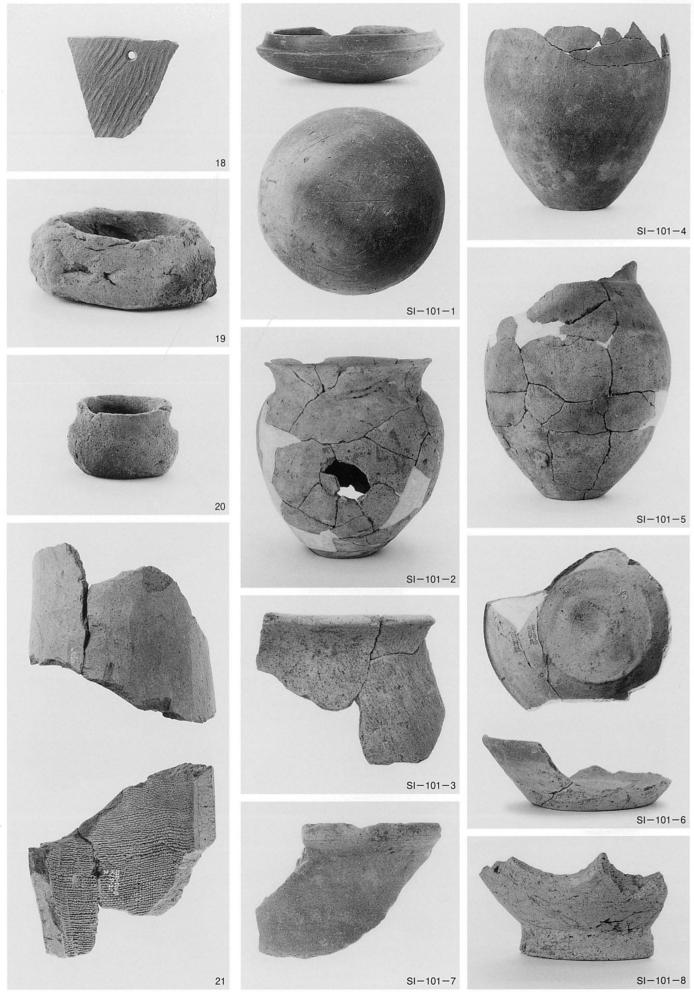
SI-014 · 015 · 016出土遺物



SI-016 · 017 · 020 · A地点出土遺物

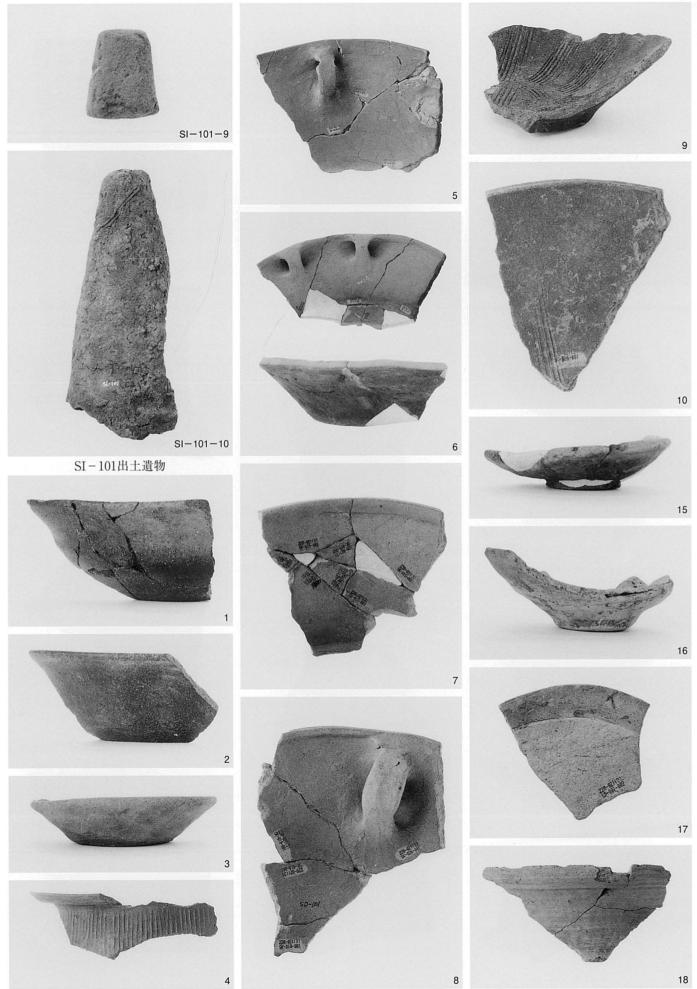


B地点出土土器

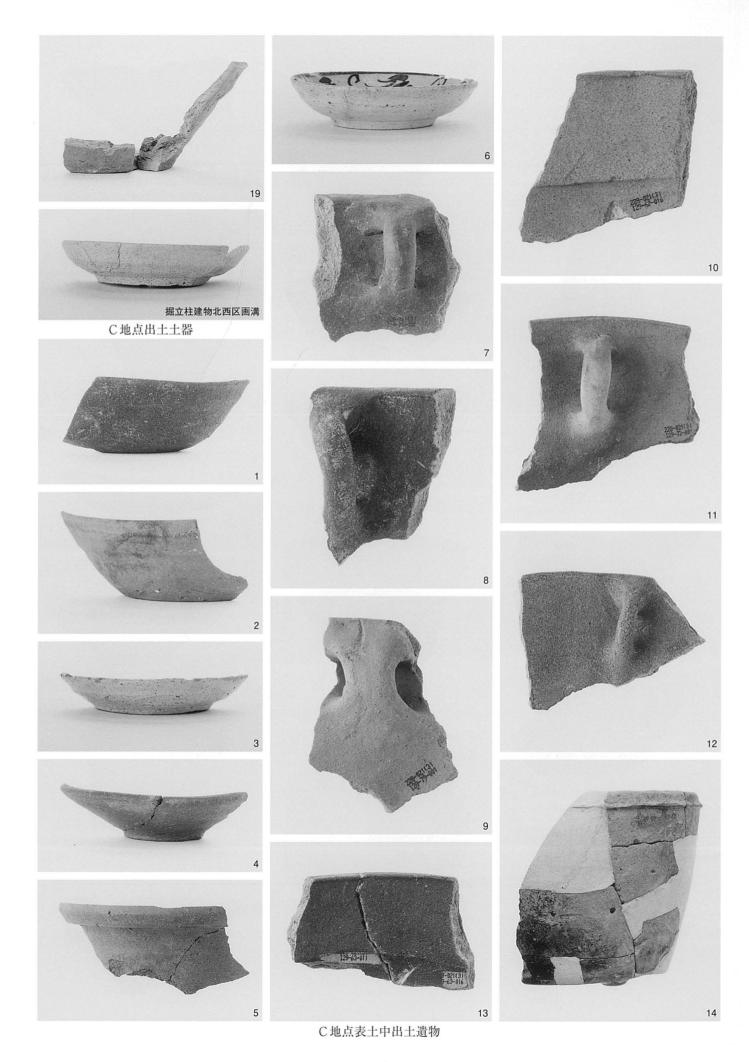


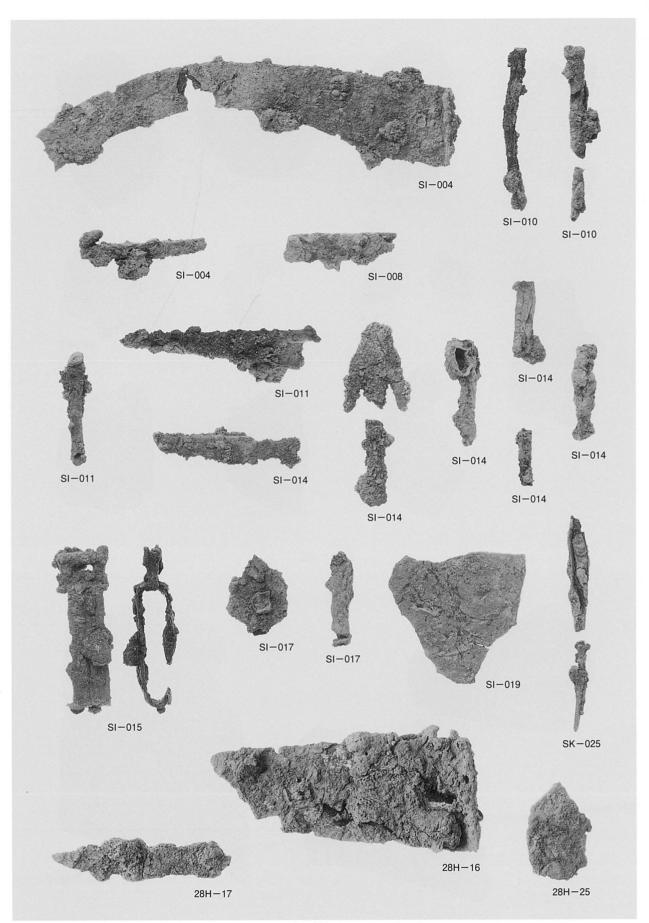
B地点出土遺物

SI-101出土土器

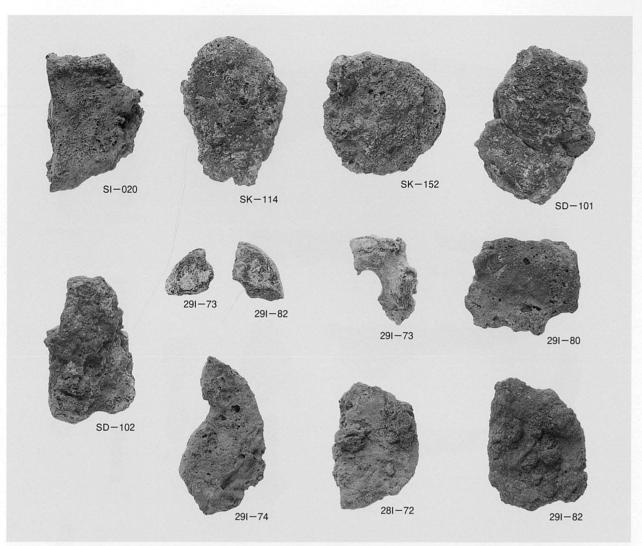


C地点出土土器

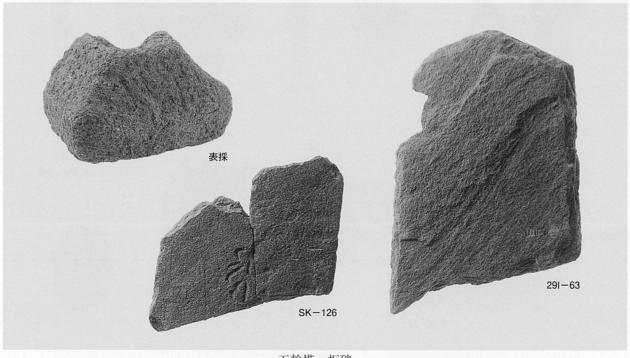




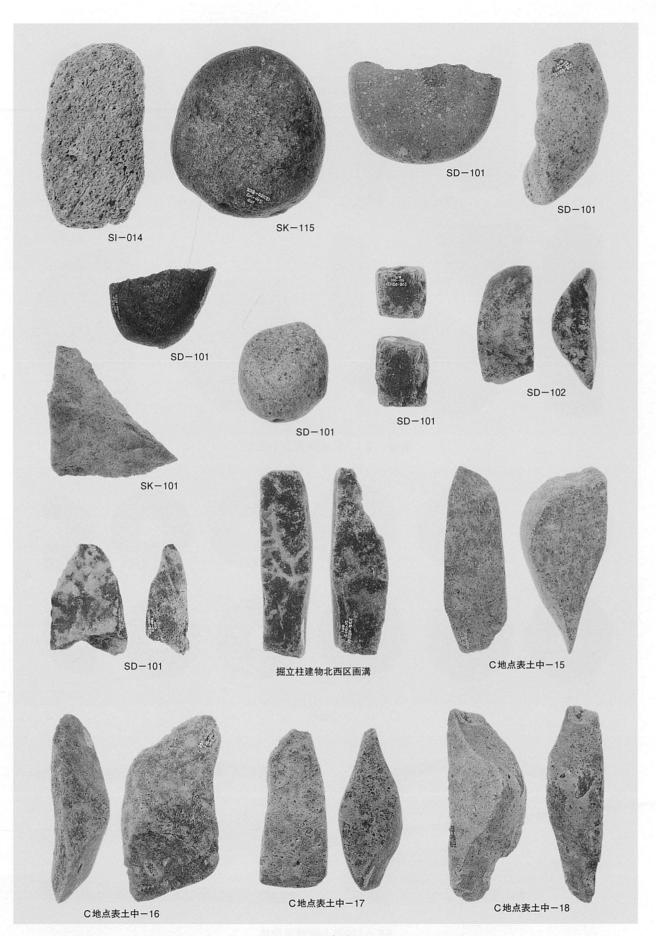
鉄器



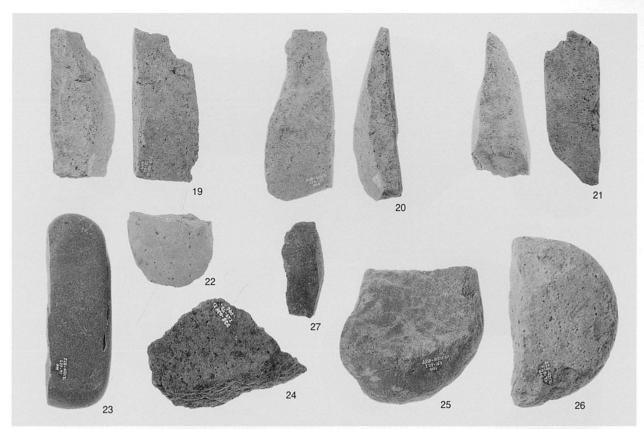
鉄滓・羽口



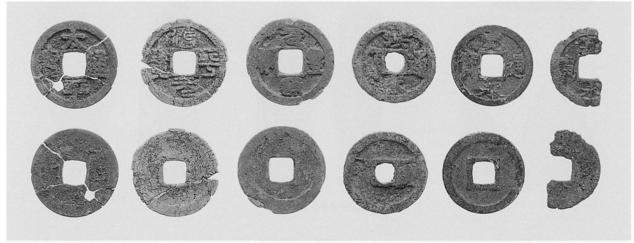
五輪塔・板碑



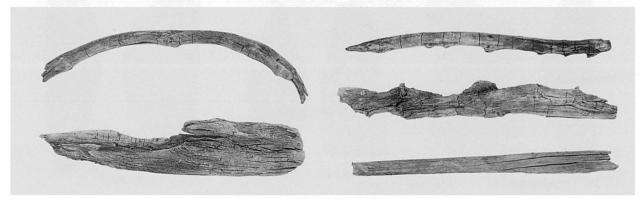
石器 (1)



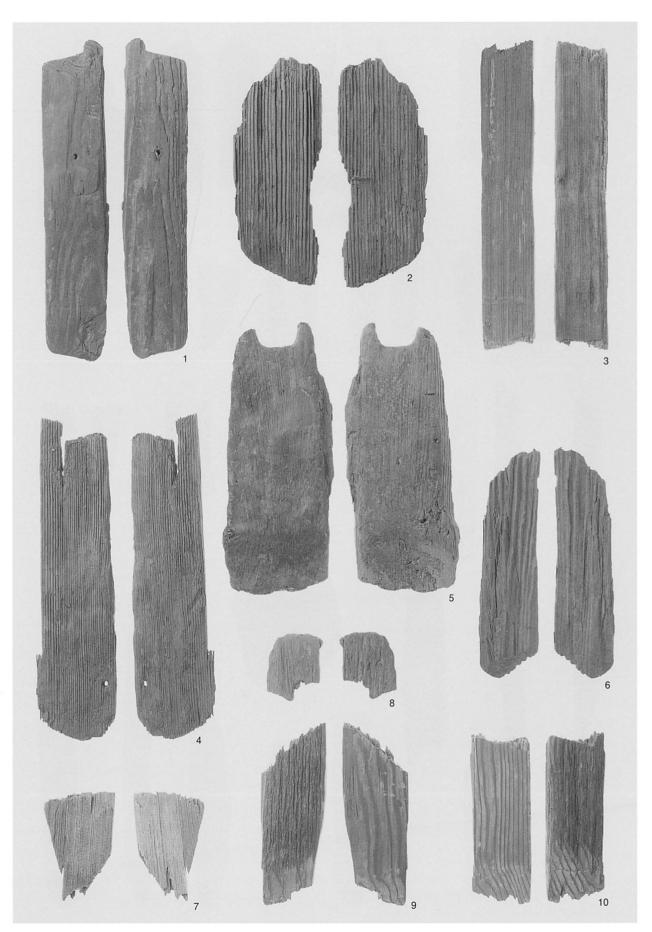
石器(2)(C地点表土中出土)



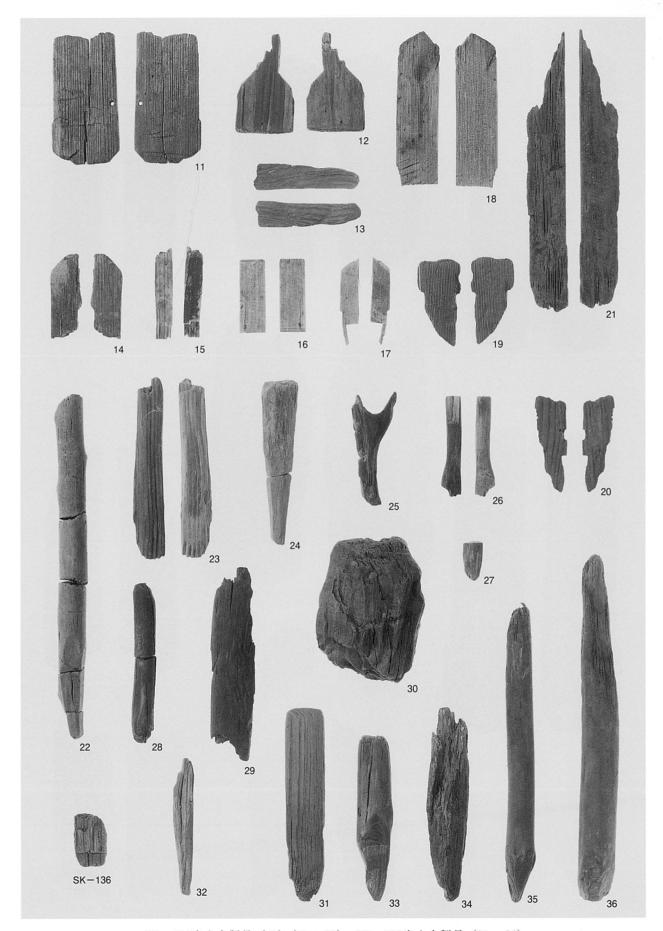
銅銭



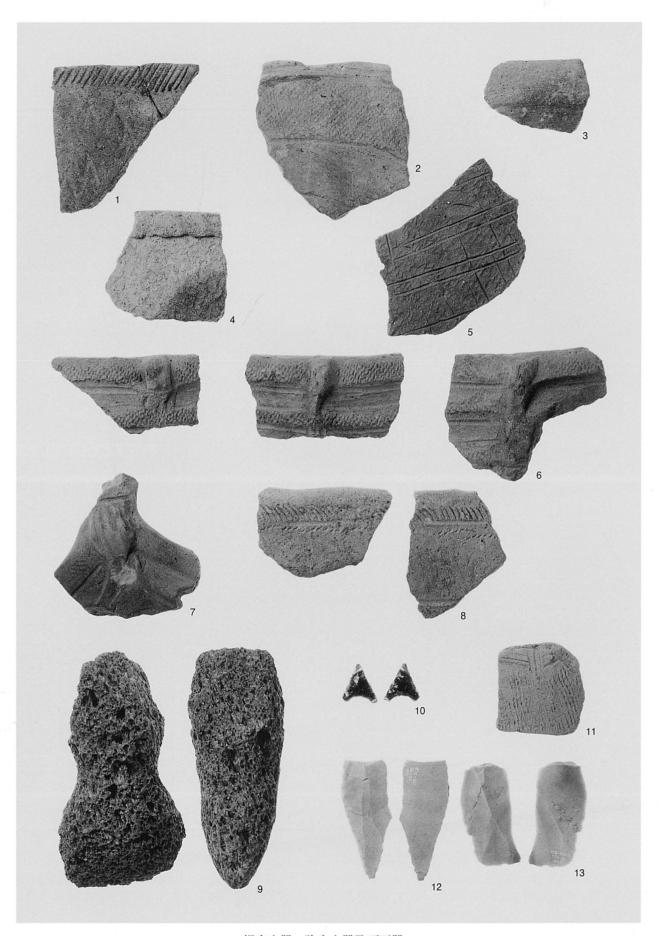
SK-110出土横材及び杭



SK-110出土木製品(1)



SK-110出土木製品(2) $(11\sim30)$ 、SD-102出土木製品 $(31\sim36)$



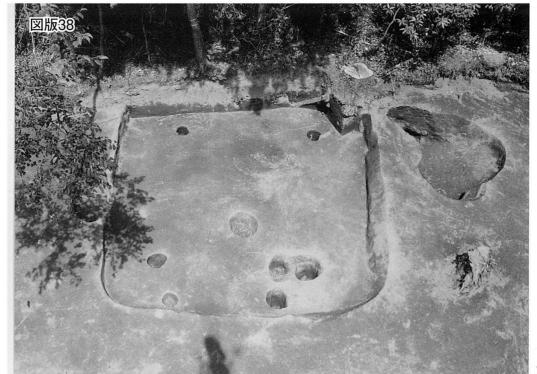
縄文土器・弥生土器及び石器











1. SI-001全景



2. SI-001遺物出土状況



3. SI-001遺物出土状況近景



1. SI-002全景



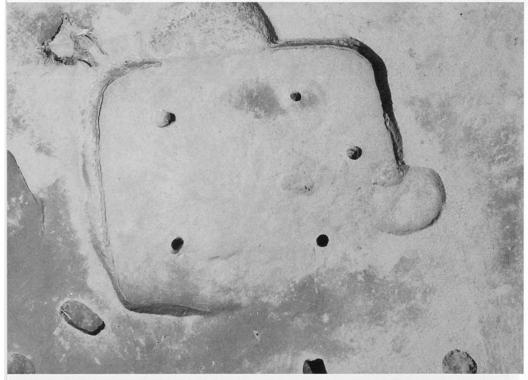
2. SI-002炭化材出土状況



3. SI-003全景



1. SI-003遺物出土状況



2. SI-004全景



3. SI-004全景



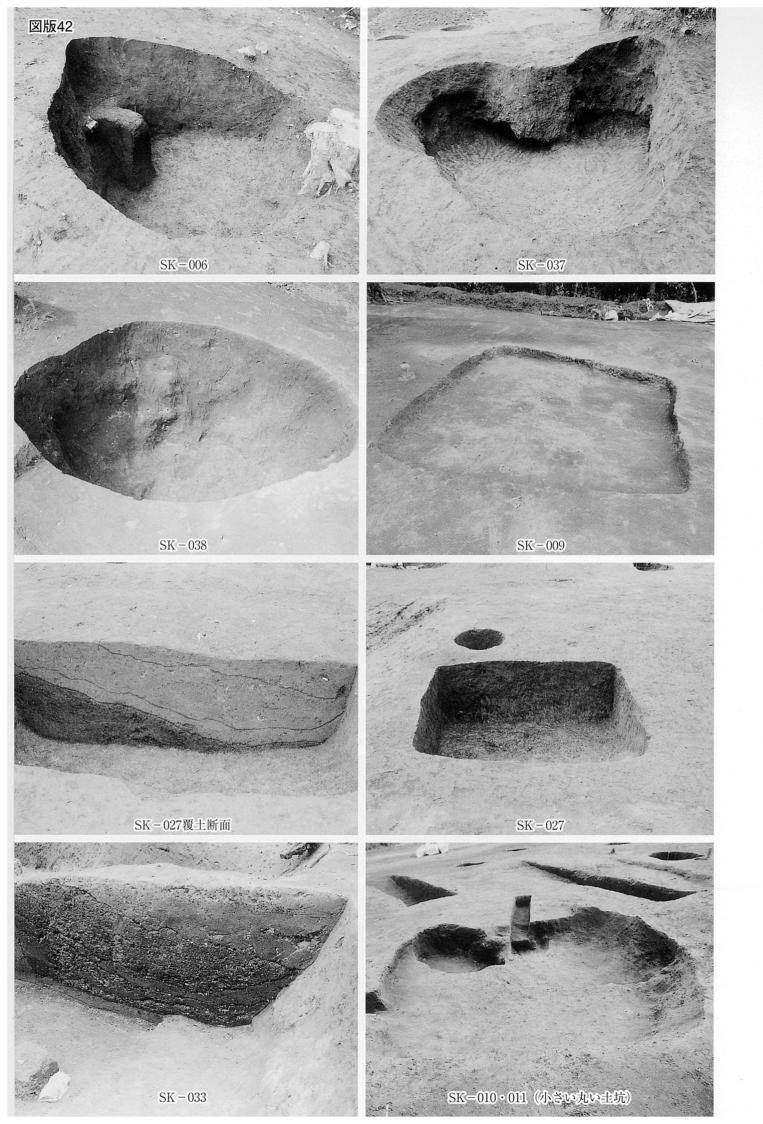
1. SI-004遺物出土状況

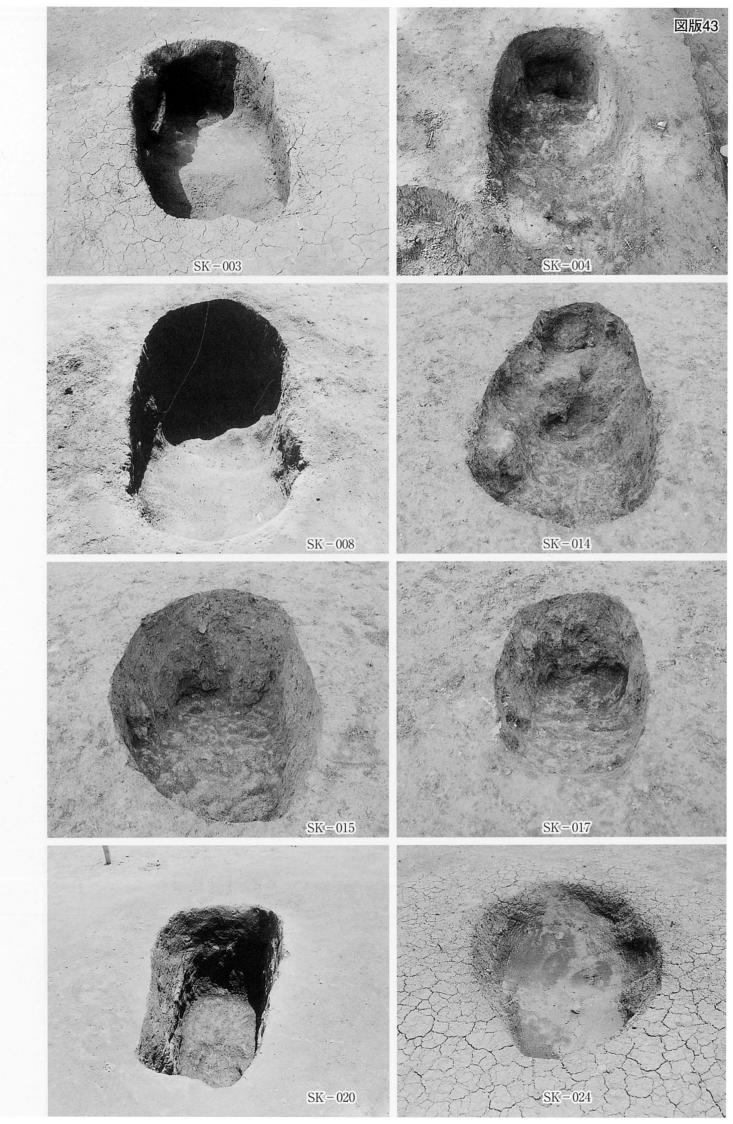


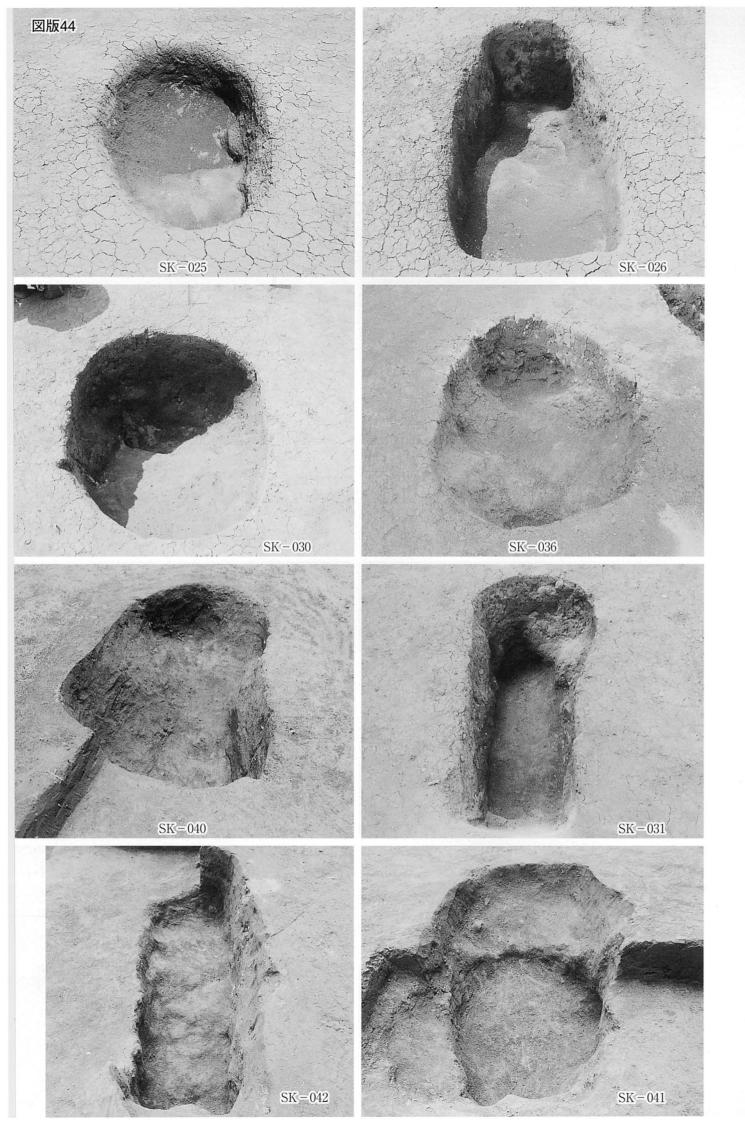
2. SI-005全景

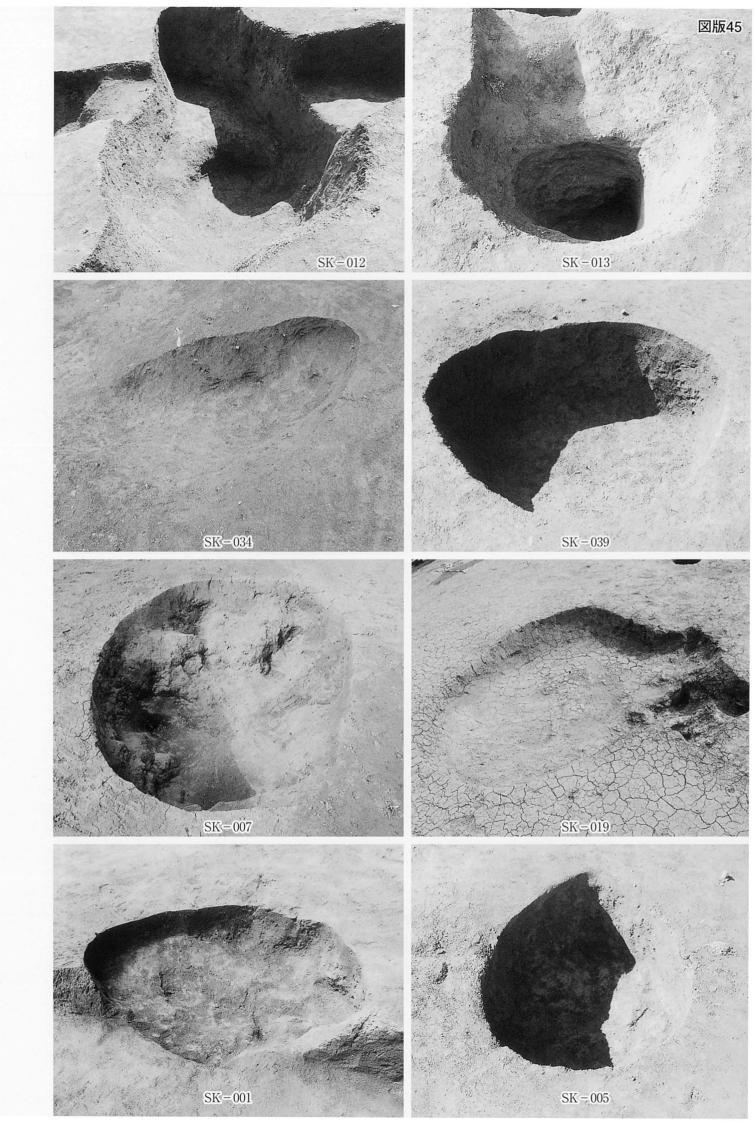


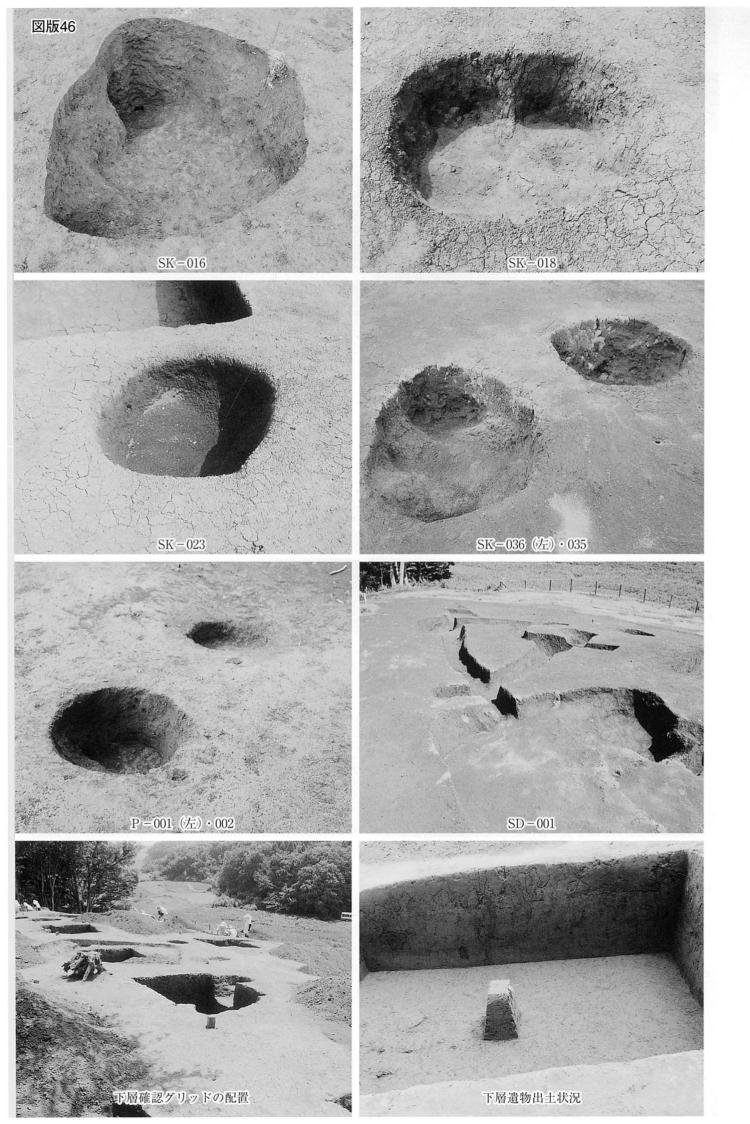
3. SI-005遺物出土状況

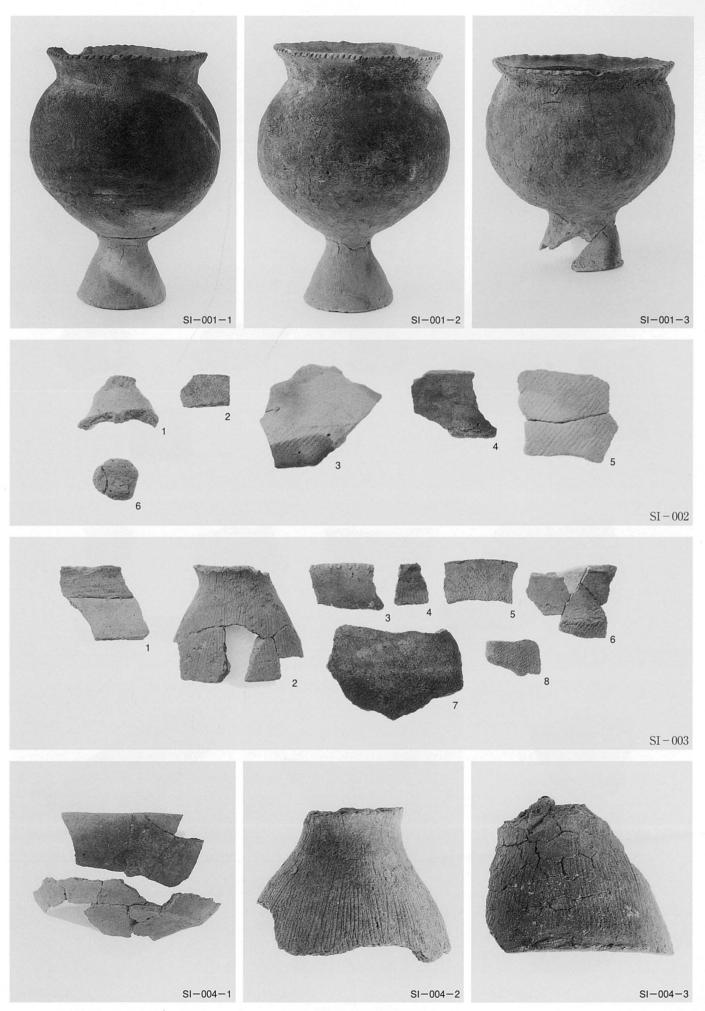




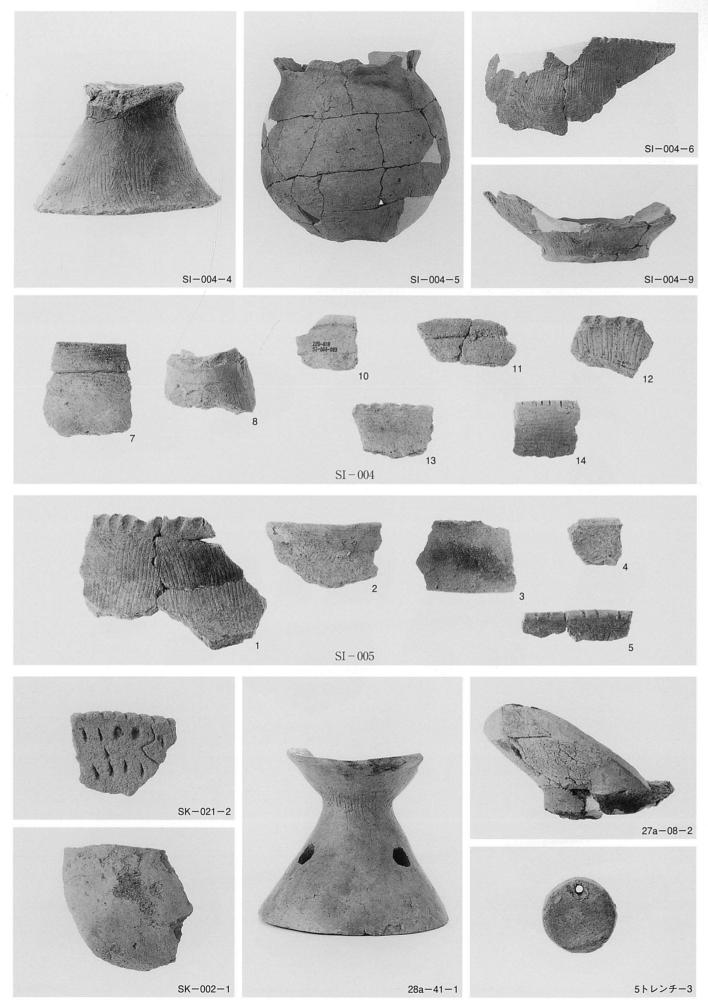




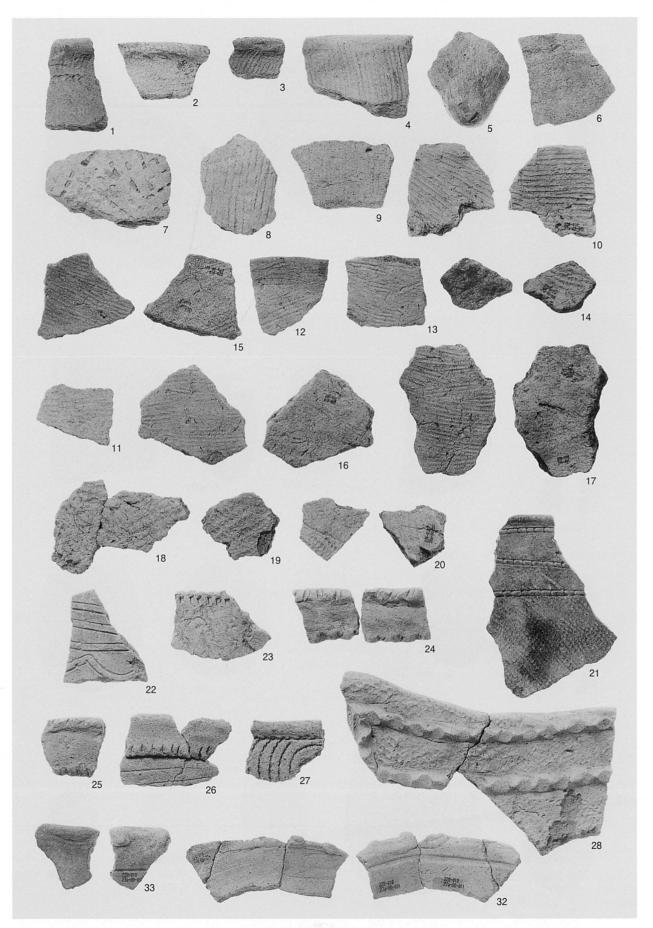




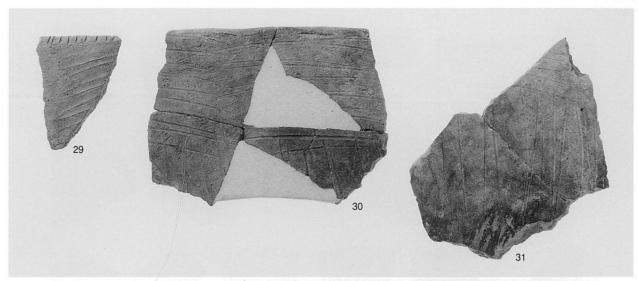
SI-001 · 002 · 003 · 004出土土器



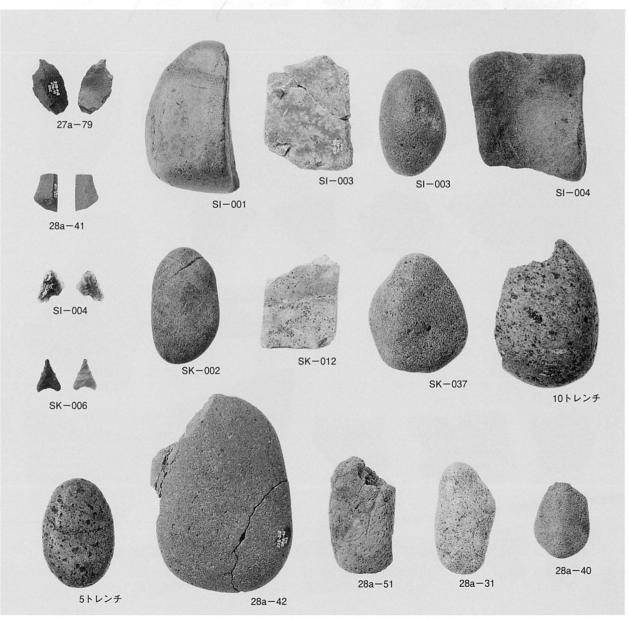
SI-004・005ほか出土土器・土製品



縄文土器(1)



縄文土器 (2)



石器

報告書抄録

				和 台 音	72							
ふりがな	よつかいどうしごういせき・なかくきいせき											
書 名	四街道市 郷遺跡・中久喜遺跡											
副 書 名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書											
巻次	VI											
シリーズ名	千葉県	收育振興財団調	£報告									
シリーズ番号	第605集	:										
編著者名	沼澤 豊											
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団文化財センター											
所 在 地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-422-8811											
発行年月日	西暦200	西暦2008年9月9日										
· 新収遺跡名	所在"地		市町村	- ド 遺跡番号	北約	草 東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因			
また 地できた 郷遺跡	มอกเชีย 1 4の い 四街道市物井838 - 1		12228	28 021		度 140度	19980107~ 19980326 19980401~ 19980512 20010201~ 20010228	5,600 1,700 1,050	独立行政法人都市 再生機構物井地区 土地区画整理事業 に伴う埋蔵文化財 調査			
中久喜遺跡	四街道下	市物井1240-1	12228	018	35度 41分 40和	} 11分	19960601~ 19960809	3,100 計11,450				
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構			 Èな遺物		特記事項			
郷遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴位	竪穴住居跡 5 軒		土師器、土製品(模造品・		7.				
		奈良・平安時代	竪穴(主居跡 12車	•	器、土製	海土師器、須品(鞴羽口、 品(鎌羽口、 提品(鎌・刀号 石	支	台地斜面下部で古墳時代			
		中・近世	坑 (; 等) 彡 (井戸 排水流	多数、水場遺 可、木組遺構 構) (地下式坑 2	京構 構		匐器、鉄滓、₹ 片・砥石・川		と中・近世の生活跡及び			
	包蔵地	旧石器~中・近	世なし	なし		ナイフ形石 布目瓦等	5器、縄文土器	묻,				
中久喜遺跡	集落跡	弥生~古墳時代	土坑土坑	竪穴住居跡 5 軒 土坑 42基		弥生~古元 縄文土器等		縄文の	縄文の炉穴3を含む			
要約	く。台地 が特筆さ	也斜面下部で古墳	t時代までさ t跡は、物ま	さかのぼる可 中地区では希	「能性 5少な	のある水場 弥生末期な	場と、その周囲	用での生活路	部は発掘区の東に続 亦が確認されたこと で、集落本体は発掘			

千葉県教育振興財団調査報告第605集

四街道市郷遺跡・中久喜遺跡

一物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—

平成20年	9	月	9	日発行

編 集 財団法人 千 葉 県 教 育 振 興 財 団 文 化 財 セ ン タ ー

発 行 独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社

千葉市美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県教育振興財団

四街道市鹿渡809番地の2

 印
 刷
 株式会社
 正
 文
 社

 千葉市中央区都町1-10-6